佐久市埋蔵文化財調査報告書　第157集

寄塚遺跡群

寄　塚　遺　跡

長野県佐久市横和寄塚遺跡群寄塚遺跡発掘調査報告書

2008.3
佐久建設事務所
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第157集

寄塚遺跡群

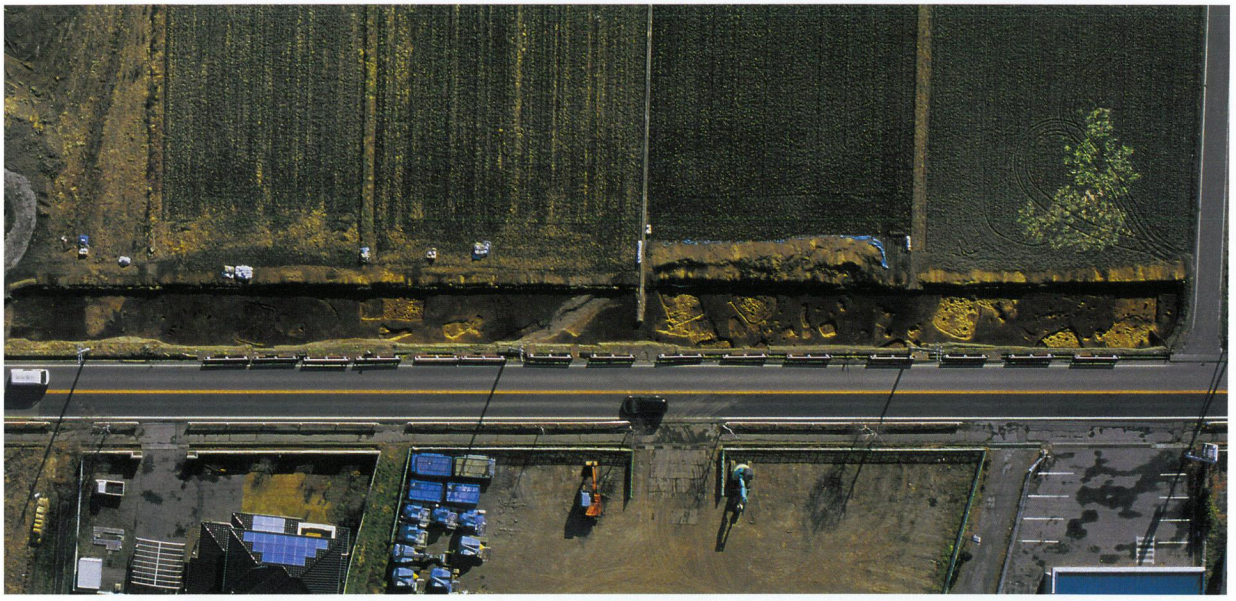
寄　塚　遺　跡

長野県佐久市横和寄塚遺跡群寄塚遺跡発掘調査報告書

2008.3
佐久建設事務所
佐久市教育委員会

寄塚遺跡群遠景（背景は浅間山・上信越自動車道・北陸新幹線が横切り、蛇行する湯川。中部横断自動車道の輪郭がわかる。）

寄塚遺跡　全景



寄塚遺跡調査区西側

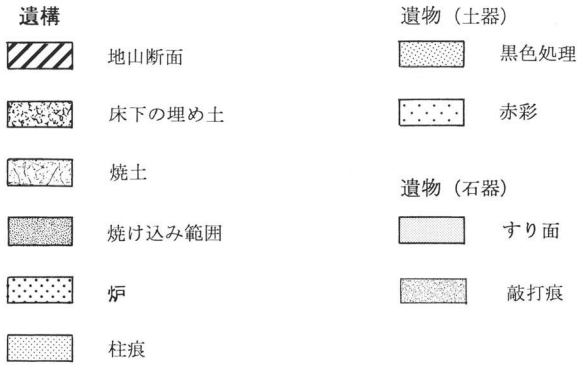
寄塚遺跡調査区東側

例　　言

1．本書は、佐久建設事務所が行う県単道路改築事業（一）上原猿久保線佐久市今井（1）に伴う寄塚遺跡群寄塚遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査原因者　　佐久建設事務所
3．調査主体者　　佐久市教育委員会
4．遺跡名及び所在地　　寄塚遺跡群寄塚遺跡（ＹＹＹ）
　　佐久市横和555-7他
5．調査期間及び面積　　発掘調査　平成17年10月17日～平成17年12月26日
　　整理作業　平成19年７月13日～平成20年３月19日
　　調査面積　2,347㎡
　　開発面積　1,598㎡
6．調査担当者　　林　幸彦　　佐々木宗昭　　森泉かよ子
7．本遺跡の報告書作成は遺構・遺物の写真図版を佐々木が、他は林が行った。石材鑑定は羽毛田が行った。
8．調査から報告書作成に至るまで以下の方々と各機関のご指導ご協力を頂いた。記して厚くお礼申し上げる。(順不同・敬称略)
　横和区長　依田三男　　(財)長野県埋蔵文化財センター　　(株)ネクスコ東日本
　佐久考古学会　　地元横和区の皆さん
9．本書及び出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　　例

1．遺構の略記号は、竪穴住居址（H）・掘建柱建物址（F）・土坑（D）・溝状遺構（M）である。
2．挿図の縮尺は次のとおりである。下記以外の物については挿図中にスケールを示す。
　竪穴住居址・掘建柱建物址１／80　炉１／20　土坑１／60　　土器・石器１／４　鉄器１／３
　上記以外については、個々にスケールを記載した。
3．遺構の海抜標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」として示した。
4．土層・遺物胎土の色調は、1988年版『新版　標準土色調』に基づいた。
5．調査区グリットの間隔は４×４ｍに設定した。
6．スクリートーンの表示は以下のとおりである。



目　次

口絵
例言
凡例

第Ⅰ章　調査の概要
　第１節　調査の経緯と経過 ---------- 1
　第２節　調査体制 ---------- 1
　第３節　調査日誌 ---------- 2
　第４節　遺跡の位置と周辺遺跡 ---------- 3
　第５節　基本層序 ---------- 4
　第６節 遺構と遺物の概要 ---------- 4

第Ⅱ章　遺構と遺物
　第１節　竪穴住居址 ---------- 5
　第２節　掘建柱建物址 ---------- 33
　第３節　土坑 ---------- 35
　第４節　溝状遺構 ---------- 38
　第５節　ピット ---------- 42
　第６節 遺構外出土遺物 ---------- 42
　第７節 寄塚遺跡出土の石器 ---------- 44

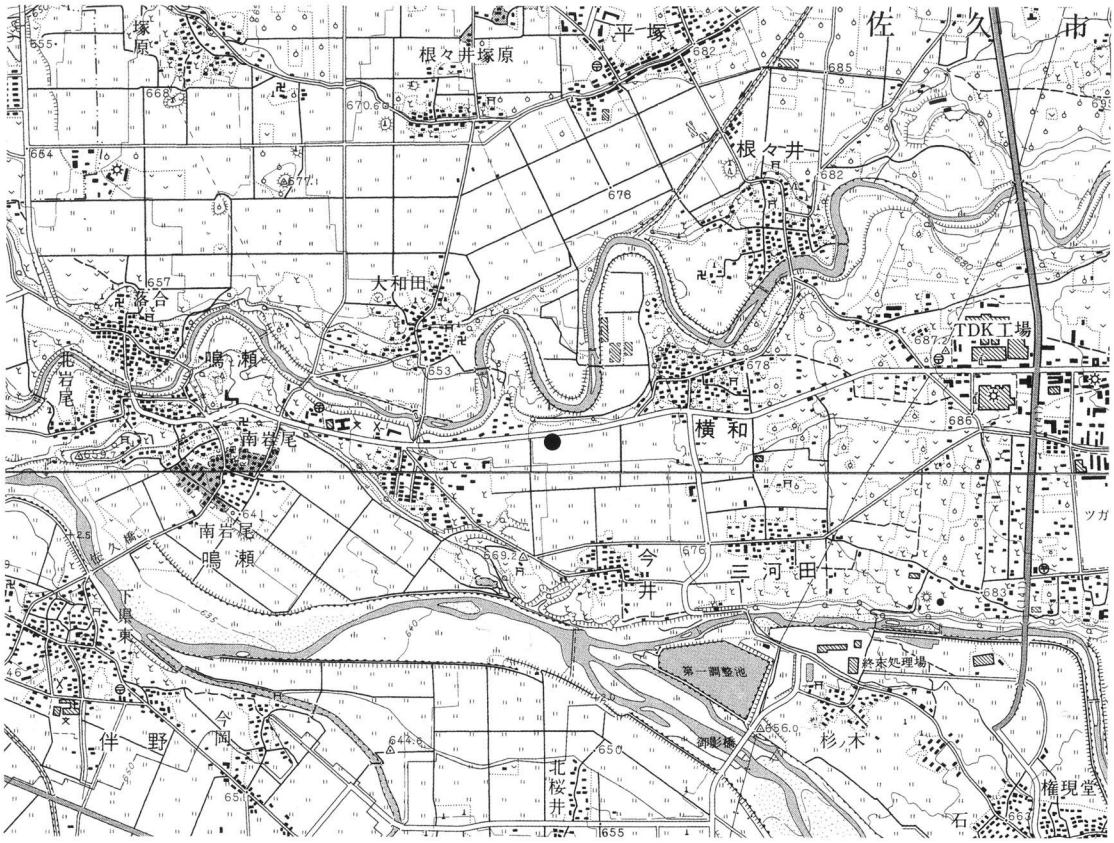
第Ⅲ章　調査のまとめ ---------- 50

写真図版

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　調査の経緯と経過

寄塚遺跡群寄塚遺跡は、佐久市横和に所在し、佐久市の中央部に位置する。湯川の左岸に展開し、標高は670ｍ内外を測る。調査対象地とその南方や西方に水田地帯が拡がっているが、江戸時代初頭に三河田用水が開削されて初めて潅漑が可能となった。水利に乏しい遺跡群の東方は現在も畑作が続けられている。この台地上では圃場整備、宅地造成、道路改良工事、中部縦断自動車道、などにより弥生時代中期、古墳時代、平安時代から中世にわたる遺構・遺物が発掘調査により数多く検出されている。今回、県単道路改築事業（一）上原猿久保線佐久市今井（１）の道路工事が計画された範囲は、寄塚遺跡群内であった。昭和50年代に北西に隣接する横和団地造成時の試掘調査で、100棟を超す弥生時代中期後半を中心とする竪穴住居址が検出されている。佐久建設事務所と当教育委員会で保護協議を行い、拡幅する部分について今回発掘調査を行い記録保存し、現道部分は調査結果を得て再度協議を行うことになった。佐久建設事務所の委託を受け、佐久市教育委員会文化財課が発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成17年10月より行った。調査の結果、検出された住居址等は現道の下部へ延びており、現道築造の影響は受けているものの遺構が残存していることが判明し、報告書の刊行は現道部分の調査後に行うことになった。しかし、平成19年度の保護協議で現道は改良工事を行わないことになり、拡幅部分の調査報告書を作成することとなった。整理作業は平成19年７月に始め、原稿執筆・報告書を刊行した。



第１図　寄塚遺跡群寄塚遺跡位置図（１：25,000）

第２節　調査体制

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長　三石　昌彦（平成17年度）			
		木内　清　（平成19年度）			
事　務　局	教育次長	柳沢　健一（平成17年度）			
	社会教育部長	柳沢　義春（平成19年度）			
	（平成18年度組織改変）				
	社会教育部次長	山崎　明敏（平成19年度）			
	（平成19年度組織改変）				
	文化財課長	中山　悟　（平成17年４月～平成19年６月）			
		森角　吉晴（平成19年７月～）			
	文化財調査係長	高柳　正人（平成17年度）			
		三石　宗一（平成19年度）			
	文化財調査係	林　幸彦	須藤隆司	小林真寿	羽毛田卓也
		冨沢一明	神津　格（平成17年10月～）		
		上原　学	赤羽根太郎（～平成17年９月）		出澤　力
調査体制	調査担当者	林　幸彦	佐々木宗昭	森泉かよ子	
	調査副主任	堺　益子			
	調査員	相澤　昭二	浅沼　勝男	浅沼　君子	赤羽根充江
		阿部　和人	磯貝　律子	市川　昭	上原　悦子
		碓氷　知子	臼田　真杉	小倉　栄子	小幡　弘子
		狩野小百合	北村　亨	木次　順子	小池慎一郎
		小林よしみ	斉藤　恵李	斉藤　俊一	佐藤　瑞希
		佐藤　由枝	清水　末子	清水　澄生	清水　律子
		大工原かつい	大工原達江	田中ひさ子	土屋　和見
		中山　清美	橋詰　信子	橋詰　勝子	羽田　貴恵
		林　まゆみ	林　美智子	広瀬梨恵子	細谷　秀子
		堀籠　保子	森泉こずえ	山元有美子	依田　三男

第３節　調査日誌

平成17年度

平成17年10月17日　器材搬入。トイレ等設置。

10月18日　プレハブ設置。

10月18日～12月２日　調査区道路拡幅部分西側より重機による表土削平。並行して遺構確認・遺構掘り下げ・記録・写真撮影。

11月14日　自動車道より東側の遺構掘り下げに入る。

12月５日～12月９日　遺構覆土から遺物抽出。（削片・細片）

12月５日～26日　調査区重機により埋め戻し。

12月13日　器材撤収

平成19年度

平成19年７月６日～整理作業。注記・復元作業。図面修正・写真整理。取り上げた遺構覆土から遺物抽出作業。

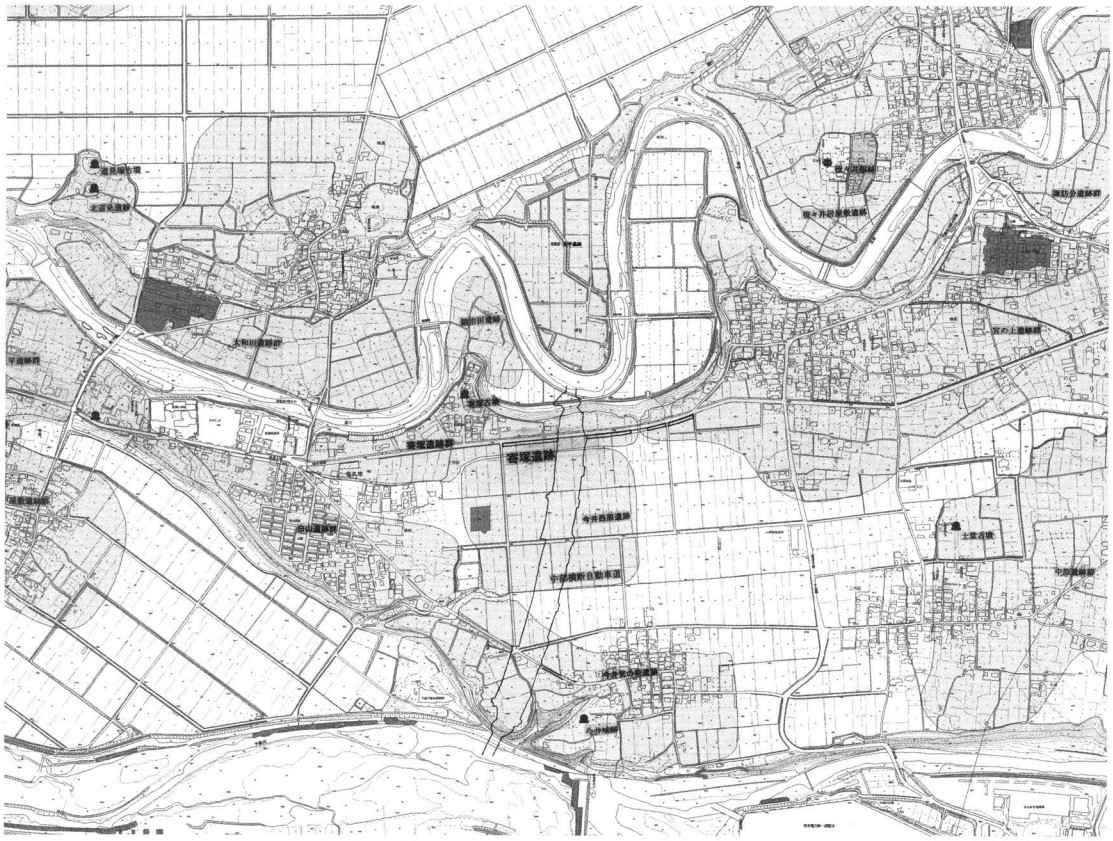
平成19年８月21日～平成20年３月17日　遺物実測・トレス。遺構図面トレス。原稿の執筆、報告書の作成。遺物・図面・写真整理、保管庫へ収納。

第４節　遺跡の位置と周辺遺跡

寄塚遺跡群は湯川と滑津川に挟まれた東西に長い通称中込っ原の台地上にある。この台地は20～30ｍにおよぶ浅間第一軽石流（Ｐ１）に覆われている。Ｐ１の上部には湯川層といわれる基本層序第Ⅵ層の砂層が堆積しており、かつ北の湯川南の滑津川との比高は10～30㎝を測り、水利に乏しく江戸時代初頭に市川五朗兵衛により補完完成したと伝えられる三河田用水堰が開削されて初めて潅漑され、横和・三河田・今井周辺で水田耕作が可能となった。用水の通水以前は、本遺跡南方今井の集落北にみられる湧水を利用した水田だけであった。遺跡群の東方は横和・三河田の集落から長野種畜牧場に至る広大な平地は、現在まで開田されず、畑作が続けられている。本遺跡の2.5㎞東の番屋前遺跡Ⅱで中世の井戸址が掘り下げられ、第Ⅶ層の砂層は地表下７ｍよりさらに下方へ続いていることが判明した。また、本遺跡の南西100ｍにある今井西原遺跡で調査された中世以後とされる井戸址は、深さ2.8ｍを測り湧水点は地表下1.5ｍであった。現在の三河田の集落は、三河田用水の完成後（17世紀初頭）に成立した。

このように中込っ原一帯は農業用水はもとより生活用水を得ることが困難な環境であり、佐久市役所が新築されるまで先ほどの三河田・横和・今井が既存の集落であった。三河田の滑津川を臨む断崖には幾つかの湧水地点があり小さな沢がある。横和の集落内や付近にも湧水地点があり小さな沢や小沼がある。今井まで下がってくると集落の付近に水を求められる。今井の集落の北西には北東から続く大きな低地があり、千曲川に臨んだ断崖では比較的大きな沢となっている。

このような広大な中込っ原の遺跡の分布状況は、生活用水が得られる台地縁辺に寄っている。台地

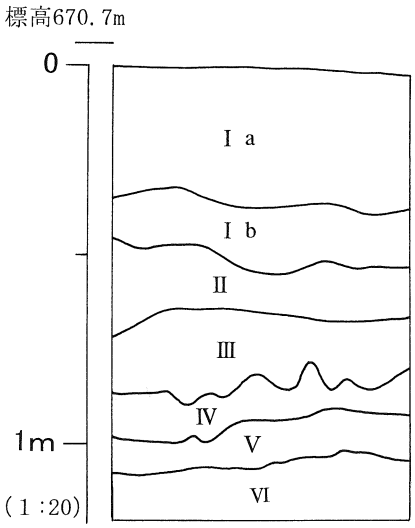


第２図　寄塚遺跡群寄塚遺跡と周辺遺跡（１：15,000）

内部は希薄である。湯川を臨んだ台地北側縁辺部には、本遺跡群はじめ東に宮ノ上遺跡群・寺畑遺跡群が知られている。本遺跡群内では、昭和56年に横和団地造成時に試掘調査され100棟を超す弥生時代中期後半～平安時代の竪穴住居址が検出されている。団地内に寄塚古墳がある。一見したところ横穴石室を持たないようである。東に隣接する宮の上遺跡群宮の上遺跡で２棟の平安時代竪穴住居址等が、宮ノ上遺跡群根々井芝宮遺跡では、弥生時代後期後半竪穴住居址43棟（この他にプラン確認できた26棟）、古墳時代後期竪穴住居址３棟、平安時代竪穴住居址14棟等が調査されている。さらに東の寺畑遺跡群の調査では、縄文時代草創期の爪形文等が出土している。南西100ｍでは昭和49年度長野県営高瀬地区圃場整備事業に伴い、今井西原遺跡が発掘調査されている。古墳時代前期後半～平安時代の竪穴住居址７棟、中世頃の井戸址１基等が検出された。その西方の白山遺跡群では試掘調査で弥生時代中期後半・古墳時代後期・平安時代の竪穴住居址12棟が確認されている。古墳は湯川に臨んだ寄塚古墳、台地中央の土堂古墳や県下屈指の大型の横穴石室を持つ滑津川に面した三河田大塚古墳が所在する。弥生時代中期後半の集落址である本遺跡群と根々井芝宮遺跡は、湯川が大きく北に蛇行するのに合わさるように台地が湯川にせり出した台地縁辺に立地している。

第５節　基本層序

寄塚遺跡群は、千曲川に東方から注ぐ湯川左岸の切り立った断崖上にあり、標高は670ｍ内外を測る。浅間第一軽石流の堆積がみられる最南端にあたる。台地の南端断崖下には、滑津川が湯川と同じく西流している。遺跡の基本層序は６層に分かれ、遺構は第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層面で確認された。第Ⅴ層は調査区西にかけて堆積は薄い。第Ⅵ層は湯川層とされる水平な砂層で、中部自動車道掘削断面で地表下７ｍまでは確認できた。



Ⅰａ層　暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）
水田耕土。
Ⅰｂ層　褐色土（7.5YR4/4）
水田床土。鉄分沈殿層。
Ⅱ層　黒褐色土（10YR2/2）
粘質有り。炭・パミス小量。
Ⅲ層　暗褐色土（10YR3/4）
パミス小量。
Ⅳ層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
黄色（10YR5/6）の砂と暗褐色土（10YR3/4）を含む。
Ⅴ層　黄褐色土（10YR5/6）火山灰。
Ⅵ層　明黄褐色土（10YR5/6）砂。

第３図　基本層序模式図

第６節　遺構と遺物の詳細

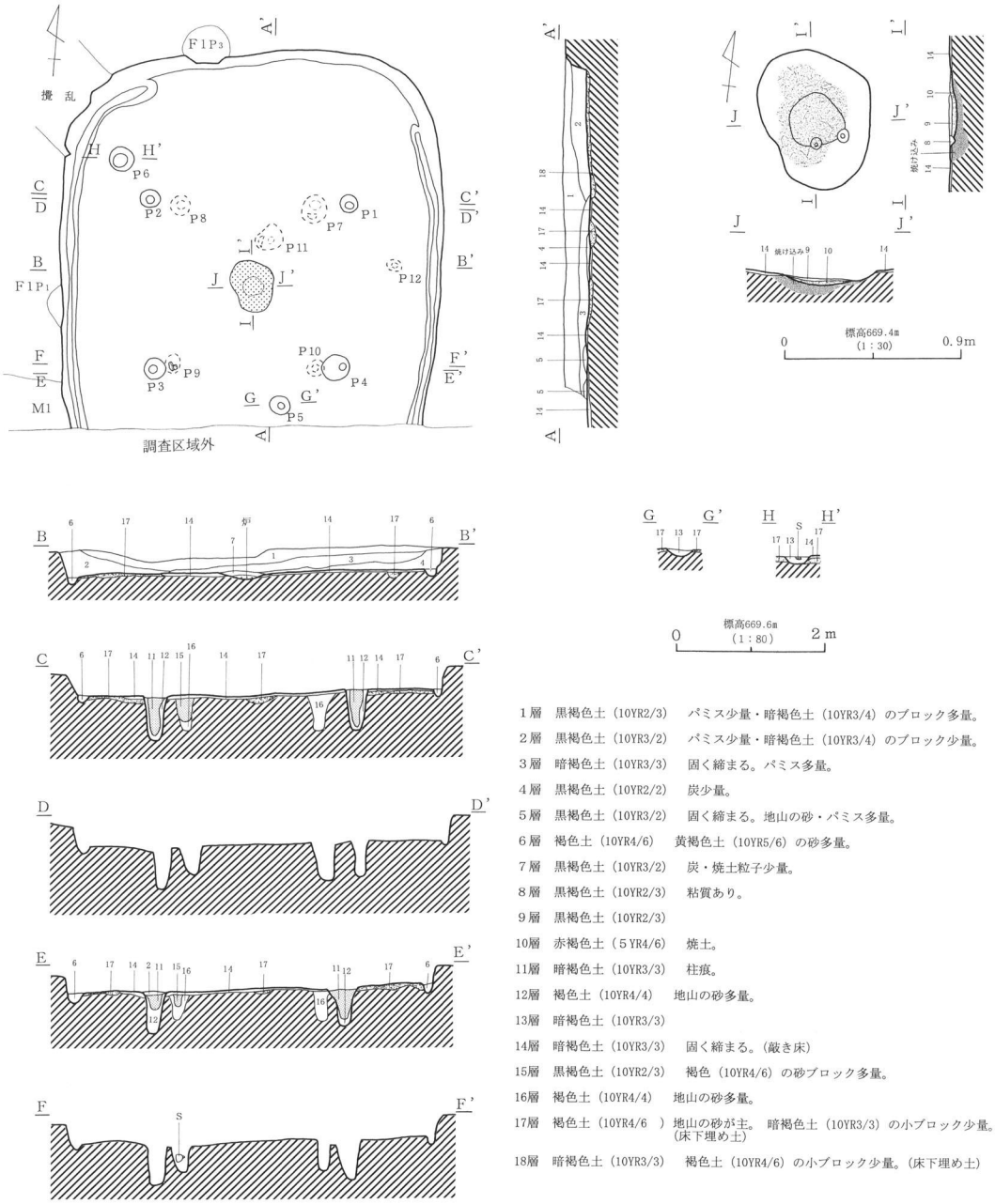
遺　構	竪穴住居址	13軒（弥生時代中期後半・古墳時代前期後半）	遺　物	弥生時代中期後半土器・石器
				古墳時代前期後半土器・石器
	掘建柱建物址	６棟		古墳時代後期～平安時代須恵器・土師器
	土　坑	17基		
	溝状遺構	12条		
	ピット	106基		

第Ⅱ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址

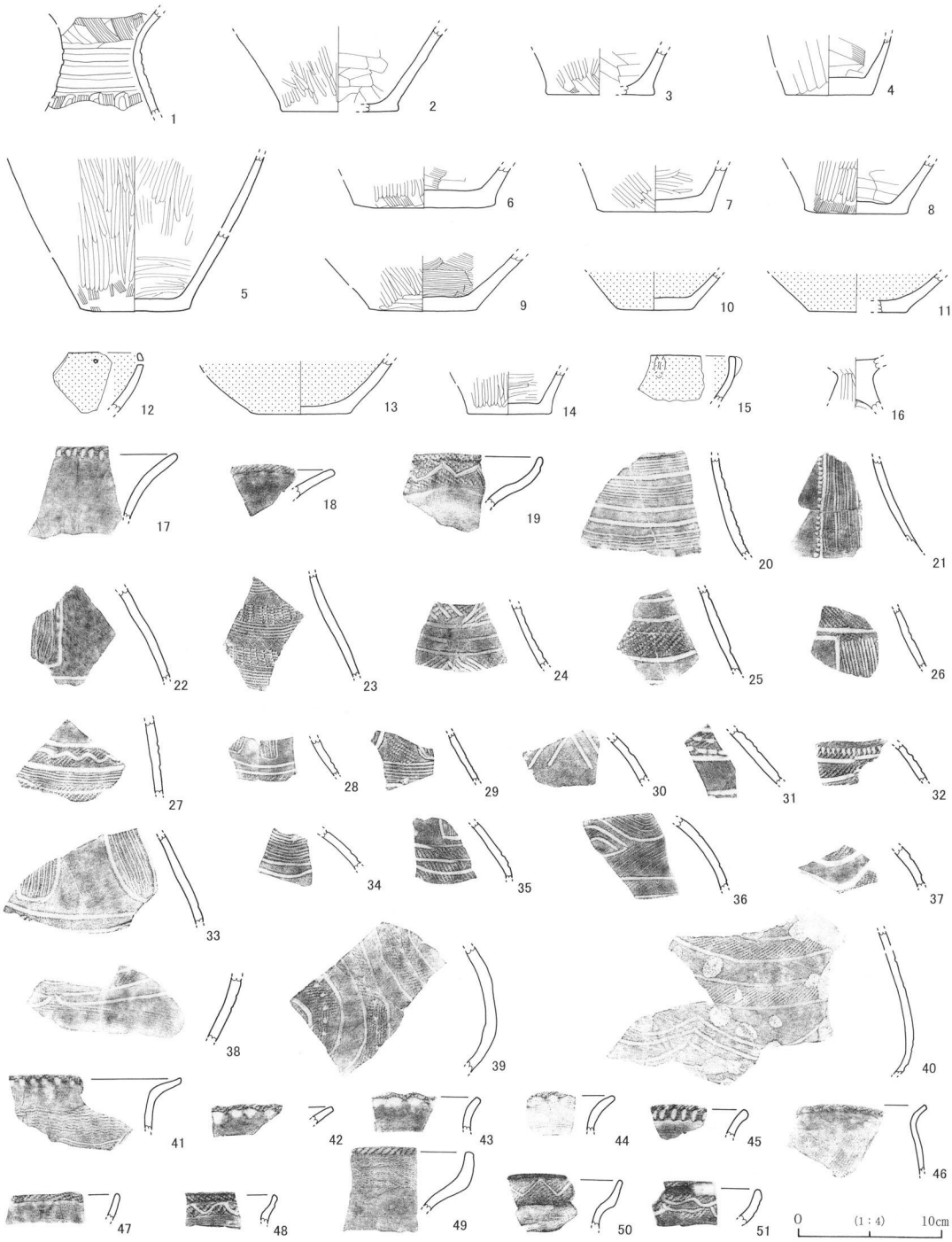
（1）Ｈ1号住居址

本址はた・ち－101・102Grで検出された。Ｍ１号・Ｆ１号・Ｄ２号土坑に切られ、Ｈ２号を切って



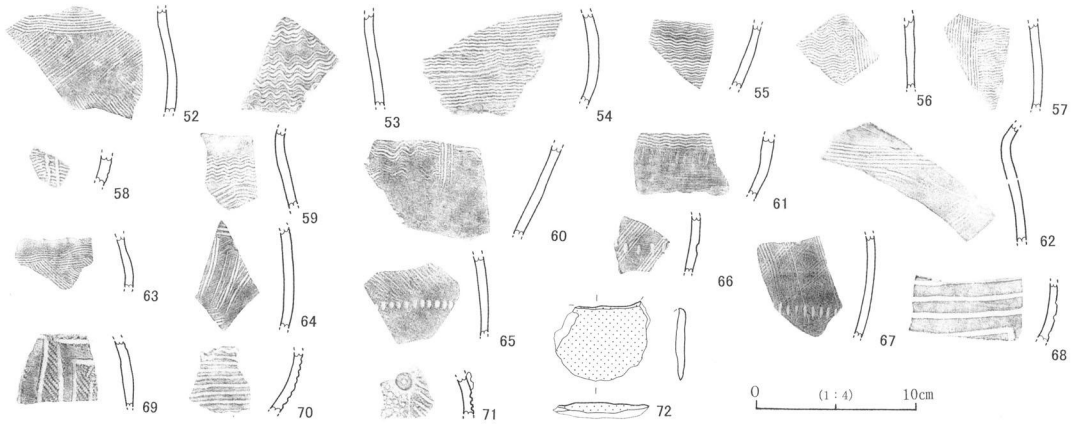
1層　黒褐色土（10YR2/3）　パミス少量・暗褐色土（10YR3/4）のブロック多量。
2層　黒褐色土（10YR3/2）　パミス少量・暗褐色土（10YR3/4）のブロック少量。
3層　暗褐色土（10YR3/3）　固く締まる。パミス多量。
4層　黒褐色土（10YR2/2）　炭少量。
5層　黒褐色土（10YR3/2）　固く締まる。地山の砂・パミス多量。
6層　褐色土（10YR4/6）　黄褐色土（10YR5/6）の砂多量。
7層　黒褐色土（10YR3/2）　炭・焼土粒子少量。
8層　黒褐色土（10YR2/3）　粘質あり。
9層　黒褐色土（10YR2/3）
10層　赤褐色土（５YR4/6）　焼土。
11層　暗褐色土（10YR3/3）　柱痕。
12層　褐色土（10YR4/4）　地山の砂多量。
13層　暗褐色土（10YR3/3）
14層　暗褐色土（10YR3/3）　固く締まる。（敲き床）
15層　黒褐色土（10YR2/3）　褐色（10YR4/6）の砂ブロック多量。
16層　褐色土（10YR4/4）　地山の砂多量。
17層　褐色土（10YR4/6　）地山の砂が主。　暗褐色土（10YR3/3）の小ブロック少量。（床下埋め土）
18層　暗褐色土（10YR3/3）　褐色土（10YR4/6）の小ブロック少量。（床下埋め土）

第４図　Ｈ１号住居址実測図



第５図　Ｈ１号住居址出土遺物実測図

いる。隅丸長方形で北壁4.5ｍ、東壁検出部4.8ｍ、西壁4.6ｍ、最深の壁残高は北壁で38㎝を測る。主軸方位はＮ－２°－Ｗを示す。主柱穴Ｐ１～Ｐ４が南北2.2ｍ東西2.6ｍの正方形に配置されている。



第６図　Ｈ１号住居址出土遺物実測図

柱痕はＰ１・Ｐ２・Ｐ３で18cm、Ｐ１は径26cm深さは52cm、Ｐ２は径26cm深さ60cm、Ｐ３は径30cm深さ56cm、Ｐ４は径34cm深さ60cmを測る。床下からのＰ７～Ｐ10は、Ｐ１～Ｐ４の内側に方形に配置されている。主柱が建て替えられたと考えられる。床面は全体に非常に堅く敲き締められていて、平坦である。床下の掘方は２～８cmで浅い。周溝が北壁の一部を除き壁下を回る。炉は主柱穴Ｐ１～Ｐ４でつくられる方形の中央に設置され、長径70cm短径58cm深さ７cmの楕円形で地床炉である。１cm程の焼土の堆積があり、下部が焼け焼け込んでいた。図示した遺物は弥生土器壺・甕・鉢・高坏、石器がある。図示した以外の土器片1,325片の内79片が内外面赤彩された鉢・高坏片で、壺片は僅か６片しかもすべて小形壺。１・６・17～40は壺、壺口縁部は外反する口縁と、内彎して受口状の口縁がある。口唇部にヘラの刻目や縄文が施される。19の口縁部は縄文後ヘラ描連続山形文が施される。21～40は頸部・胴部片である。20・23・25・27・31・32・35はヘラ描平行沈線文間に横の櫛描条線文・縄文・ヘラ描波状文・櫛描簾状文が、21・22・26・28・29・33にはヘラ描「Ｕ」字文内に縦の櫛描条線文やヘラ描刺突文、ヘラ描「Ｕ」字文の外にも縦の櫛描条線文やヘラ描刺突文が、24・30には山形文が重ねて施文される。38～40は胴下部でヘラ描沈線区画内に縄文が施され、40にはその下位にヘラ描連続孤文、39は縄文の上にヘラの刺突文が施される。２・３・５・７～９・14・41～71は甕、41～46は外反する単純口縁の甕で、口唇部縄文と刻目・押捺が施される。47～51は受口や受口状の口縁で、50以外は口唇部に縄文が、48と51は口縁部に縄文・ヘラ描波状文、50に縄文・ヘラ描連続山形文が施される。52・62・64には横・縦の櫛描条線文が、65～67は櫛描斜走文にヘラの刺突文が、53～55・61は櫛描波状文が、56・57・60は櫛描波状文・縦の櫛描条線文が、58は櫛描波状文後縦のヘラ描沈線・波状文が、68・69はヘラ描連続「コ」字文が、70はヘラ描横走文、71はヘラ描斜走文・円形刺突文・円形貼付文が施される。10～13・15は内外面赤彩の鉢で、12には１孔、15は突起を有す。赤彩された曲面が無い平らな板状の72は、この大きさで一枚の粘土板で作られている。貼付されていたもので器種不明である。石器

第１表　Ｈ１号住居址出土遺物観察表

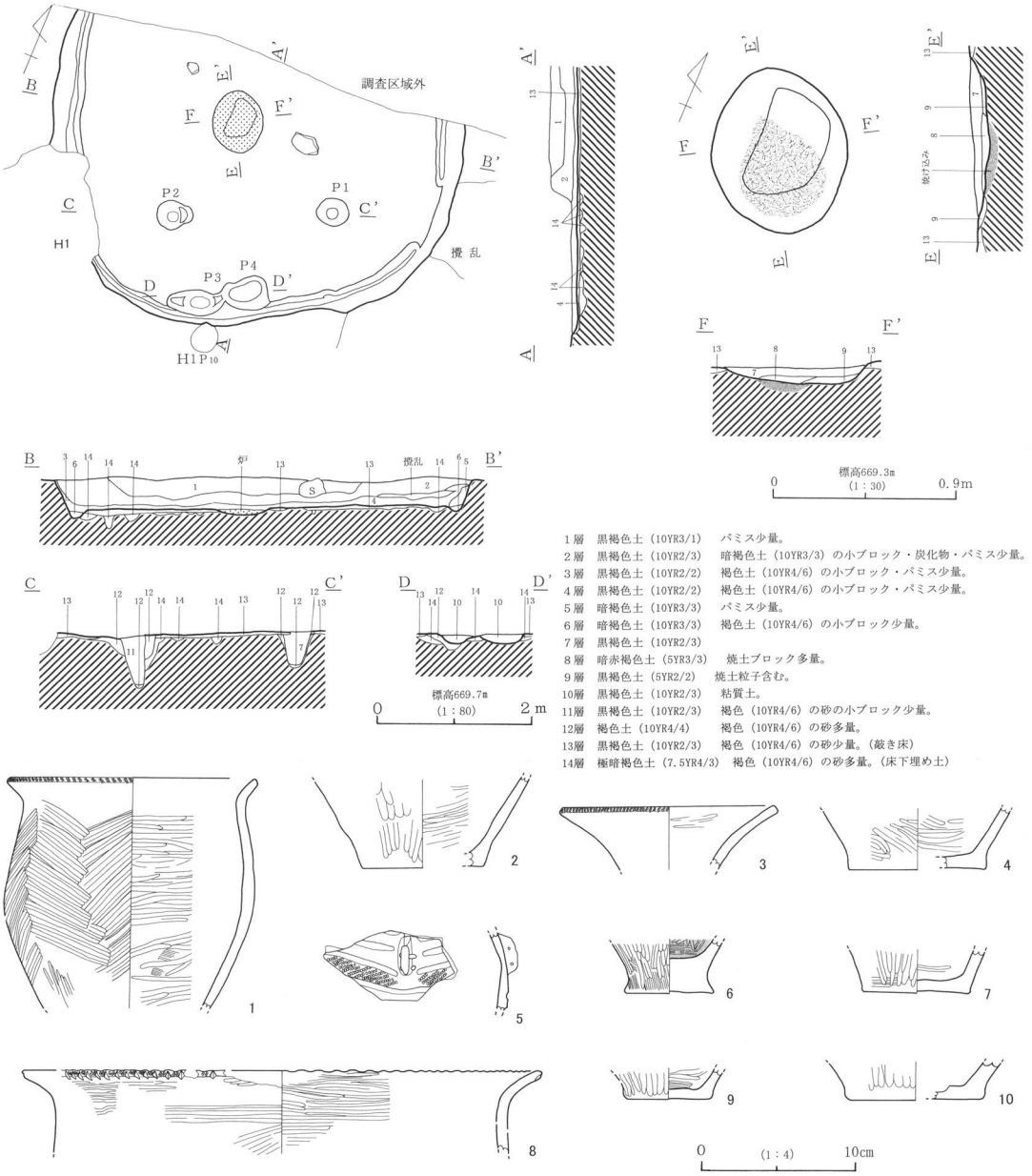
No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	弥生	壺	－	－	<7.3>	ヘラナデ	ヘラナデ、ヘラ描平行沈線	完全実測	Ⅰ区、Ⅱ区
2	弥生	甕	－	(8.0)	<5.9>	ヘラナデ	ヘラミガキ	回転実測	検出面
3	弥生	甕		(7.4)	<3.3>	ヘラナデ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅰ区
4	弥生	壺？	－	6.0	<4.1>	ヘラナデ	ヘラナデ	完全実測	Ⅰ区
5	弥生	甕	－	7.6	<10.6>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	Ⅰ区、検出面、Ｄ２
6	弥生	壺	－	9.8	<2.9>	ヘラナデ	ヘラミガキ	完全実測	Ⅱ区
7	弥生	甕	－	8.0	<3.2>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	P6
8	弥生	甕	－	7.2	<3.8>	ヘラナデ	ヘラミガキ	完全実測	Ⅰ区、Ｐ３
9	弥生	甕	－	7.4	<4.0>	ヘラナデ	ヘラミガキ	完全実測	検出面
10	弥生	鉢	－	(5.2)	<2.7>	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測	検出面
11	弥生	鉢	－	(6.8)	<2.7>	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測	Ⅱ区
12	弥生	鉢	－	－	－	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	断面実測。　口縁部に１孔	Ⅰ区
13	弥生	鉢	－	6.8	<3.5>	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	完全実測	Ⅱ区
14	弥生	甕	－	5.8	<3.1>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	検出面
15	弥生	鉢	－	－	－	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	断面実測。　口縁部に突起貼付	Ⅱ区
16	弥生	高坏	－	－	<3.6>	坏部ヘラナデ、脚部ヘラナデ	ヘラミガキ	完全実測	検出面

は石鏃５点・石鏃（石錐？）未製品１点，未製品の打製石斧１点，砥石２点、磨石２点、横形削器１点、二次加工ある剥片１点がある。他に多量の石器製作の所産である剥片・細片・石核が出土した。石核は黒曜石７点・硬質砂岩１点、剥片・細片は硬質砂岩18点・黒曜石55点。

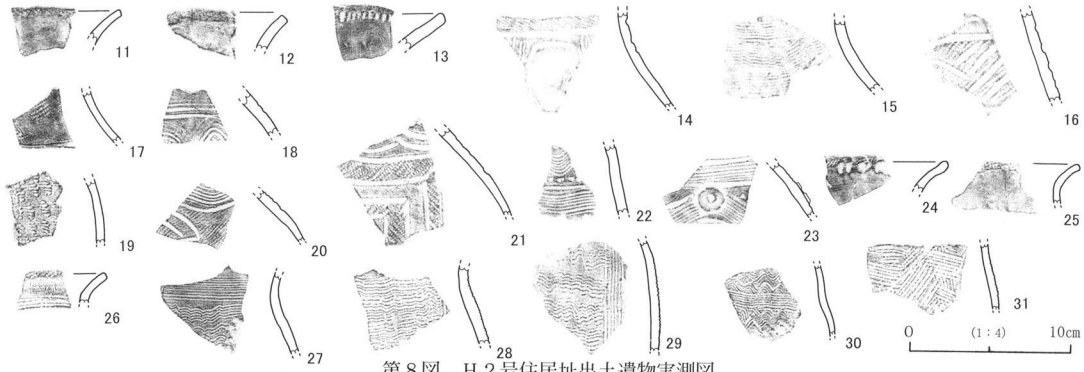
本址は、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定される。

（２）Ｈ２号住居址

本址は、そ・た－101・102Grで検出された。Ｆ１号掘立柱建物址・Ｈ１号住居址に切られている。形態は隅丸方形を呈するとみられる。検出規模は東壁検出部1.1ｍ、南壁4.1ｍ、西壁検出部3.4ｍで最



第７図　Ｈ２号住居址実測図および出土遺物実測図



第８図　Ｈ２号住居址出土遺物実測図

深の壁残高は住居址東壁で38cmを測る。主軸方位はＮ－25°－Ｗを示す。ピットが４個検出され、位置から主柱穴がＰ１・Ｐ２、Ｐ３・Ｐ４の２基が出入口の施設である。Ｐ１・Ｐ２の柱間２ｍ、柱痕はＰ１・Ｐ２で30cmを測る。Ｐ１は径40cm深さは47cm、Ｐ２は「８」の字で深さ67cm、Ｐ３は長径60cm短径40cm深さ16cm、Ｐ４は長径60cm短径30cm深さ20cmを測る。床面は全体に非常に堅く敲き締められていて、平坦である。床下の掘方は２～８cmで一部分除き浅い。周溝が東壁の一部を除き壁下を回る。炉は中央に設置されていた。長径80cm短径66cm深さ８cmの楕円形を呈する地床炉である。２cm程度の焼土の堆積があり、下部が焼け込んでいた。図示した遺物は弥生土器壺・甕、石器がある。その他土器片が556片有り内41片が内外面赤彩の鉢・高坏片で壺片は小形壺７片である。３・10～23は壺、３・11～13は口縁外反し、面取りの口唇部に縄文・押捺・刻目が施される。14～23は頸部と胴部に文様帯を持つ。ヘラ描平行沈線間に14には縄文が、ヘラ描「U」字文の外に縦の櫛描条線文が、16には縄文とヘラ描斜走文、17には縄文が、18・22・23には横の櫛描条線文が施される。23は円形貼付文を持つ。15には２帯の横の櫛描条線文間に櫛描波状文が、19には３段の櫛描簾状文が施される。21には縄文・ヘラ描連続孤文と連続「コ」字文が施される。１・２・４～９は甕、１は短く口縁外反し口唇部に縄文が胴部には櫛描斜走文が羽状に施文される。５はヘラ描山形文内に縄文が施され、耳状の突起が貼付される。８の口唇部には縄文・ヘラ刻目が、頸部に横の櫛描条線文、胴部に櫛描斜走文が施される。24の口唇部には縄文・ヘラ刻目が、25・26には縄文が施文される。27・28には横の櫛描条線文・波状文が、28・29は縦の櫛描条線文施文後櫛描波状文が施される。31は櫛描斜走文、32は櫛描斜走文後ヘラの刺突文、33にはヘラ描斜走文が施文される。

石器は石鏃４点・石鏃未製品２点、打製石斧１点・打製石斧未製品１点、石錐２点、二次加工ある剥片１点、磨石（兼敲石）１点、敲石１点、磨製石斧片１点、他に石器製作の所産である石核・剥片・細片が出土した。石核は黒曜石７点、剥片・細片は硬質砂岩９点・黒曜石81点。

本址は、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定される。

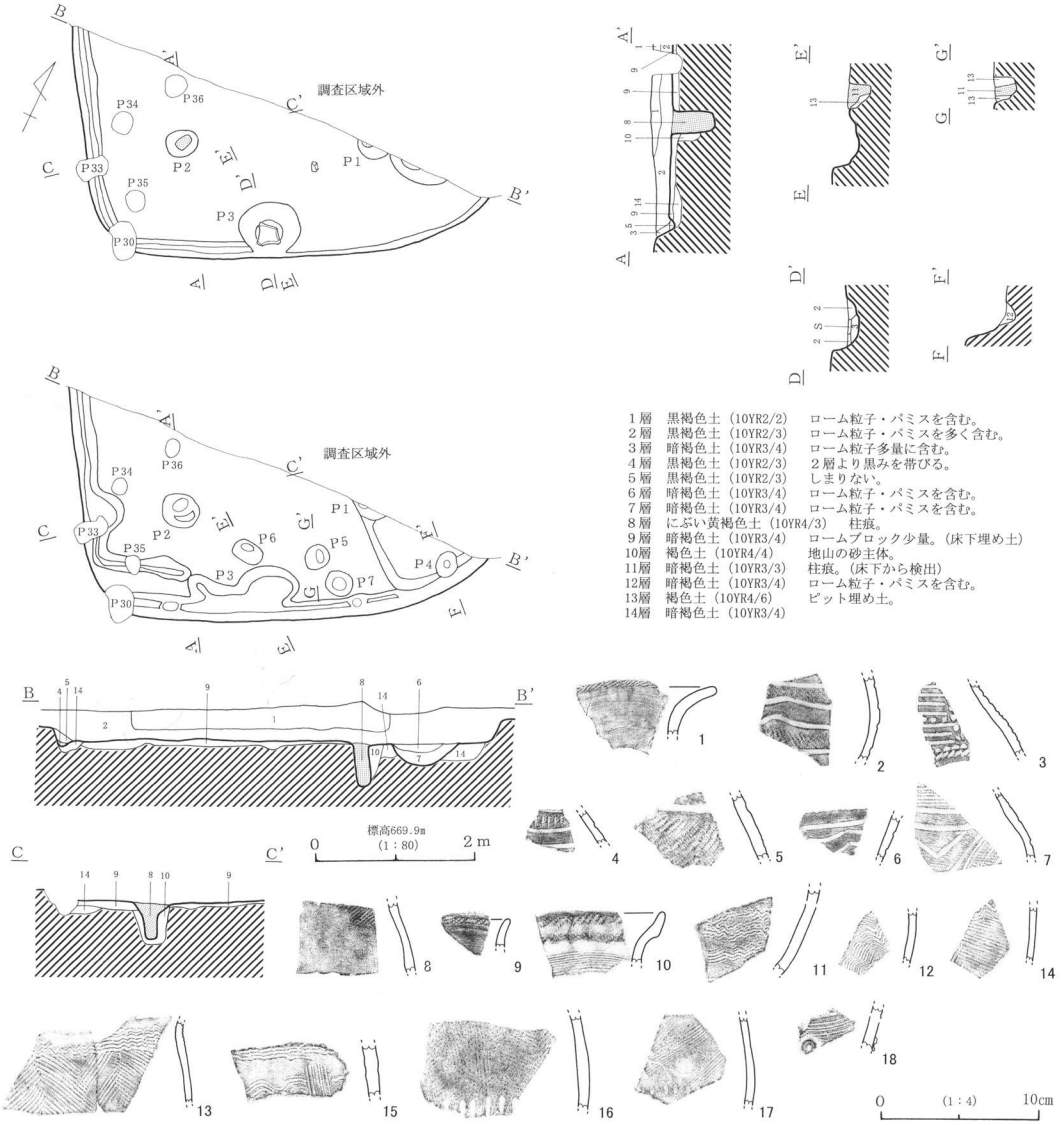
第２表　Ｈ２号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	弥生	甕	16.3	－	<15.0>	ハケ目→ヘラミガキ	口唇部縄文LR、体部櫛描斜走文（５本）、ヘラミガキ	完全実測	Ⅱ区、Ⅲ区
2	弥生	甕	－	(7.9)	<5.8>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅲ区
3	弥生	壺	(14.2)	－	<4.1>	ヘラミガキ	口唇部縄文LR	回転実測	Ⅱ区
4	弥生	甕	－	(9.0)	<4.0>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅲ区
5	弥生	甕	－	－	<4.4>	ヘラナデ		破片実測	Ⅳ区
6	弥生	甕	－	5.8	<3.5>	ハケ目→ヘラミガキ	ハケ目→ヘラミガキ	完全実測	Ｐ４
7	弥生	甕	－	(7.0)	<2.8>	ヘラミガキ	ハケ目→ヘラミガキ	回転実測	Ⅰ区
8	弥生	甕	(33.8>	－	<5.4>	ヘラミガキ	口唇部縄文LR→ヘラ刻目、ヘラミガキ、横の櫛描条線文（６本）	回転実測	Ⅰ区ホリ、Ⅱ区
9	弥生	甕	－	5.5	<2.0>	ハケ目→ヘラミガキ	ハケ目→ヘラミガキ	回転実測	Ⅲ区
10	弥生	壺	－	(19.0)	<2.5>	ナデ	ヘラミガキ	回転実測	検出面

（３）Ｈ３号住居址

本址は、そ・た－99・100Grより検出された。P30～ P36に切られている。大部分が現道の下に延びる。形態は隅丸方形を呈するとみられる。検出規模は、南壁4.6ｍ、西壁検出部2.6ｍで、最深の壁

残高は南壁で30cmを測る。主軸方位はN－31°－Wを示す。ピットが７個検出され、位置から主柱穴がＰ１・Ｐ２、Ｐ３が出入口の施設である。Ｐ１・Ｐ２の柱間は2.4m、柱痕はＰ１が16cm・Ｐ２が長径26cm短径16cmを測る。Ｐ１は深さ60cm、Ｐ２深さ54cm、Ｐ３は長径76cm短径60cm深さ17cm、底面10cmから（第48図112）の台石が出土した。Ｐ４～Ｐ７は床下から確認された。Ｐ５・Ｐ６の柱痕14cmを測る。床面は全体に堅く敲き締められていて、平坦である。床下の掘方は部分的で浅い。周溝が南壁から西壁の壁下を回る。



1層　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒子・パミスを含む。
2層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子・パミスを多く含む。
3層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒子多量に含む。
4層　黒褐色土（10YR2/3）　２層より黒みを帯びる。
5層　黒褐色土（10YR2/3）　しまりない。
6層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒子・パミスを含む。
7層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒子・パミスを含む。
8層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　柱痕。
9層　暗褐色土（10YR3/4）　ロームブロック少量。（床下埋め土）
10層　褐色土（10YR4/4）　地山の砂主体。
11層　暗褐色土（10YR3/3）　柱痕。（床下から検出）
12層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒子・パミスを含む。
13層　褐色土（10YR4/6）　ピット埋め土。
14層　暗褐色土（10YR3/4）

第９図　Ｈ３号住居址実測図および出土遺物実測図

図示した遺物は弥生土器壺・甕、石器がある。その他土器片135片の内12片が内外面赤彩の鉢・高坏で壺は小形壺１片である。１～８は壺、１は口縁外反し、面取されない口唇部に縄文が施文される。３～５はヘラ描平行沈線間に３にはヘラ描刺突文が、４には櫛描刺突文が５には縄文が施される。２・６は胴部下位でヘラ描平行沈線下にヘラ描連続孤文が、２は縄文も施文される。７にはヘラ描平行沈線下にヘラ描山形文が施される。９～18は甕、１は短く口縁外反し口唇部に縄文が施文される。

２は受口状の口縁で口縁部に縄文、頸部に横の櫛描条線文が施される。11・12には櫛描波状文が、13は胴部縦の櫛描条線文施文後頸部に櫛描波状文が施される。14は櫛描斜走文後波状文が施文される。15には縦の櫛描条線文後櫛描波状文が、16には縦の櫛描条線文後櫛描斜走文・ヘラ描刺突文が、17は櫛描斜走文後ヘラ描刺突文が施文される。18は櫛描山形文？後円形貼付文が貼付される。

石器は石鏃１点、敲き痕のある磨石１点、光沢あるスリ面を持つ台石１点が出土した。

本址は、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定される。

（４）Ｈ４号住居址

本址は、そ・たー99・100Grより検出された。Ｈ５号住居址を切っている。形態は隅丸方形で北壁4.4ｍ、南壁4.0ｍ、東壁3.9ｍ、西壁4.0ｍ、最深の壁残高は北壁で22㎝を測る。主軸方位はＮ－17°－Ｅを示す。ピットが12個検出され、位置から主柱穴がＰ１～Ｐ４で、柱痕は20～24㎝、南北2.1ｍ東西2.6・2.1ｍの台形に配置されている。深さはＰ１が60㎝、Ｐ２が61㎝、Ｐ３が41㎝、Ｐ４が72㎝を測る。Ｐ８が出入口の施設で、底面に３個の凹みがある。Ｐ５・Ｐ７・Ｐ９の深さは34～51㎝、Ｐ９の柱痕は18㎝を測り、上屋を支えた柱穴であろう。Ｐ６は径70㎝深さ20㎝で貯蔵穴か？床下からP10～P14が検出された。P12は柱痕が確認された。柱の取り替えが考えられる。床面は全体に非常に堅く敲き締められていて、平坦である。床下の掘方は２～12㎝で浅い。周溝が３コーナーで切れながら壁下を回る。炉は主柱穴Ｐ１～Ｐ４でつくられる方形の中央に設置され、長径86㎝短径56㎝深さ８㎝の楕円形の地床炉で、南側に２個の炉縁石（砂岩）が置かれる。８㎝程度の焼土の堆積がある。

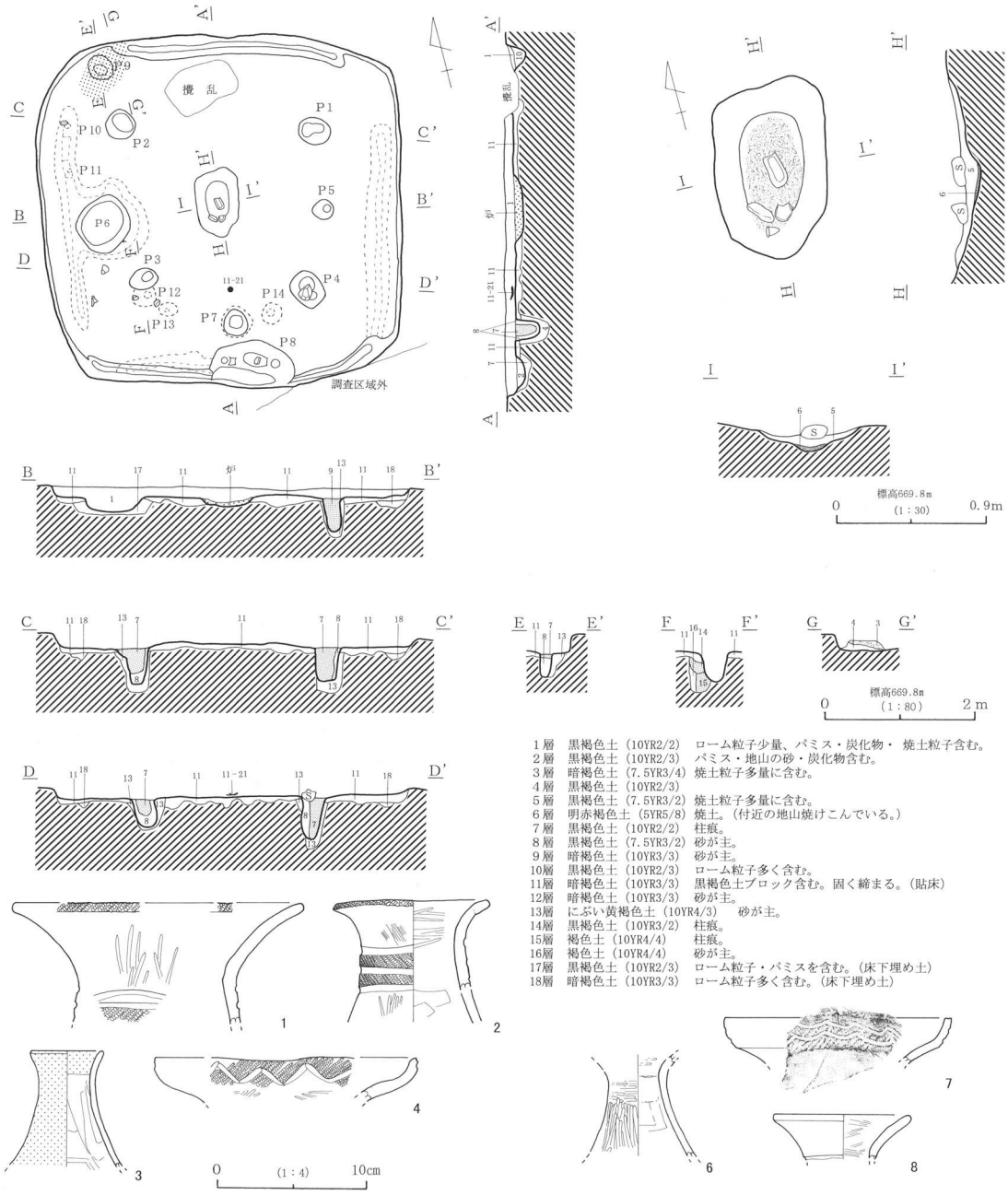
図示した遺物は弥生土器壺・甕・鉢・高坏、石器がある。その他土器片402片の内22片が内外面赤彩の鉢・高坏で壺はない。

壺は１～４・６～10・24～35、口縁部は外反する口縁と、内彎して受口状の口縁がある。１・２・７・24～26の口唇部に縄文が施される。１・２・27頸部のヘラ描平行沈線間に縄文が施文される。４・７・26口縁部は縄文後ヘラ描連続山形文・ヘラ描波状文が施される。３・６は細頸の小形壺で３は唯一赤彩される。30・34・35にヘラ描平行沈線、31～33はヘラ描三角文内にヘラ描刺突文さらに周囲を櫛描条線文が、28はヘラ描沈線下にヘラ描山形文が重ねて、29には横の櫛描条線文が施文される。

甕は11～20・36～61、口縁部は外反する口縁11・12・15・16・18と、内彎して受口状の口縁42・43、直立する口縁13・14もある。口唇部には縄文・ヘラの刻目15・16、縄文・押捺11・12、縄文36～38、ヘラの刻目39・40、押捺の41がある。42は口唇部に縄文受け口状口縁部に縄文・ヘラ描連続山形文、43は小形の甕で口唇部に縄文が直立する口縁に縄文・ヘラ描連続山形文、44は面取された口唇部に縄文が口縁部に縄文・ヘラ描連続山形文が施文される。

第３表　Ｈ４号住居址出土遺物観察表

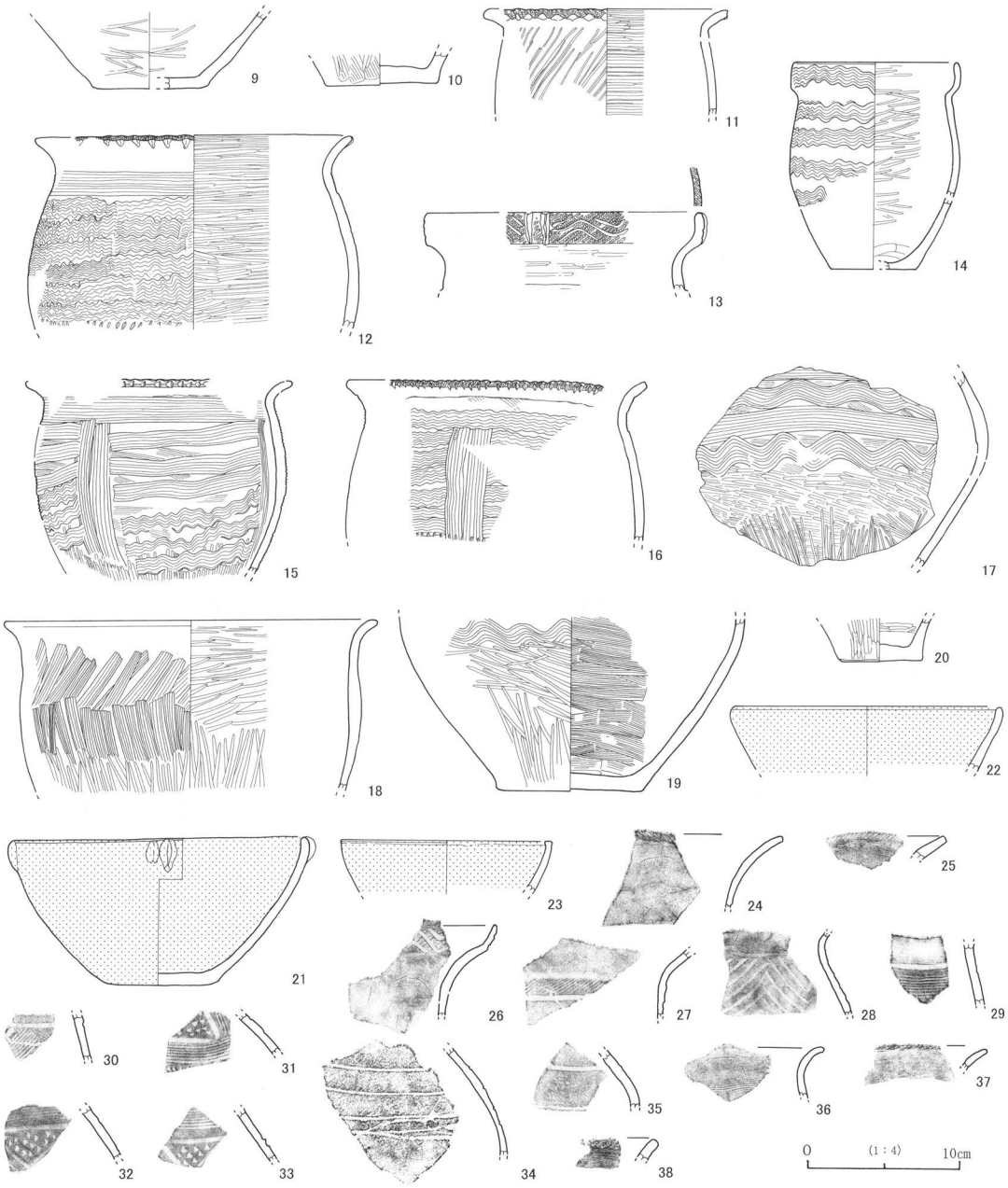
No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	弥生	壺	(19.6)	－	<8.0>	ヘラミガキ	ヘラミガキ、口縁縄文ＬＲ横、頸部ＬＲ横、ヘラ描平行沈線	回転実測	Ⅲ区
2	弥生	壺	10.5	－	<8.3>	ヘラミガキ、ヘラナデ	ハケ目、ヘラミガキ、口唇部縄文ＲＬ横、頸部ＲＬ横、ヘラ描平行沈線（3段）	完全実測	Ⅲ区
3	弥生	壺	(5.0)	－	<7.8>	口縁ミガキ→赤色塗彩、頸部ヘラナデ	ミガキ→赤色塗彩	回転実測	Ⅰ区、Ⅱ区
4	弥生	壺	(17.6)	－	<4.9>	ミガキ	口縁縄文（ＬＲ）→ヘラ描連続山形文、ミガキ	回転実測	Ⅱ区
5	弥生	高坏	(13.2)	－	<3.0>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅱ区
6	弥生	壺	－	－	<6.9>	頸部ヘラナデ、口縁ヨコナデ→ミガキ	ミガキ	完全実測	Ⅱ区
7	弥生	壺	(15.3)	－	<3.1>	ヘラミガキ	ヘラミガキ、口唇部縄文ＬＲ横、口縁縄文ＬＲ横、ヘラ描波状文（2段）	回転実測	Ⅱ区
8	弥生	壺	9.3	－	<3.0>	ハケ目	ナデ、頸部ヘラ描沈線	完全実測	Ⅱ区
9	弥生	壺	－	(7.6)	<5.0>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅳ区
10	弥生	甕	－	5.6	<2.9>	ミガキ	胴部ミガキ、底部ミガキ	完全実測	Ⅱ区
11	弥生	甕	16.2	－	<7.0>	ミガキ	口縁縄文（ＲＬ）→刻み、櫛描斜走文、口縁ヨコナデ	回転実測	Ⅱ区
12	弥生	甕	(21.0)	－	<12.8>	ミガキ	口唇部縄文（ＬＲ）→刻み、櫛描簾状文（8本）、櫛描波状文（6～8本）→刻み、口縁ヨコナデ、胴部ナデ	回転実測	Ⅲ区
13	弥生	甕	(18.6)	－	<5.2>	ミガキ	口唇・口縁縄文（ＲＬ）→ヘラ描連続山形文・突起貼付け、ミガキ	回転実測	Ⅲ区
14	弥生	甕	(11.3)	(5.6)	(13.7)	ヘラミガキ	ハケ目、ヘラミガキ、口唇体部櫛描波状文（6本）	回転実測	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区
15	弥生	甕	(17.6)	－	<13.3>	ミガキ	口縁刻み、頸部櫛描簾状文（9本）、胴部横の櫛描条線文（6本）・波状文（6本）・縦の条線文（6本）を2本4ヶ所、口縁ヨコナデ、胴部ハケ目→ミガキ	完全実測	Ⅱ区
16	弥生	甕	(20.0)	－	<10.6>	ミガキ	口唇部縄文（ＬＲ）→刻み、櫛描波状文(6本)、胴部櫛描波状文(6本)・縦の櫛描条線文(6本)→刻み、口縁ハケ目→ヨコナデ	回転実測	Ⅰ区
17	弥生	甕	－	－	－	ハケ目	櫛描簾状文（8本）、櫛描波状文（8本）、ハケ目、ミガキ	破片実測	Ⅰ区
18	弥生	甕	24.8	－	<11.3>	ヘラミガキ	ハケ目→ヘラミガキ、櫛描波状文	回転実測	Ⅱ区
19	弥生	甕	－	9.6	<11.5>	ハケ目	ヘラミガキ、櫛描波状文	回転実測	Ⅲ区
20	弥生	甕	－	7.5	2.2	ナデ	ハケ目→ヘラミガキ	完全実測	Ⅰ区
21	弥生	鉢	20.3	6.8	9.7	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	完全実測。突起2ケ4単位	Ⅲ区
22	弥生	鉢	(18.1)	－	<4.3>	ミガキ→赤色塗彩	ミガキ→赤色塗彩	回転実測	Ⅲ区
23	弥生	鉢	(14.0)	－	<3.5>	ミガキ→赤色塗彩	ミガキ→赤色塗彩	回転実測	Ⅲ区



1層　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒子少量、パミス・炭化物・ 焼土粒子含む。
2層　黒褐色土（10YR2/3）　パミス・地山の砂・炭化物含む。
3層　暗褐色土（7.5YR3/4）焼土粒子多量に含む。
4層　黒褐色土（10YR2/3）
5層　黒褐色土（7.5YR3/2）焼土粒子多量に含む。
6層　明赤褐色土（5YR5/8）焼土。（付近の地山焼けこんでいる。）
7層　黒褐色土（10YR2/2）　柱痕。
8層　黒褐色土（7.5YR3/2）砂が主。
9層　暗褐色土（10YR3/3）　砂が主。
10層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子多く含む。
11層　暗褐色土（10YR3/3）　黒褐色土ブロック含む。固く締まる。（貼床）
12層　暗褐色土（10YR3/3）　砂が主。
13層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　砂が主。
14層　黒褐色土（10YR3/2）　柱痕。
15層　褐色土（10YR4/4）　柱痕。
16層　褐色土（10YR4/4）　砂が主。
17層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子・パミスを含む。（床下埋め土）
18層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子多く含む。（床下埋め土）

第10図　Ｈ４号住居址実測図および出土遺物実測図

頸部から胴部の文様は、頸部横の櫛描条線文後12に胴部波状文、15に胴部縦の櫛描条線文さらにその後波状文と横の条線文、16に縦の櫛描条線文さらにその後波状文が施される。17には横の櫛描条線文間に波状文が、18には櫛描斜走文が縦の羽状施文される。胴部片では57の櫛描斜走文、49～51の櫛描波状文・ヘラの刺突文、56の櫛描斜走文・ヘラの刺突文、52～55の頸部横の櫛描条線文後胴部櫛描斜走文がある。

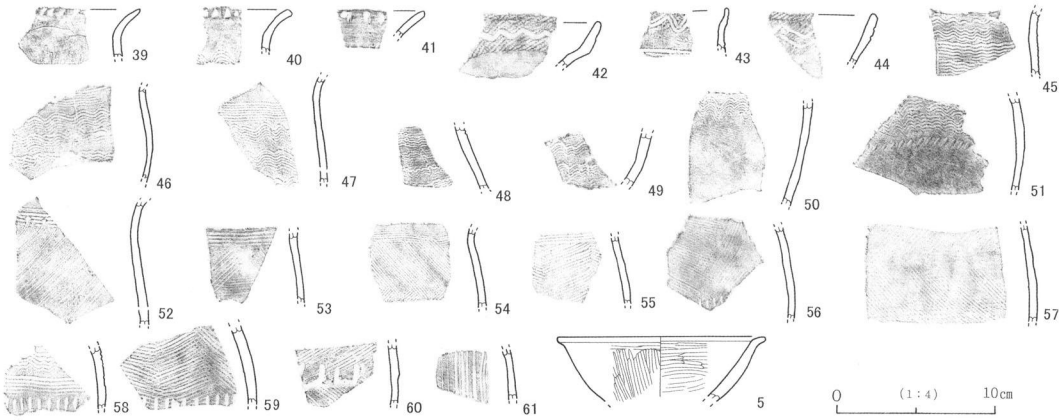


第11図　Ｈ４号住居址出土遺物実測図

直立する口縁の14は、口縁部から胴下部まで櫛描波状文が５帯施される。13の直立する口縁部には縄文・ヘラ描連続山形文の後棒状の突起が２本一対で貼付される。

鉢は21～23内外面赤彩される。21は大形で口縁部に２個一対の楕円形の突起が４カ所に貼付される。23はしっかり面取されている。５は短く水平な口縁部を有す無彩の高坏である。図示不可能な赤彩され水平に開く口縁部の高坏もある。

石器は石鏃４点、打製石斧未製品１点、石錐？１点、二次加工ある剥片１点、赤色顔料が付着した



第12図　Ｈ４号住居址出土遺物実測図

磨石１点、磨石（兼敲石）１点、敲石１点、砥石１点、他に石器製作の所産である石核・剥片・細片が出土した。石核は黒曜石５点、剥片・細片は硬質砂岩14片・赤褐色チャート１片、黒曜石135片。

本址は、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定される。

（５）Ｈ５号住居址

本址は、た・ち－97・98Grに位置する。Ｈ４号に切られている。形態は隅丸方形を呈するとみられる。検出規模は、東壁検出部1.6ｍ、西壁検出部1.9ｍで、最深の壁残高は東・西壁で23㎝を測る。主軸方位はＮ－２°－Ｗを示す。ピットが12個検出され、位置から主柱穴がＰ１～Ｐ２で、東西柱間２．３ｍ、深さはＰ１が66㎝、Ｐ２が74㎝を測り深い。Ｐ５は径50㎝深さ35㎝で棟持柱とみられる。Ｐ４は径24㎝深さ12㎝、Ｐ３は長径36㎝短径30㎝、Ｐ７～Ｐ12は床下から検出された。床面は全体に非常に堅く敲き締められていて、平坦である。床下の掘方は４～20㎝であった。周溝が北壁東寄りから東壁、西壁の一部にみられる。

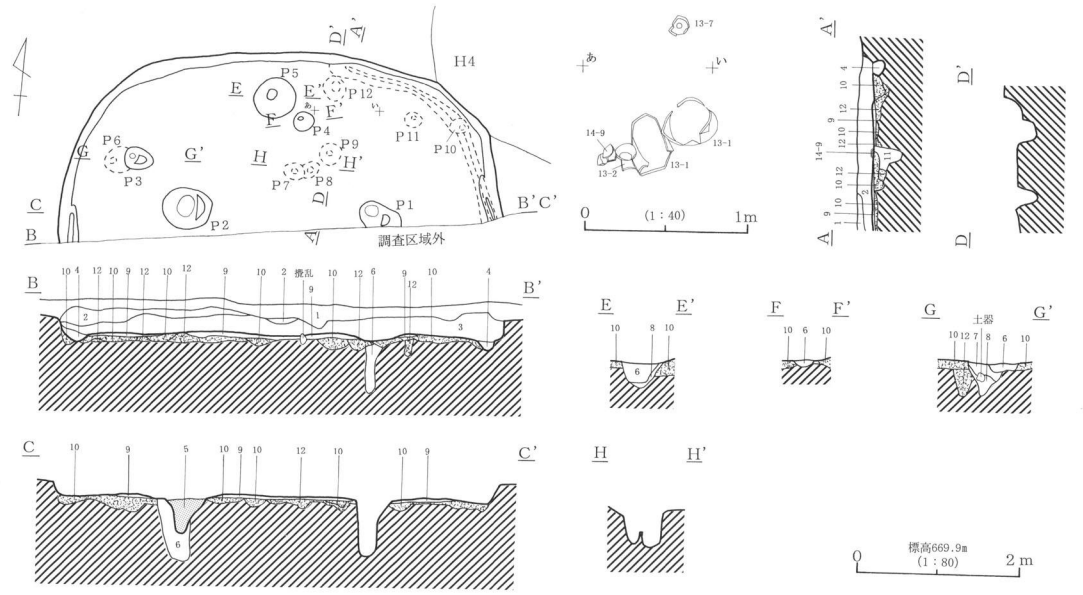
図示した遺物は弥生土器壺・甕・鉢・高坏、土製品、石器がある。その他土器片256片の内14片が内外面赤彩の鉢・高坏で赤彩の壺片は１点のみである。

壺は１・２・９・10・12～22、口縁部は外反する口縁２と、内彎して受口状の口縁12があり、共に口唇部に縄文が施される。１は大形の壺で胴部中央にヘラ描沈線・ヘラ描連続孤文内に縄文が施文される。２は刷毛目調整が残る頸部にヘラ描平行沈線を３本、その下にヘラ描連続山形文が施される。17は外面黒色を呈し、頸部から胴部中央までヘラ描平行沈線で画された文様帯にヘラ描連続山形文やヘラ描山形文が重ねて、さらにその下部にヘラ描連続山形文が施文される。16も同様にヘラ描平行沈線の上下にヘラ描山形文・連続山形文が施される。14の頸部には横の櫛描条線文と縦の櫛描条線文が、15の頸部にはヘラ描平行沈線間に縄文が施される。18はヘラ描沈線・ヘラ描刺突列・縄文・ヘラ描連続山形文が、19・20はヘラ描「Ｕ」字文内に縦の櫛描条線文が施文される。「Ｕ」字文の沈線には赤彩される。21・22はヘラ描沈線の下に縄文が施文され、ヘラ描山形文が重ねて施される。

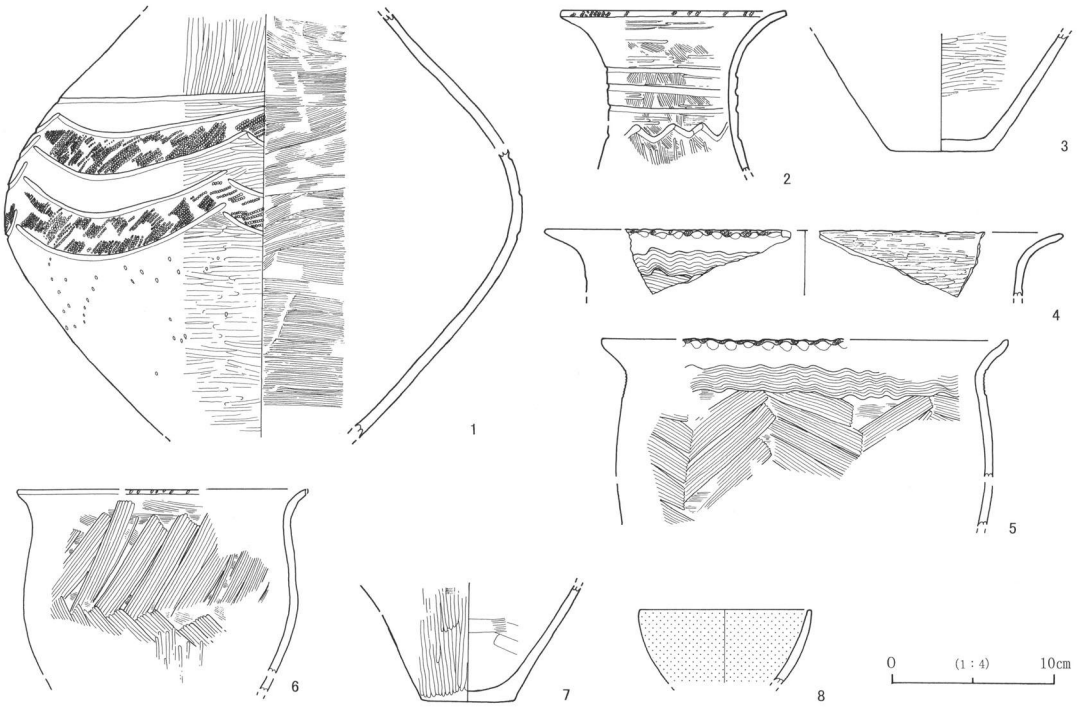
甕は３～７・23～34、口縁部は外反する口縁４～６・23～25と、内彎して受口状の口縁28、直立する口縁26・27もある。口唇部には縄文・押捺４・５・23・24、縄文25～29、ヘラの刻目６がある。26

第４表　Ｈ５号住居址出土遺物観察表

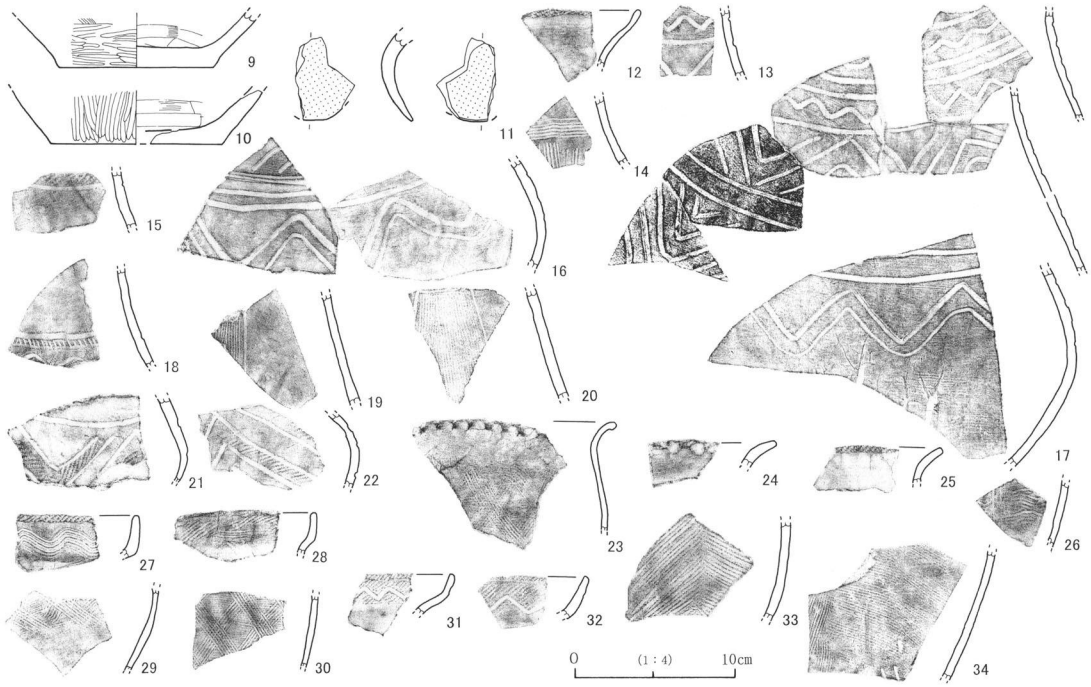
No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	弥生	壺	－	－	<26.1>	ハケ目	胴部縄文（ＬＲ）→ヘラミガキ→ヘラ描沈線文・連続弧文	完全実測	Ⅰ区
2	弥生	壺	14.0	－	<9.9>	ハケ目	ハケ目→ヘラミガキ、口唇部縄文、頸部　ヘラ描平行沈線文・連続山形文	完全実測	Ⅰ区
3	弥生	甕	－	(6.4)	<7.2>	ヘラミガキ	ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測	Ⅰ区
4	弥生	甕	(32.0)	－	<3.9>	ハケ目→ミガキ	口縁ヨコナデ、口唇部縄文→押捺、櫛描波状文（7本）、櫛描斜走文	回転実測	Ⅱ区ホリ方
5	弥生	甕	(25.0)	－	<11.5>	ヘラミガキ	ハケ目→口唇部縄文（ＲＬ）→押捺、櫛描波状文（8本）、斜走文（8本）	回転実測	Ⅱ区、Ⅱ区・ホリ方、P3
6	弥生	甕	(17.7)	－	<12.0>	ヘラミガキ	ハケ目、口唇部刻目、櫛描斜走文（6本）	回転実測	Ⅰ区、検出面
7	弥生	甕	－	5.6	<7.3>	ハケ目	ハケ目→ヘラミガキ	完全実測	Ⅰ区、Ⅱ区、検出面
8	弥生	鉢	(10.6)	－	<4.5>	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測	Ⅰ区
9	弥生	壺	－	(9.6)	<3.4>	ハケ目	ヘラミガキ	回転実測	Ⅰ区
10	弥生	壺	－	(10.6)	<3.3>	ハケ目	ヘラミガキ	回転実測	P9
11	弥生	甕	－	－	－	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	完全実測	Ⅰ区・ホリ方



1層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子・パミス含む。所々に砂層入り込む。
2層　黒褐色土（10YR3/2）
3層　黒褐色土（10YR3/2）　パミス・地山の砂多く含む。
4層　黒褐色土（10YR3/2）　パミス・炭少量含む。
5層　黒褐色土（10YR3/2）　柱痕。
6層　黒褐色土（10YR2/3）　パミス・炭少量含む。
7層　黒褐色土（10YR3/2）　地山の砂少量。
8層　暗褐色土（10YR3/4）　地山の砂多い。
9層　暗褐色土（10YR3/4）　固く締まる。褐色の砂・暗褐色土のブロック多量。（敲き床）
10層　黒褐色土（10YR3/2）　地山の砂少量。（床下埋め土）
11層　暗褐色土（10YR3/3）　地山の砂少量。（床下埋め土）
12層　褐色土（10YR4/6）　地山の砂少量。暗褐色土のブロック多量。（床下埋め土）



第13図　Ｈ５号住居址実測図および出土遺物実測図



第14図　Ｈ５号住居址出土遺物実測図

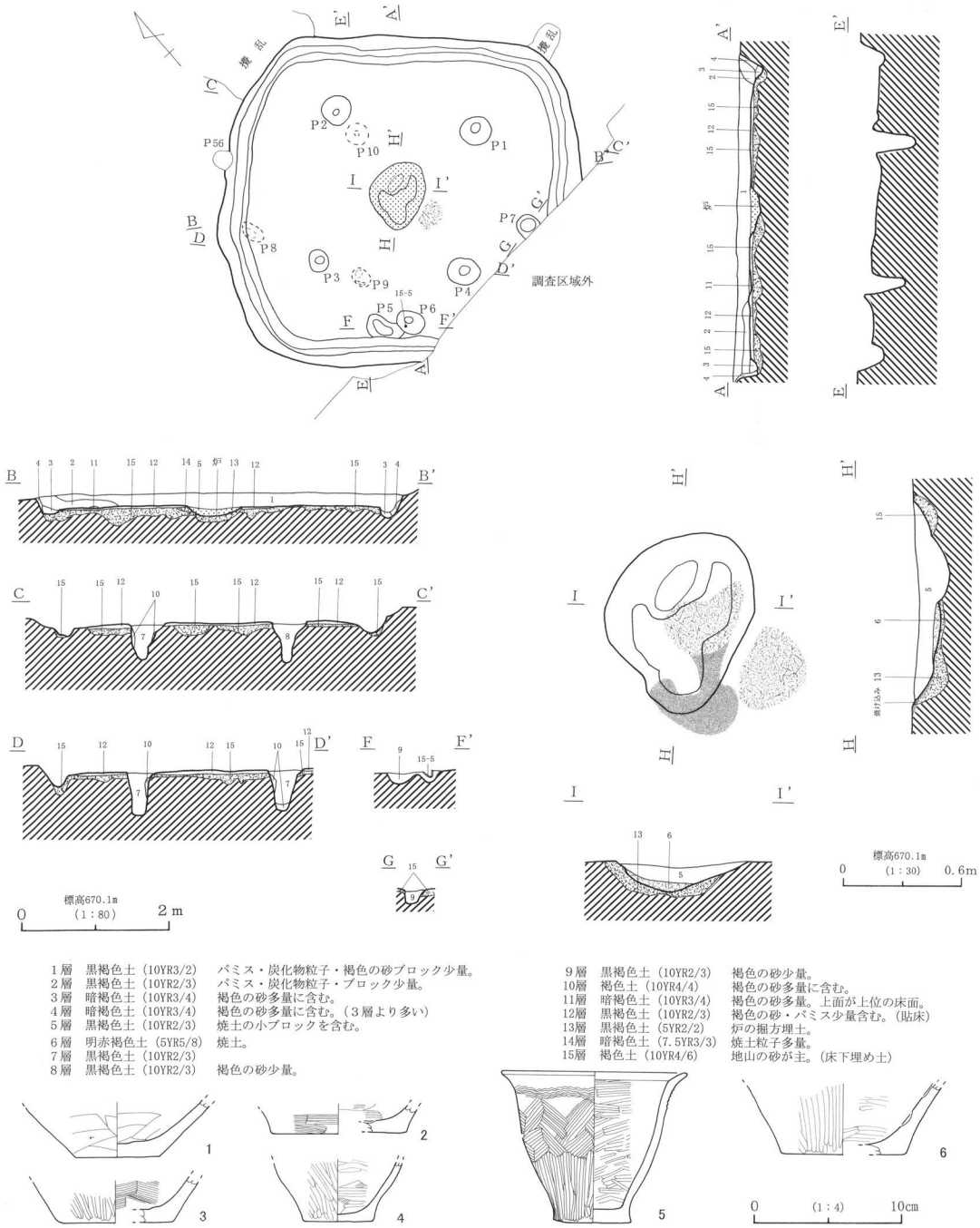
は口唇部に縄文直立する口縁部に櫛描波状文、27は口唇部と直立する口縁部に縄文が、28・29は口唇部に縄文が口縁部に縄文・ヘラ描連続山形文が施文される。４・５の頸部には櫛描波状文胴部には櫛描斜走文が、６・30・34は櫛描斜走文が、34にはヘラ描刺突列も施文される。31は縦の櫛描条線文後櫛描波状文が、23・32・33には格子目状に櫛描斜走文が施される。８は内外面赤彩の鉢、11は内外面赤彩の匙である。石器は石鏃１点・石鏃未製品２点、打製石斧未製品１点、横形削器１点、他に石器製作の所産である石核・剥片・細片が出土した。石核は黒曜石５点、剥片・細片は黒曜石25片・黒色泥岩３片・硬質砂岩２片がある。本址は、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定される。

（６）Ｈ６号住居址

本址は、そ・た－90・91Grに位置し、P56に切られている。形態は隅丸方形で北壁4.0ｍ、南壁検出部1.7ｍ、東壁3.8ｍ、西壁検出部2.1ｍ、最深の壁残高は東壁で23㎝を測る。主軸方位はＮ－40°－Ｅを示す。ピットが10個検出され、位置から主柱穴がＰ１～Ｐ４で、南北2.0ｍ東西2.0ｍの方形に配置されている。Ｐ１は径40㎝深さ53㎝、Ｐ２が径40㎝深さ52㎝、Ｐ３が長径30㎝短径26㎝深さ61㎝、Ｐ４が長径40㎝短径34㎝深さ57㎝を測る。床下から検出されたＰ９は深さ50㎝ P10は深さ63㎝を測り、主柱穴Ｐ２・Ｐ３より内側に配置されている。位置等からＰ２・Ｐ３以前の主柱穴とみられる。Ｐ５・Ｐ６が出入口の施設で、Ｐ６上面から第15図５の甕が出土した。床面から検出されたＰ７と床面下か

第５表　Ｈ６号住居址出土遺物観察表

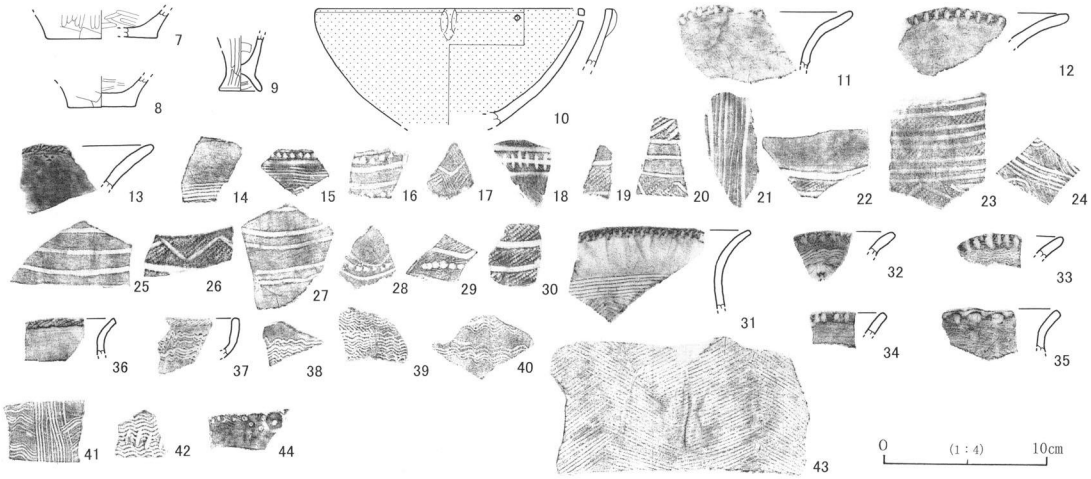
No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	弥生	壺	－	(5.6)	<3.7>	ヘラナデ	ヘラナデ	回転実測	Ⅲ区
2	弥生	壺	－	(9.2)	<1.6>	ハケ目	ハケ目	回転実測	検出面
3	弥生	壺	－	(7.8)	<3.1>	ハケ目	ヘラミガキ	回転実測	Ⅲ区
4	弥生	甕	－	(4.8)	<4.2>	ハケ目→ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅱ区
5	弥生	甕	(12.6)	5.2	10.2	ヘラミガキ	櫛描波状文、櫛描斜走文文、ヘラミガキ	完全実測	Ⅳ区、床
6	弥生	甕	－	(8.6)	<4.8>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅳ区
7	弥生	甕	－	(6.8)	<1.7>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅳ区
8	弥生	甕	－	4.2	<1.9>	ヘラミガキ	ヘラナデ	完全実測	検出面
9	弥生	ミニチュア（高坏）	2.6	－	<3.4>	坏部・脚部　ハケ目	ヘラミガキ	完全実測	Ⅰ区
10	弥生	鉢	(16.6)	－	<7.2>	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測。突起貼付　1孔を有す	Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅲ区



1層　黒褐色土（10YR3/2）　パミス・炭化物粒子・褐色の砂ブロック少量。
2層　黒褐色土（10YR2/3）　パミス・炭化物粒子・ブロック少量。
3層　暗褐色土（10YR3/4）　褐色の砂多量に含む。
4層　暗褐色土（10YR3/4）　褐色の砂多量に含む。（3層より多い）
5層　黒褐色土（10YR2/3）　焼土の小ブロックを含む。
6層　明赤褐色土（5YR5/8）　焼土。
7層　黒褐色土（10YR2/3）
8層　黒褐色土（10YR2/3）　褐色の砂少量。
9層　黒褐色土（10YR2/3）　褐色の砂少量。
10層　褐色土（10YR4/4）　褐色の砂多量に含む。
11層　暗褐色土（10YR3/4）　褐色の砂多量。上面が上位の床面。
12層　黒褐色土（10YR2/3）　褐色の砂・パミス少量含む。（貼床）
13層　黒褐色土（5YR2/2）　炉の掘方埋土。
14層　暗褐色土（7.5YR3/3）　焼土粒子多量。
15層　褐色土（10YR4/6）　地山の砂が主。（床下埋め土）

第15図　Ｈ６号住居址実測図および出土遺物実測図

ら検出されたＰ８は東西壁中央下に位置し、上屋を支えたものであろうか。床面は全体に非常に堅く敲き締められていて、平坦である。床下の掘方は４～40cmで部分的に深い。周溝が検出部壁下を全周する。炉は主柱穴Ｐ１～Ｐ４でつくられる方形の中央に設置され、長径90cm短径76cm深さ15cmの楕円



第16図　Ｈ６号住居址出土遺物実測図

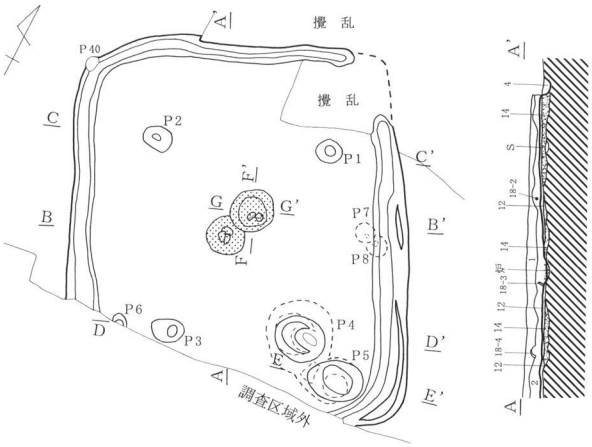
形の地床炉である。４㎝程度の焼土の堆積がある。炉の南側は掘方上部まで焼け込んでいる。

図示した遺物は弥生土器壺・甕・鉢・ミニチュア土器、石器がある。その他土器片628片の内56片が内外面赤彩の鉢・高坏で赤彩された壺は４片ある。壺は１～３・11～30がある。11～13口縁部外反し11・12の口唇部にはヘラの刻目が、13には縄文が施される。14～20の頸部の文様帯には横の櫛描条線文、ヘラ描平行沈線間にヘラ描連続孤文・縄文・ヘラ描刺突列が施文される。21～30の胴部上半から中央部の文様帯には、ヘラ描「U」字文内に縦の櫛描条線文が、ヘラ描平行沈線間やヘラ描孤文・ヘラ描山形文の区画内に縄文・ヘラの刺突列・ヘラ描連続山形文などが施される。

甕は４～８・31～43、口縁部は外反する口縁５・31～36と、直立する口縁37がある。口唇部には縄文・押捺31、縄文36、ヘラの刻目32～34、押捺35が施文される。32・33は短い口縁部に櫛描波状文が施される。直立する口縁37の口唇部は面取され縄文が、口縁部には櫛描波状文が施文される。38～40の胴部には櫛描波状文が、42は櫛描波状文にヘラの刺突列が、43には櫛描斜走文が施される。41は縦の櫛描条線文→櫛描波状文→縦の櫛描条線文の順に施文されている。44は円形の刺突文に円形貼付文が貼付される。５は小形で頸部に櫛描波状文、胴上半部に櫛描斜走文が施文される。９は台付甕のミニチュア品。

第６表　Ｈ７号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	弥生	蓋	－	－	－	ヘラミガキ	ヘラ描山形文重ねて、ヘラミガキ	断面実測	Ⅲ区
2	弥生	壺	－	－	<10.7>	ナデ	ヘラミガキ、頸部縄文ＬＲ横、ヘラ描平行沈線	完全実測	Ⅰ・Ⅳ区
3	弥生	壺	(17.0)	－	<16.0>	ヘラミガキ	ハケ目→ヘラミガキ、口唇部縄文ＬＲ横・ヘラ描連続山形文、頸部ヘラ描平行沈線文・縄文ＬＲ横	回転実測	Ⅲ区
4	弥生	壺	6.6	－	<3.4>	ヘラミガキ	口縁部縄文（ＬＲ）、頸部櫛描簾状文（5本）・櫛描波状文（2本）	完全実測	Ⅲ区
5	弥生	壺	－	－	－	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	断面実測	Ⅳ区
6	弥生	壺	13.1	－	<16.6>	ヘラミガキ	ヘラミガキ　ヘラ描平行沈線、縄文ＬＲ横・ヘラ描連続山形文、ヘラ描山形文重ねて	完全実測	Ⅱ区
7	弥生	壺	－	(6.2)	<6.4>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅲ区
8	弥生	壺	－	6.4	<8.7>	ハケ目	ヘラミガキ、縄文ＬＲ横→ヘラ描連続孤文	完全実測	Ⅳ区
9	弥生	壺	－	6.0	<3.0>	ハケ目	ヘラミガキ	回転実測	Ⅱ区
10	弥生	台付壺	－	(8.8)	<3.8>	胴部ハケ目→赤色塗彩　脚部ハケ目	ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測	Ⅰ区
11	弥生	高坏	－	－	<4.0>	坏部ヘラミガキ→赤色塗彩脚部ハケ目	ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測	Ⅳ区
12	弥生	鉢	－	5.0	<1.5>	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測	Ⅳ区
13	弥生	高坏	－	(9.2)	<2.7>	脚部ヘラミガキ	ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測	Ⅱ区
14	弥生	甕	(21.2)	－	<13.2>	ハケ目→ヘラミガキ	ハケ目、口唇部縄文ＬＲ横、体部櫛描斜走文（6本）	回転実測	Ⅱ区
15	弥生	甕	(22.0)	－	<12.7>	ヘラミガキ	ハケ目、口唇部縄文ＬＲ横、口縁部縄文ＬＲ横・ヘラ描波状文、体部櫛描斜走文	破片実測	Ⅰ区、Ⅲ区
16	弥生	甕	(13．4)	－	<3.8>	ヘラミガキ	ヘラミガキ、口唇部縄文Ｌ横→刻み、頸部横の櫛描条線文、体部櫛描斜走文	回転実測	Ⅱ区
17	弥生	甕	(13．4)	－	<3.8>	ヘラミガキ	口唇部縄文・押捺、体部櫛描斜走文	完全実測	Ⅱ区
18	弥生	甕	11.5	－	<10.3>	ヘラミガキ	口縁部縄文ＲＬ横、ヘラ描波状文（2段）、体部櫛描斜走文（8本）	完全実測	Ⅱ区
19	弥生	甕	－	5.5	<5.2>	ハケ目→ヘラミガキ	ハケ目→ヘラミガキ	回転実測	Ⅰ区
20	弥生	甕	－	(7.0)	<4.1>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	Ⅱ区
21	弥生	甕	－	6.8	<2.1>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	Ⅰ区、Ⅱ区
22	弥生	甕	－	(5.4)	<2.4>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅱ区
23	弥生	甕	－	4.0	<3.0>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	Ⅱ区
24	弥生	台付甕	－	5.6	<7.5>	ヘラミガキ、台部ハケ目	ヘラミガキ	完全実測	Ⅰ区
25	弥生	ミニチュア	－	(3.6)	<2.7>	ヘラミガキ	ヘラミガキ、胴部下端キザミ目	回転実測	Ⅱ区



1層　黒褐色土（10YR3/2）パミス・炭化粒子少量。

2層　黒褐色土（10YR2/3）パミス少量、固く締まる。炭化粒子少量。

3層　暗褐色土（10YR3/3）褐色土の粒子少量。

4層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）褐色土の粒子多量。

5層　黒褐色土（10YR2/3）　焼土粒子少量。

6層　黒褐色土（7.5YR2/2）　焼土・炭の粒子少量。

7層　暗褐色土（7.5YR3/4）　焼土。

8層　黒褐色土（10YR2/2）

9層　褐色土（10YR4/4）

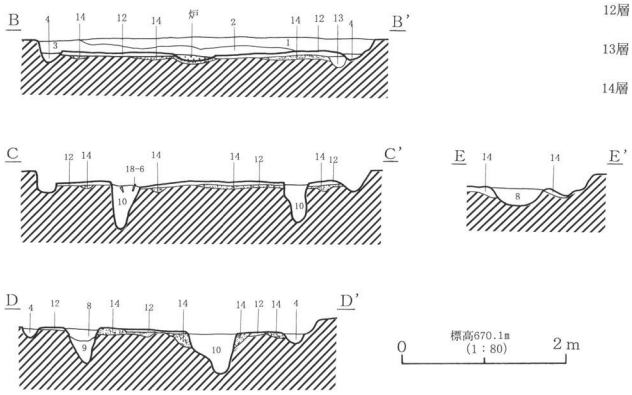
10層　暗褐色土（10YR3/3）　粘質あり、パミス少量。

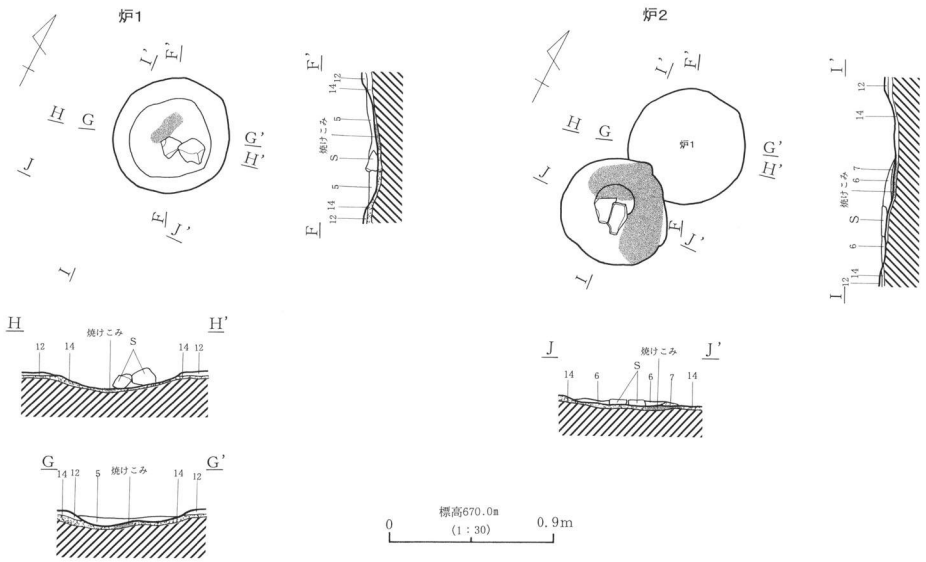
11層　黒褐色土（10YR2/3）　炭多量。

12層　暗褐色土（7.5YR3/4）　敲き床。

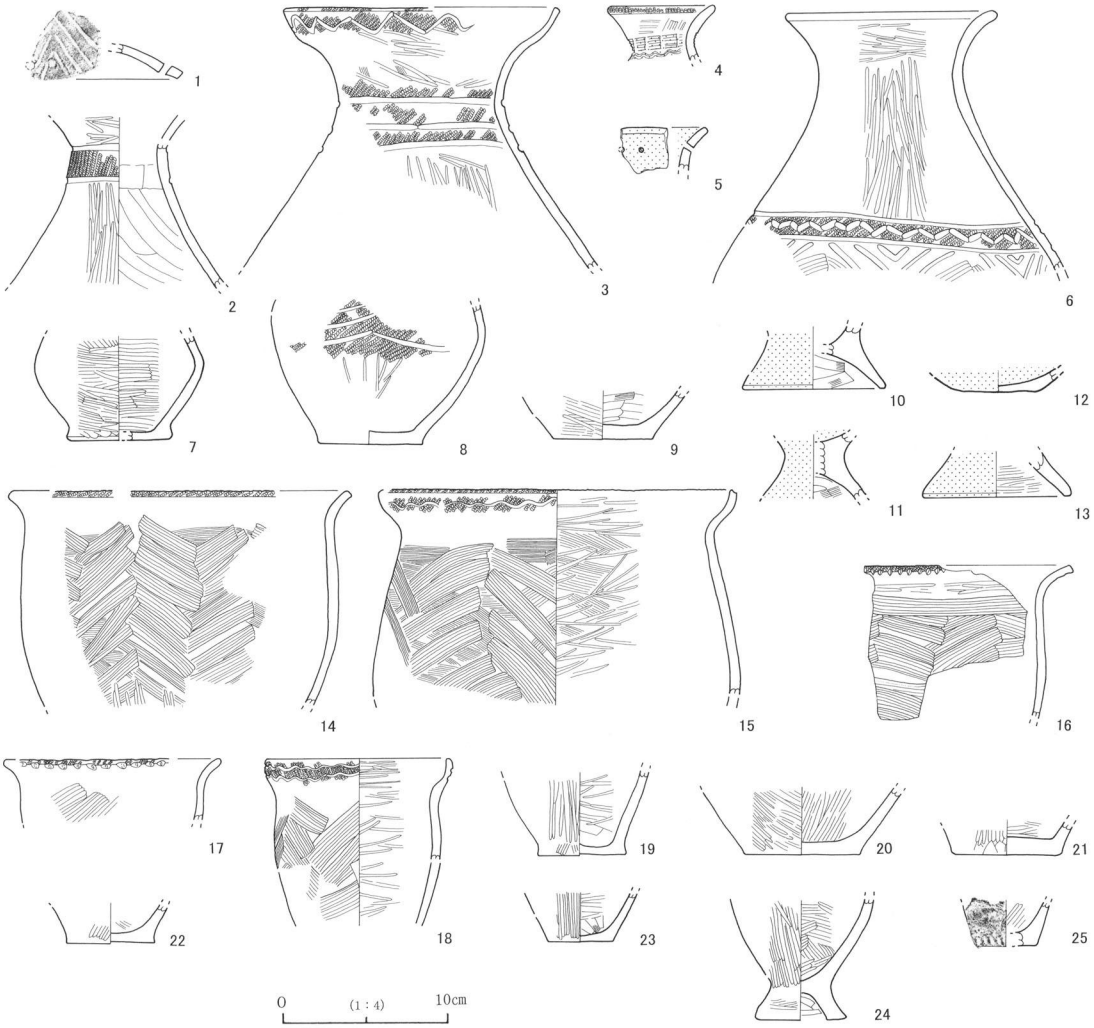
13層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）砂多量。（床下埋め土）

14層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）砂少量。（床下埋め土）





第17図　Ｈ７号住居址実測図



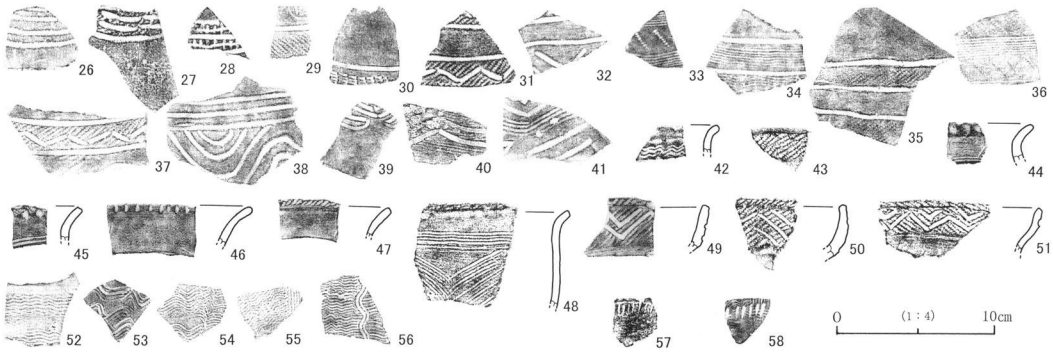
第18図　Ｈ７号住居址出土遺物実測図

石器は石鏃２点、石鏃未製品６点、石錐１点、二次加工ある剥片１点、他に石器製作の所産である石核・剥片・細片が出土した。石核は黒曜石20点、剥片・細片は黒曜石1166片・硬質砂岩５片、緑色チャート１片がある。

本址は、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定される。

（7）Ｈ７号住居址

本址は、そ・た－88・89Grに位置しP40に切られ、北東コーナーを攪乱で壊されている。形態は隅丸長方形で北壁3.6ｍ、南壁検出部0.7ｍ、東壁4.3ｍ、西壁検出部2.9ｍ、最深の壁残高は東壁で18㎝を測る。主軸方位はＮ－30°－Ｗを示す。ピットが８個検出され、位置から主柱穴がＰ１～Ｐ４で、南北2.3ｍ東西2.1・1.7ｍの南側が狭い台形に配置されている。Ｐ１は径32㎝深さ45㎝、Ｐ２が長径36㎝短径28㎝深さ53㎝、Ｐ３が長径42㎝短径28㎝深さ47㎝、Ｐ４が長径62㎝短径54㎝深さ56㎝を測る。Ｐ５は貯蔵穴であろうか、長径70㎝短径50㎝深さ22㎝で炭が多量に出土した。Ｐ６は径18㎝深さ６㎝。床下からＰ７・Ｐ８が検出され、Ｐ７の深さ21㎝Ｐ８は深さ18㎝を測る。床面は全体に非常に堅く敲き締められていて、平坦である。床下の掘方は４～10㎝で浅い。周溝が攪乱部分を除いて検出部壁下



第19図　Ｈ７号住居址出土遺物実測図

を全周する。炉は主柱穴Ｐ１～Ｐ４でつくられる方形の中央から新旧２基が検出された。南側の炉２が旧い。炉１は径54cm深さ６cmの円形地床炉である。石質輝石安山岩の炉縁石２個が置かれる。焼土粒子が少量で焼土はみられず、炉底面は焼け込んでいた。炉２は径50cm深さ４cmの円形地床炉である。石質輝石安山岩と流紋岩の炉縁石２個が置かれる。僅か１cmほどの焼土が堆積していた。

図示した遺物は弥生土器の蓋・壺・台付壺・甕・台付甕・鉢・高坏・ミニチュア土器、石器がある。その他土器片854片の内54片が内外面赤彩の鉢・高坏で赤彩された壺は２片ある。１は無彩の２孔を有す蓋でヘラ描山形文が重ねて施文される。壺はいずれも無彩で２～９・26～41がある。２は頸部の文様帯にヘラ描平行沈線を巡らし中に縄文を施す。受口状口縁の３は、口唇部に縄文が口縁部に縄文・ヘラ描連続山形文、頸部にヘラ描平行沈線・縄文が施文される。４は小形で口唇部に縄文、頸部に櫛描簾状文・櫛描波状文が施され、頸部のみ赤彩される。５は残存する内外面が赤彩され、口縁部に２孔を有す。６は胴部中央に文様帯を持ちヘラ描平行沈線間に縄文・ヘラ描連続山形文がその下部にはヘラ描山形文が重ねて施文される。８はヘラ描連続孤文内に縄文が施される。26は頸部にヘラ描平行沈線、27はヘラ描平行沈線内に縄文、28はヘラ描平行沈線内に櫛描刺突列文が施文される。30～37の胴部上半から中央部の文様帯には、ヘラ描平行沈線に縄文・櫛歯状工具の刺突列・ヘラ描連続山形文・櫛描条線文・櫛描簾状文などが施される。38にはヘラ描平行沈線・ヘラ描孤文が重ねて、40にはヘラ描連続孤文が41にはヘラ描山形文と櫛描山形文が施文される。

甕は14～24・42～58、口縁部は外反する口縁14・16・17・44～48と、直立する口縁18・49・50、受口状口縁15・51がある。口唇部17には縄文・押捺、14・15・47～51には縄文、46はヘラの刻目、44に押捺、16・45にヘラの刻目・縄文が施文される。15・18・49～51の直立する口縁部と受口状口縁部には、縄文・ヘラ描波状文（15・18）・ヘラ描連続山形文（49～51）が施される。16・48の頸部には横の櫛描条線文、胴部には縦羽状の櫛描斜走文が施文される。14・15・17・18の胴部には縦羽状の櫛描斜走文が施される。52～54には櫛描波状文、55・56には櫛描波状文・縦の櫛描条線文・縦の波状文が、57・58は櫛描波状文・櫛歯状工具とヘラの刺突列文が施文される。24は小形の台付甕。12は内外面赤色塗彩の鉢、10は台付壺、11・13は高坏。

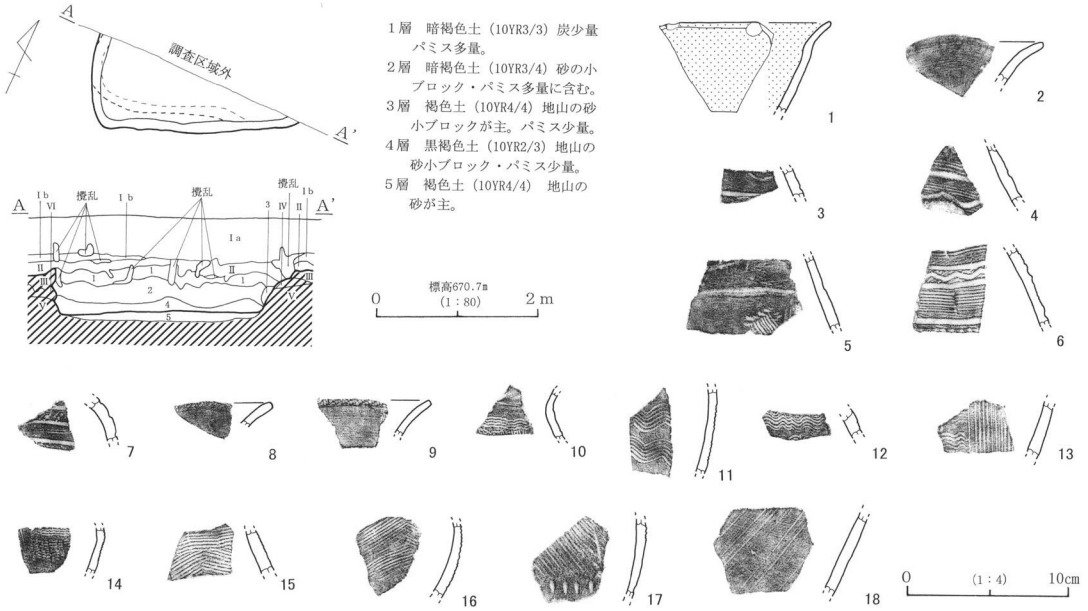
石器は石鏃７点、石鏃未製品６点、石錐１点、磨製石斧１点、打製石斧１点、他に石器製作の所産である石核・剥片・細片が出土した。黒曜石の原石３点、石核は黒曜石16点・硬質砂岩１点、剥片・細片は黒曜石707片・硬質砂岩９片・緑色チャート１片・チャート１片・千枚岩１片がある。

本址は、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定される

（８）Ｈ８号住居址

本址は、そ－94・95Grに位置する。大半が調査区域外の現道下に延びており、調査範囲からは柱穴や炉は検出されなかった。南壁検出部2.5m、西壁検出部1.1m、最深の壁残高は南壁で28cmを測る。

床面は平坦であるが軟弱であった。床下の掘方は、南壁下に５cmほどのテラスを残して掘られている。全体層序第Ⅲ層中から掘り込まれているようである。



第20図　Ｈ８号住居址実測図及び出土遺物実測図

図示した遺物は弥生土器の壺・甕・高坏がある。その他土器片93片の内３片が内外面赤彩の鉢・高坏で赤彩された壺はない。１は口縁部短く緩く外反する高坏の坏部で、内外面が赤色塗彩される。

壺はいずれも無彩で２～７がある。２は口縁部外反し頸部まで無文である。３～７は胴部片である。３は「U」字文内に櫛描条線文・ヘラ描平行沈線文内に縄文が、４はヘラ描平行沈線文内とヘラ描山形文内に横の櫛描条線文が施される。５はヘラ描平行沈線文の下位にヘラによる刺突列を斜めの「U」の字に配し、内部に櫛描条線文を施す。６はヘラ描平行沈線文内に縄文・櫛描条線文・ヘラ描連続山形文が施文される。７はヘラ描平行沈線・縄文が施される。

甕は８～18、８・９の口縁部は短く外反し、口唇部に縄文が施文される。10・13には櫛描波状文・縦の櫛描条線文が、11・12には櫛描波状文が、15の頸部には横の櫛描条線文・櫛描斜走文が、16～18には櫛描斜走文、17にはヘラの刺突列文が施文される。

他に黒曜石の石核２点、硬質砂岩の剥片１片、黒曜石の剥片・細片10片が出土した。

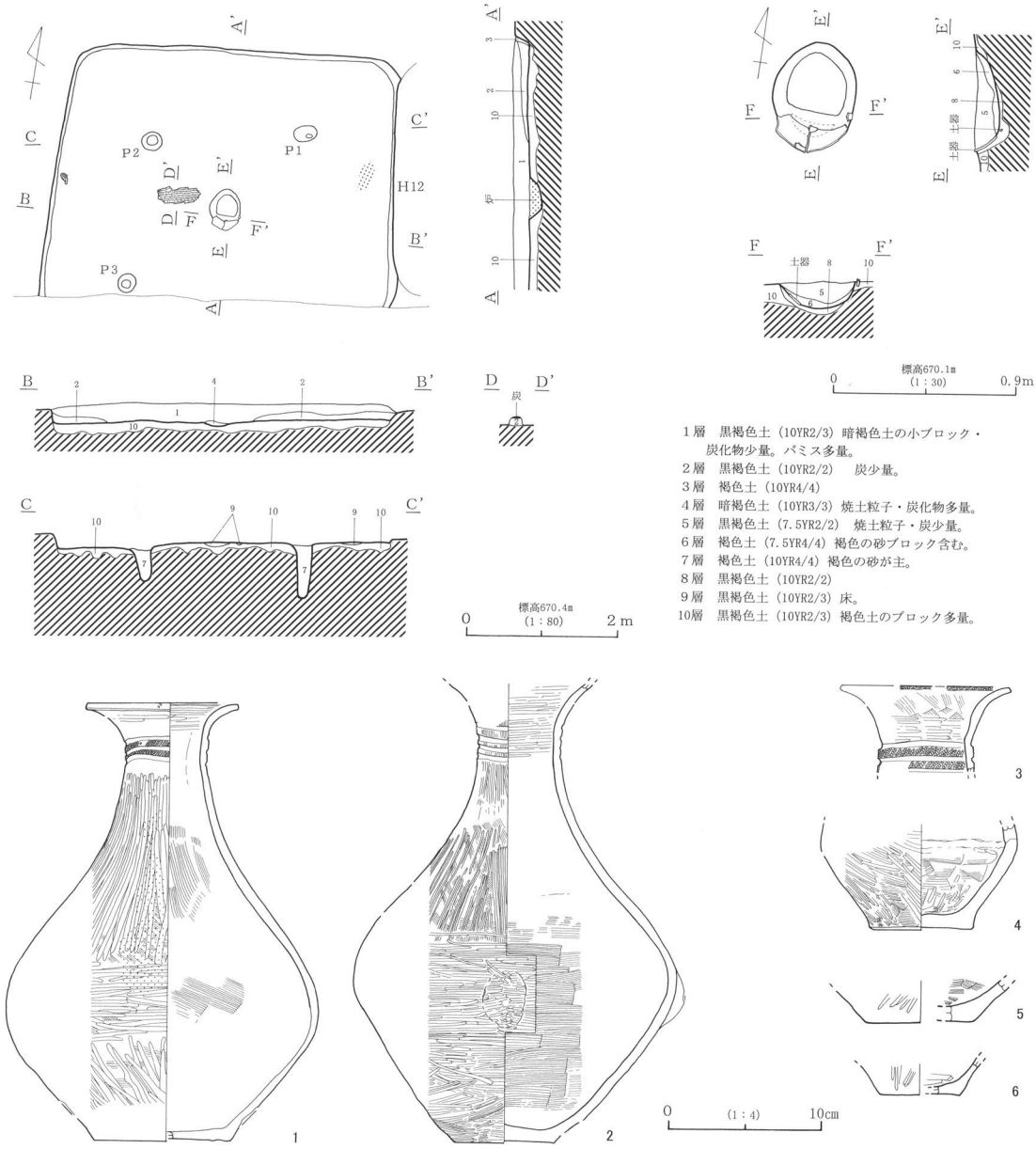
本址は、出土量は少ないが、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定されよう。

（９）Ｈ９号住居址

本址は、せ・そ－81・82Grに位置する。H12号住居址に切られている。形態は隅丸方形であろう。北壁4.1ｍ、東壁検出部3.1ｍ、西壁検出部3.2ｍ、最深の壁残高は西壁で22cmを測る。主軸方位はＮ－２°－Ｗを示す。ピットが３個検出され、位置から主柱穴がＰ１～Ｐ３で、南北柱間1.9ｍ東西2.0ｍ西側が狭い台形に配置されている。Ｐ１は長径30cm短径22cm深さ72cm、Ｐ２が径26cm深さ46cm、Ｐ３が径24cm深さ58cmを測る。床面は全体に非常に堅く敲き締められていて、平坦である。床下の掘方は８cm前後である。周溝は見られなかった。Ｐ１と東壁間の床面に南北80cm東西20cm厚さ５cmの焼土がみられた。炉の西側と西壁下中央に床面から７cm浮いて炭化材が出土した。

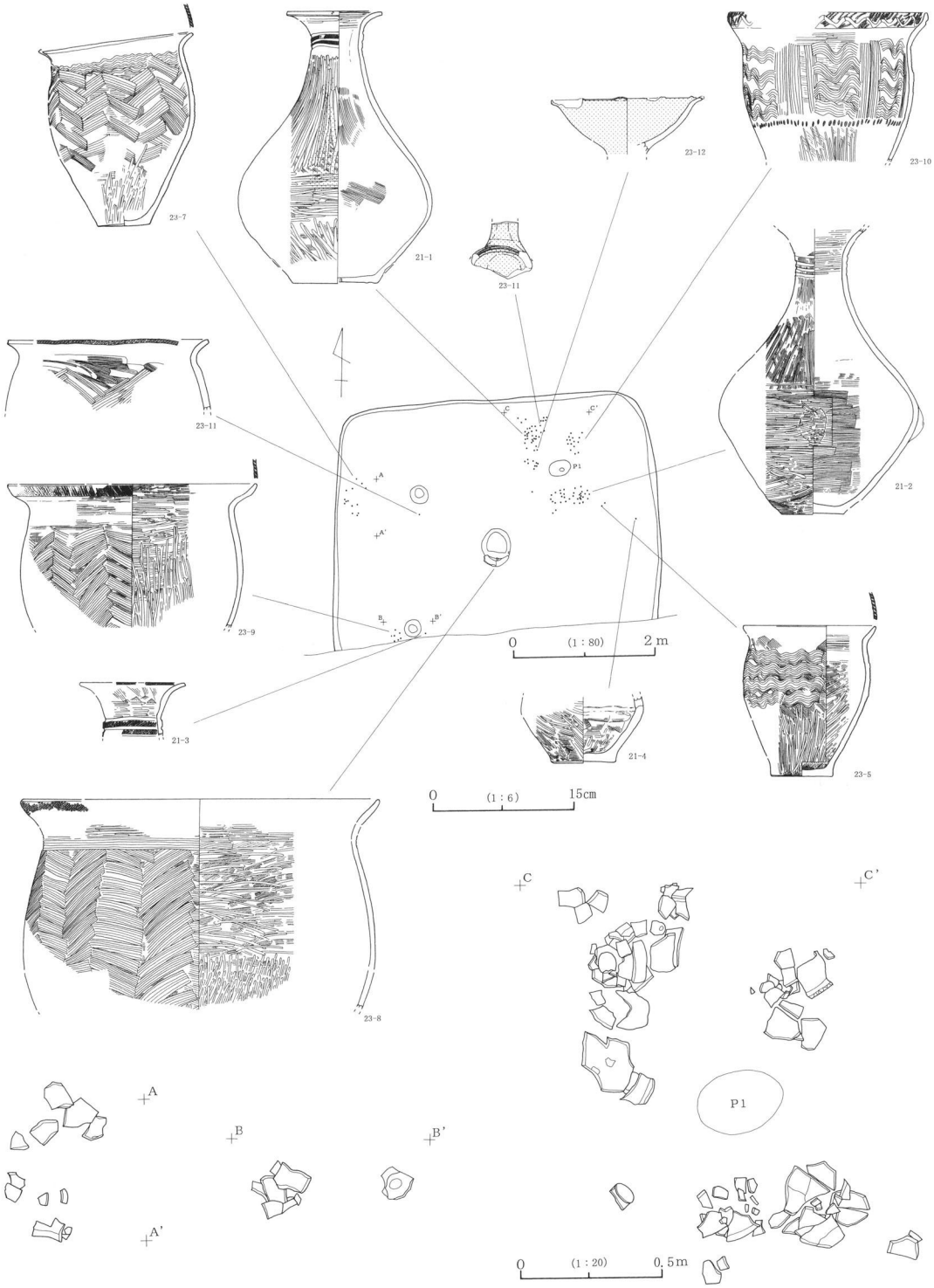
炉は住居中央部から検出された。長径50cm短径40cm深さ12cmの楕円形地床炉である。炉の南縁には炉縁石の代用であろう甕（第23図８）が逆位に置かれていた。この土器を固定するためか土器の下部の炉掘方は、他より５cmほど深めである。炉の覆土は、焼土粒子が少量で焼土はみられなかった。

遺物は多量の土器がＰ１・Ｐ２の周辺床面より出土した。図示した遺物は弥生土器の壺・甕・鉢・高坏、土製品、石器がある。その他土器片257片の内14片が内外面赤彩の鉢・高坏で赤彩された壺は

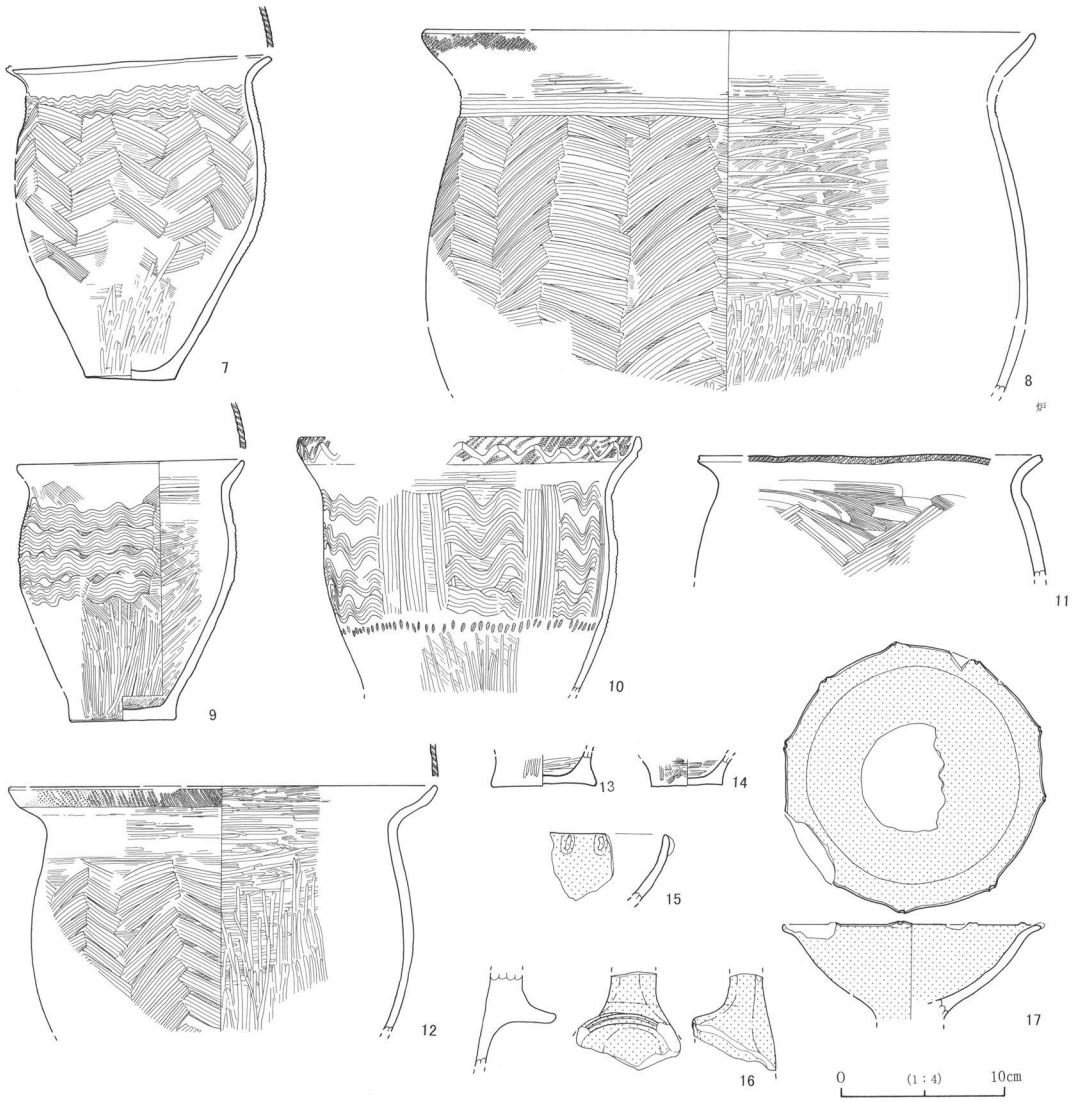


第21図　Ｈ９号住居址実測図および出土遺物実測図

５片ある。壺はいずれも無彩で１～６・18～32がある。１は細い頸部から短く外反する口縁部を持ち、胴部は中央部の下位に最大径を持ち無花果状を呈する。面取された口唇部に縄文、頸部の文様帯にヘラ描平行沈線を巡らし中に縄文を施す。外面のミガキはハケ調整が窺え入念でない。胴部上半は縦に胴部中央は横に胴部下半は斜めにミガかれる。頸部から胴部中央下位にかけて疎らに僅かな範囲に赤色塗彩される。２は筒状の頸部から短く外反する口縁部を持ち、胴部は中央部の下位に最大径を持ち無花果状を呈する。文様は頸部に４本のヘラ描平行沈線文を持つだけである。胴部器形の変換点に突起が１個貼付される。外面のミガキはハケ調整が窺え入念でない。胴部上半は縦に胴部中央以下は横



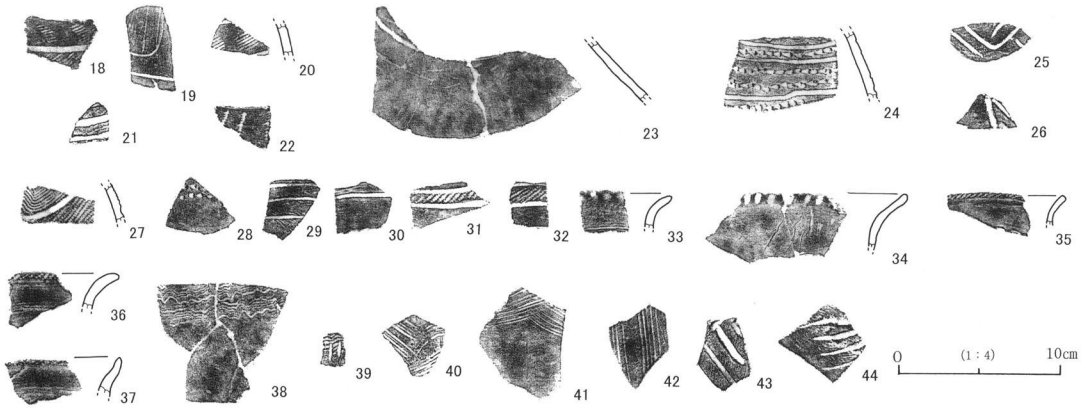
第22図　Ｈ９号住居址遺物出土状態実測図



第23図　Ｈ９号住居址出土遺物実測図

ににミガかれる。外反する口縁の３は、面取された口唇部に縄文が頸部にヘラ描平行沈線文・縄文が施される。４は底部内面と胴部の割れ口に赤色顔料が付着している。23の頸部にはヘラ描沈線、18～22・19～27の胴部片にはヘラ描平行沈線・縄文・ヘラ描「U」字文・短い斜めの櫛描条線文・櫛描刺突列文・ヘラ描刺突列文・ヘラ描山形文等が施文されている。

甕は７～14・33～44がある。口縁部は外反する口縁７・９・11・33～36と、受口状口縁８・10・12・37がある。７～９・11は胴部上部に張りを持ち口縁部径と胴部最大径が同じである。10は口縁部に最大径を持ち胴上部はあまり張らずに底部に至る。７～９・11・12・35～37の口唇部17には縄文、28・29にはヘラの刻目が施文される。７は頸部に櫛描波状文施文後に胴部に櫛描斜走文を縦の羽状に施される。９は胴部に、４帯の櫛描波状文が施文される。炉に使用された８は、内面の火熱を受けていた部分が鈍い赤色に変色している。口縁部に縄文、頸部に横の櫛描条線文施文後に胴部に櫛描斜走文を縦の羽状に施される。10は口縁部に縄文・ヘラ描連続山形文、胴部は２帯または３帯の縦の櫛描



第24図　Ｈ９号住居址出土遺物実測図

第７表　Ｈ９号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	弥生	壺	(10.0)	8.9	28.5	口縁ミガキ、頸部～胴部 ハケ目	口唇部・頸部縄文（ＬＲ）→3本の平行沈線文、口縁ミガキ、胴部ハケ目→ミガキ　疎らに僅かに塗彩	完全実測	Ⅰ・Ⅳ区
2	弥生	壺	－	6.6	<30.0>	口縁ミガキ、胴～底部 ハケ目	頸部に4本のヘラ描平行沈線文、ハケ目→ミガキ	完全実測。胴部中央１コ突起貼付	Ⅰ区
3	弥生	壺	(11.3)	－	<5.6>	ハケ目→ミガキ	口唇部・頸部ＬＲ縄文→ヘラ描平行沈線文、ハケ目→ミガキ	完全実測	Ⅲ区
4	弥生	壺	－	6.8	<7.0>	ハケ目→一部ミガキ	胴部ハケ目→ミガキ、底部ミガキ	完全実測。内外赤色顔料付着	Ⅰ区
5	弥生	壺	－	(7.0)	<2.5>	ハケ目	胴部ハケ目→ミガキ	回転実測	フクド一括
6	弥生	壺	－	(5.0)	<2.1>	ハケ目→ナデ	胴部ハケ目→ミガキ	回転実測	フクド一括
7	弥生	甕	(16.4)	5.5	19.7	口縁ヨコナデ、胴～底部ハケ目→ミガキ	口唇部ＲＬ縄文、頸部櫛描波状文（6本）、胴部櫛描斜走文縦羽状（6本）、口縁ヨコナデ胴上半～中央ハケ目、胴下半ヘラケズリ→ミガキ、底部ヘラケズリ	完全実測	Ⅰ区
8	弥生	甕	33.8	－	<21.6>	口縁ミガキ　胴部ハケ目→ミガキ	口唇・口縁部縄文（ＲＬ）、頸部横の櫛描条線文（6本）、胴部櫛描斜走文（6本）、口縁ミガキ、胴部ハケ目→下半部ミガキ	回転実測	炉
7	弥生	甕	(16.4)	5.5	19.7	口縁ヨコナデ、胴～底部ハケ目→ミガキ	口唇部ＲＬ縄文、頸部櫛描波状文（6本）、胴部櫛描斜走文（6本）、口縁ヨコナデ　胴上半～中央ハケ目、胴下半ヘラケズリ→ミガキ、底部ヘラケズリ	完全実測	Ⅱ区
8	弥生	甕	－	－	<21.6>	ハケ目→ミガキ	頸部横の櫛描条線文（6本）、胴部櫛描斜走文（6本）、口縁ミガキ、　胴部ハケ目→下半部ミガキ	回転実測	Ⅰ区、炉
9	弥生	甕	(14.0)	6.5	15.8	口縁ヨコナデ、胴部ハケ目→ミガキ	口唇部ＲＬ縄文、胴上半櫛描波状文（6～7本）、口縁ヨコナデ、胴部ハケ目→ミガキ　、底部ミガキ	完全実測	Ⅰ区、Ⅰ区ホリ方
10	弥生	甕	21.2	－	<15.7>	ミガキ	口縁縄文（ＲＬ）→ヘラ描連続山形文、胴部縦の櫛描条線文（6本）→櫛描波状文（6本）、胴中央部刺突列文、口縁ミガキ、胴部ハケ目、胴下半ハケ目→ミガキ	完全実測	Ⅰ区、Ⅰ区ホリ方
11	弥生	甕	21.2	－	<15.7>	ミガキ	口唇ＲＬ縄文、胴部櫛描斜走文、ハケ目	回転実測	Ⅱ区
12	弥生	甕	(26.4)	－	<15.1>	ハケ目→ミガキ	口唇・口縁部ＲＬ縄文、胴部櫛描斜走文、ハケ目	回転実測	Ⅱ・Ⅲ区、P3
13	弥生	甕	－	(6.3)	<2.0>	ハケ目→ミガキ	ハケ目→ミガキ	回転実測	Ⅱ区
14	弥生	甕	－	(4.4)	<1.8>	ハケ目→ミガキ	ハケ目→ミガキ	回転実測	Ⅱ区
15	弥生	鉢	－	－	<4.0>	ミガキ→赤色塗彩	ミガキ→赤色塗彩	完全実測。口縁部2個の突起貼付	Ⅰ区
16	弥生	匙	<6.0>	<6.4>	<5.0>	ミガキ→赤色塗彩	ミガキ→赤色塗彩	完全実測。赤色顔料付着	Ⅰ区
17	弥生	高坏	15.8	－	<5.9>	ミガキ→赤色塗彩	ミガキ→赤色塗彩	完全実測。輪花状突起10個あり	Ⅰ区

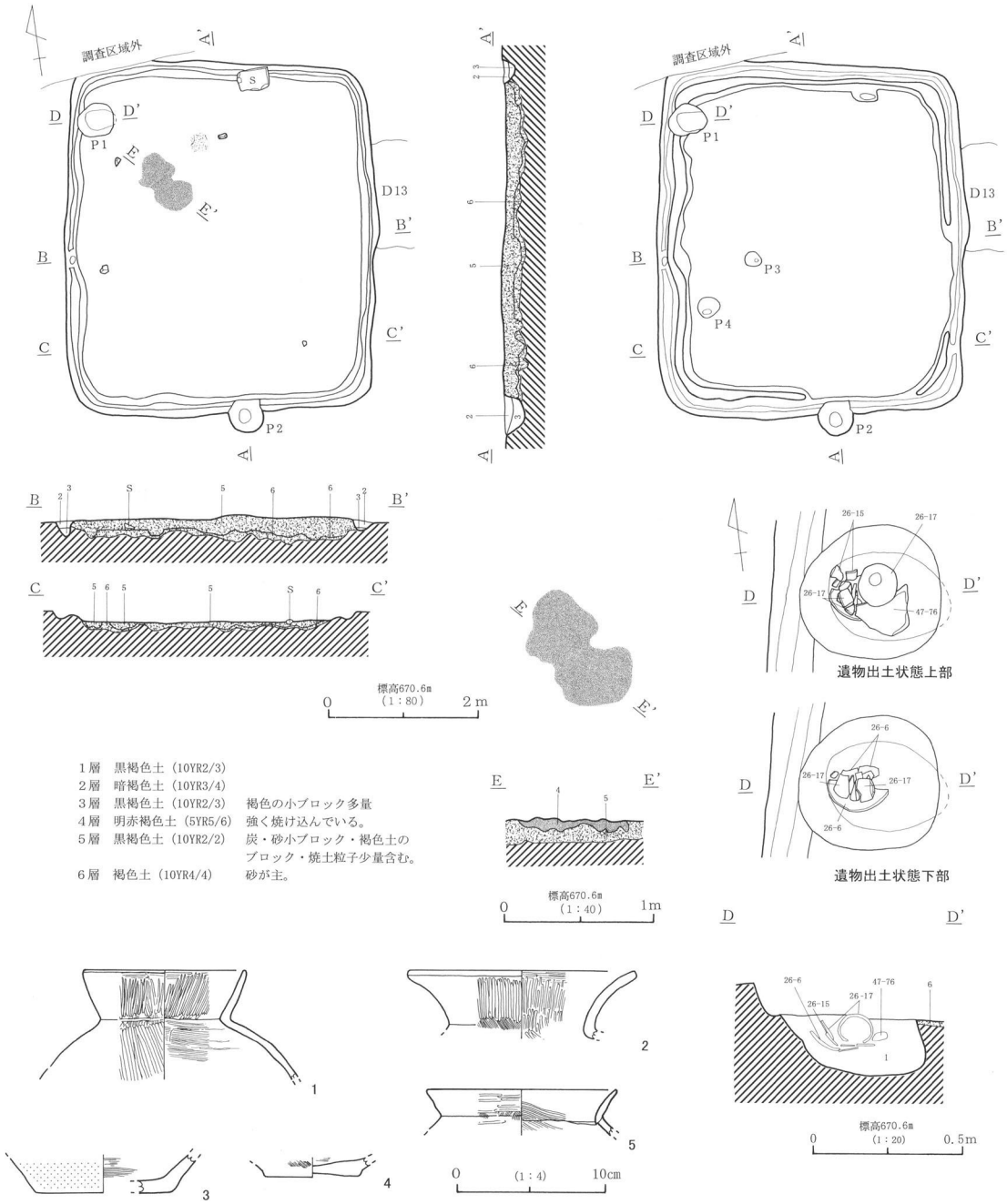
条線文で５区画し間に櫛描波状文を施文する。文様帯の最下位に櫛描刺突列を１周させる。11・12の胴部には櫛描斜走文を縦の羽状に施文する。12の口縁部には縄文が施されている。38～44の胴部片には、櫛描波状文・櫛描斜走文・ヘラ描「コ」字重ね文が施文される。15は内外面赤色塗彩される鉢、口縁部に２個の楕円形の突起が貼付される。16は内外面赤色塗彩される匙。17は内外面赤色塗彩される高坏、口唇部に10個の突起が輪花状に貼付される。

石器は石鏃２点、石鏃未製品６点、二次加工ある剥片１点、他に石器製作の所産である石核・剥片・細片が出土した。石核は黒曜石２点、剥片・細片は黒曜石190片・硬質砂岩１片。

本址は、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定される。

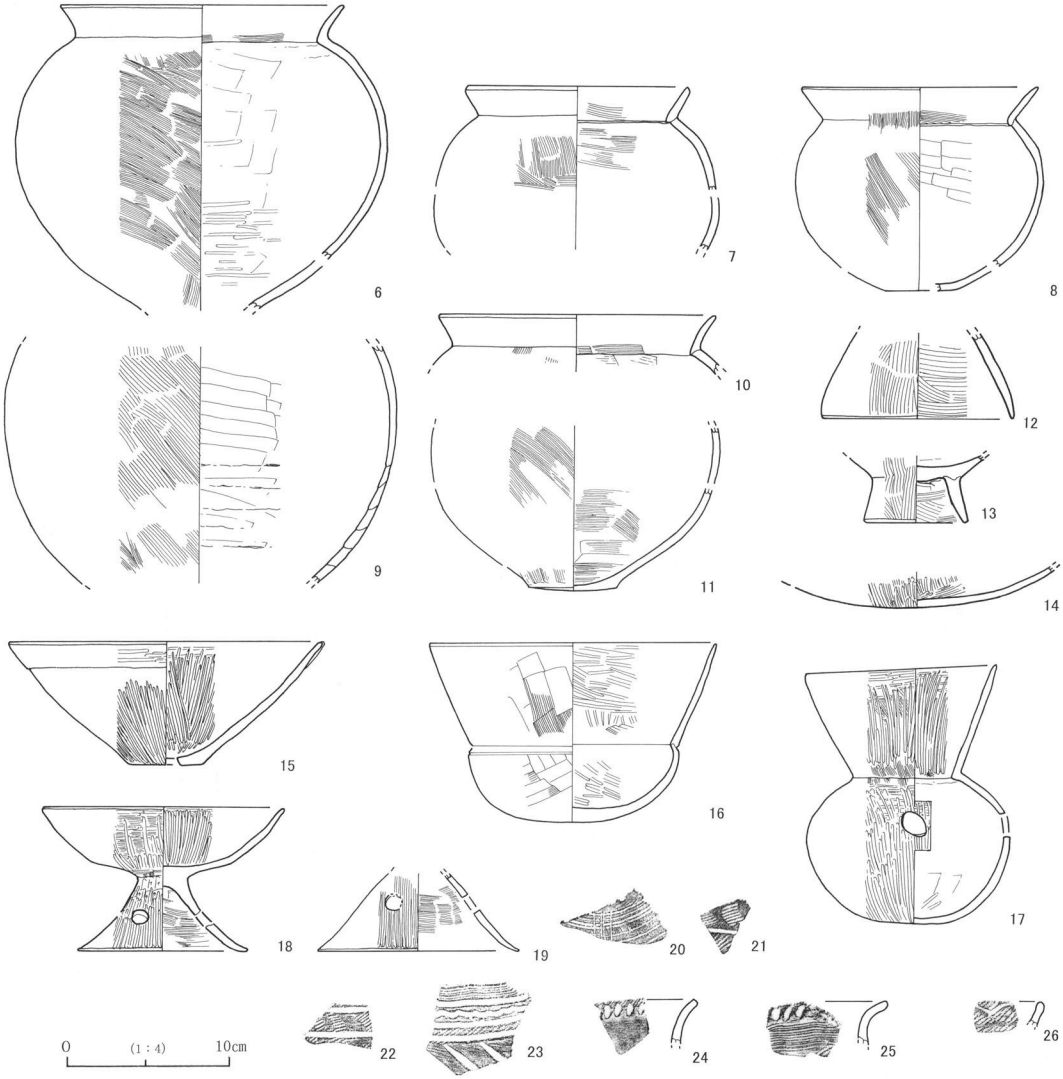
(10) Ｈ10号住居址

本址は、す・せ－77・78Grに位置する。Ｄ13号土坑を切っている。形態は隅丸長方形で、北壁3.8ｍ、南壁3.9ｍ、東壁4.2ｍ、西壁4.4ｍ、最深の壁残高は北壁で５㎝を測る。主軸方位はＮ－10°－Ｅを示す。ピットが床面から２個、床下から２個検出された。位置からＰ２が出入口の施設か棟持柱であろう。円形で径46㎝深さ24㎝を測る。Ｐ１は北西コーナーにあり径44㎝深さ30㎝、多量の土器が出土した。Ｐ３は径24㎝深さ28㎝・Ｐ４は径30㎝深さ30㎝床下から検出された。床面は全体に平坦であるが非常に軟弱で、調査中に正確に床面を把握できなかった。炉は明確な掘り込みを確認できなかった。北壁・西壁に寄った80㎝×40㎝の範囲で、10㎝ほど５層が焼け込んでいて炉と思われる。床下の掘方は20㎝前後、周溝の内側を堤状に幅５～15㎝掘り残している。周溝が全周する。



第25図　H10号住居址実測図および出土遺物実測図

遺物は土師器壺（1・2・14）・甕（4～11）・台付甕（12・13）・高坏（18・19）・坩（17）・小形丸底（16）・甑（15）、石器がある。他に弥生時代後期末壺片（20）、弥生時代中期後半土器片（21～27）があるが、21～27は混入品である。P1内から第26図－17の坩が底部を上の逆位で、その下部から15の甑・6の甕が出土した。他のほとんどがP1東側から炉の北側から出土した。



第26図　H10号住居址出土遺物実測図

壺第25図１・２は外面頸部にハケメ調整を残すが口縁部内外面・胴部外面ヘラミガキされる。第26図14は、ほとんど丸底に近い底部から大きく開きながら立ち上がる。内外面ヘラミガキされ、底部もよくミガキされる。甕５～８は口縁部直線的に外反する。10はやや外彎しながら外反する。胴上部に最大径を持つ球形の胴部である。いずれも外面口縁部・頸部はヨコナデ、胴部外面ハケメ調整される。５・８・10は頸部にハケメがみえる。内面の調整は口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部上半部ヘラナデ、７・11はハケメ調整もされる。６は胴下部にヘラミガキされる。12・13は大小の台付甕の台部、外面ハケメ、内面ハケメ後ナデ調整。15の甑は１孔を持つ底部から「八」字状に大きく開いて薄い折り返し口縁部に立ち上がる。外面の口縁部・底部ナデ調整、他はヘラミガキされる。いわゆる小形丸底の16は小さな体部を持ち、口縁部直線的に外方へ開く。外面口縁部から体部上部へラナデ、口縁部にハケメが残る。内面ヘラナデ・ヘラミガキ。16の坩は直線的に口縁部外反し、胴部は球形を呈し小さな平底を持つ。胴部に焼成後の１孔が穿たれている。外面口縁部と胴部・内面口縁部ヘラミガキされる。

第８表　H10号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	土師器	壺	11.0	−	<7.4>	口辺部ヘラミガキ、頸部ハケメ後ヘラミガキ	口辺部・胴部ヘラミガキ	完全実測	Ⅰ・Ⅱ区
2	土師器	壺	(15.4)	−	<4.6>	ヘラミガキ	口辺部ヘラミガキ、頸部ハケメ	回転実測	検出面
3	弥生	壺	−	(9.2)	<2.6>	ハケ目	ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測	Ⅱ区
4	土師器	甕	−	(6.4)	<1.3>	ナデ	ハケ目、底部ヘラケズリ	回転実測	Ⅱ区
5	土師器	甕	(12.8)	−	<2.1>	口縁ヨコナデ→ヨコナデ、胴ヘラナデ	口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ	回転実測	Ⅱ区
6	土師器	甕	(17.4)	−	<18.7>	口辺部ハケメ・ヨコナデ、胴部ヘラミガキ・ヘラナデ	口縁部・頸部ヨコナデ、胴部ハケメ、胴下部ヘラナデ	回転実測	Ⅰ区、Ⅱ区、P1
7	土師器	甕	(13.8)	−	<10.0>	ハケ目	口縁部・頸部ヨコナデ、胴部ハケメ	回転実測	Ⅰ区、Ⅱ区
8	土師器	甕	(14.6)	(4.2)	12.5	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ、胴部ハケメ	回転実測	Ⅰ区
9	土師器	甕	−	−	<14.5>	ヘラナデ	ハケ目	回転実測	Ⅰ区、Ⅱ区
10	土師器	甕	(17.0)	−	<3.6>	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ	回転実測	Ⅱ区
11	土師器	甕	−	5.4	<10.0>	ハケメ後ヘラナデ	ハケメ	回転実測	Ⅰ区
12	土師器	台付甕	−	(11.8)	<5.3>	ハケメ後ヘラナデ	ハケ目	回転実測	Ⅱ区
13	土師器	台付甕	−	(6.4)	<4.1>	底部ナデ、台部ハケメ後ヘラナデ	ハケ目	回転実測	Ⅰ区
14	土師器	壺	−	7.4	<2.3>	ヘラミガキ	胴部・底部ヘラミガキ	完全実測	検出面
15	土師器	甑	(19.4)	4.4	7.6	ヘラミガキ	口縁部ナデ、体部ヘラミガキ	完全実測	Ⅱ区、P1
16	土師器	小形丸底	(17.6)	−	11.0	口縁部ヘラミガキ、体部ヘラナデ・ヘラミガキ	口縁部ハケメ・口縁上部ヨコナデ、体部ヘラナデ・ヘラケズリ	完全実測、完形	Ⅱ区
17	土師器	坩	11.8	4.4	15.4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	P1
18	土師器	高坏	(14.8)	(10.4)	8.8	坏部ヘラミガキ、脚部ハケメ後ナデ	坏部ハケメ後ヘラミガキ、脚部ヘラミガキ	回転実測	Ⅰ区
19	土師器	高坏	−	(12.4)	<4.7>	脚部ハケメ後ナデ	脚部ヘラミガキ	回転実測	Ⅰ区

18の高坏は坏部があまり明瞭でない稜を持ち浅く大きく開く、脚部は外彎気味に「八」字状に開く。脚部に３孔を有す。外面坏部にハケメがうかがえるが、脚部・内面坏部とともにヘラミガキされる。脚部内面はハケメ後ナデ調整。19も高坏の脚部で残存部で２個の孔がある。20は無彩の壺でヘラ描Ｔ字文が施文される。21～27は弥生時代中期後半の壺片・甕片であり、混入品である。

石器は台石（石質輝石安山岩）が２点出土した。他に混入品と考えられる石鏃１点、石鏃未製品１点、黒曜石の石核２点、黒曜石の剥片・細片72片・硬質砂岩１片が出土した。

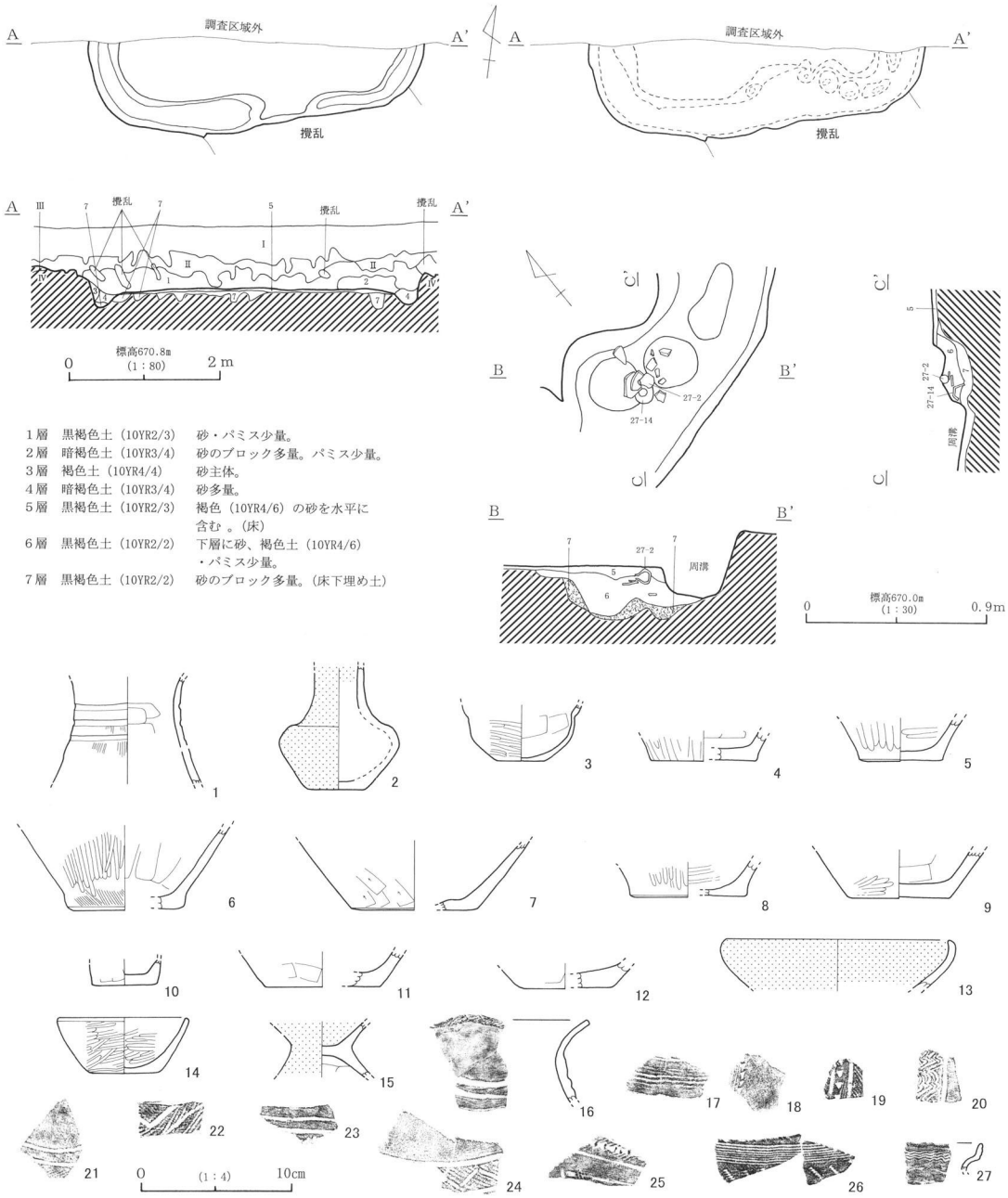
本址は、土器の特徴から古墳時代前期後半に比定される。

(11) H11号住居址

本址は、せ－89・90Grに位置する。大半が調査区域外の現道下に延びる。調査範囲内で柱穴や炉は検出されなかった。東壁検出部0.5ｍ、南壁4.0ｍ、西壁検出部1.1ｍ、最深の壁残高は南壁で18cmを測る。周溝が南壁中央部を除き床面下を巡る。床面は全体に非常に堅く敲き締められていて、平坦である。床下の掘方は全体は浅いようである。南壁中央部から南東コーナーにかけての壁よりは、幅60cm前後の範囲が30cmほど深く掘られていた。この範囲から第27図２・14のミニチュア土器等が出土した。

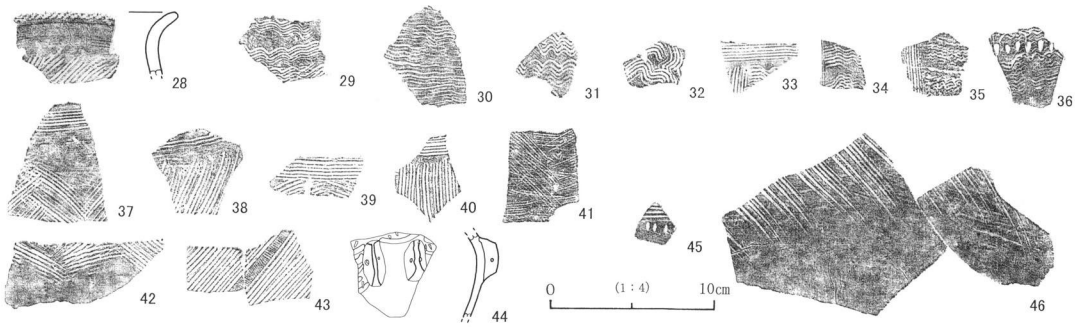
第９表　H11号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	弥生	壺	−	−	<7.1>	ヘラナデ	ヘラ描平行沈線文（3本）	回転実測	床
2	弥生	壺	−	4.0	<8.2>	赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	完全実測	床下
3	弥生	壺	−	(3.1)	<3.8>	ヘラナデ	ヘラミガキ	回転実測	フク土一括
4	弥生	甕	−	(7.0)	<2.0>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	床
5	弥生	甕	−	(5.6)	<2.7>	ヘラナデ	ヘラミガキ	回転実測	フク土一括
6	弥生	甕	−	(7.8)	<5.5>	ヘラナデ	ハケ目→ヘラミガキ	回転実測	〃
7	弥生	甕	−	(8.4)	<4.6>	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	〃
8	弥生	甕	−	(7.8)	<2.4>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	〃
9	弥生	甕	−	(6.8)	<3.1>	ヘラナデ	ヘラミガキ	回転実測	〃
10	弥生	甕	−	4.3	<1.7>	ヘラケズリ	ヘラケズリ	完全実測	〃
11	弥生	甕	−	(7.7)	<2.3>	−	ヘラケズリ	回転実測	〃
12	弥生	甕	−	(6.4)	<1.7>	−	ヘラケズリ	回転実測	〃
13	弥生	坏	(14.9)	−	<3.3>	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測	〃
14	弥生	鉢	8.8	4.6	3.8	ヘラミガキ→黒斑	ヘラミガキ→黒斑	完全実測	床下
15	弥生	高坏	−	−	<3.8>	坏部 ヘラミガキ→赤色塗彩、脚部ヘラナデ	ヘラミガキ→赤色塗彩	完全実測	フク土一括



第27図　H11号住居址実測図および出土遺物実測図

図示した遺物は弥生土器の壺・甕・鉢・高坏、ミニチュア土器、石器がある。４～12の底部は、６の甕以外は器種が明確でない。壺は１・16～26でいずれも無彩、16の口縁部短く外反し口唇部に縄文が施される。頸部にはヘラ描平行沈線文が１・16に、横の櫛描条線文が17に施文される。18～20の胴上部から中央部には縦のヘラ刺突列・櫛描波状文・ヘラ描沈線文が施される。21～25にはヘラ描平行沈線・縄文・ヘラ描連続山形文・ヘラの刺突列・櫛歯状工具の刺突列・横櫛描条線文が施文される。

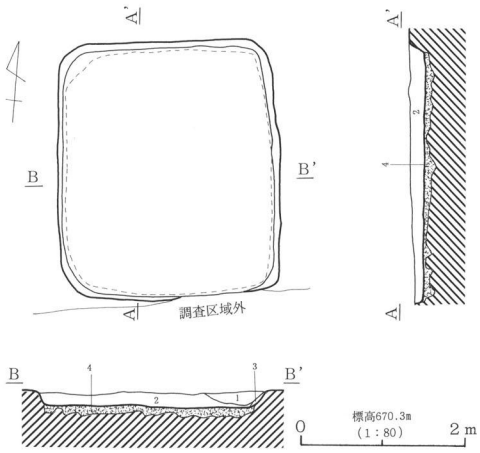


第28図　H11号住居址出土遺物実測図

甕は28～45、28は口縁部短く外反し、口唇部に縄文、胴部には櫛描斜走文が施される。頸部から胴部の文様は、33が頸部に横の櫛描条線文胴部に縦の櫛描条線文と波状文、頸部から胴部まで櫛描波状文が施文される30がある。37～40は頸部に横の櫛描条線文胴部に櫛描斜走文が施される。胴部には櫛描波状文・櫛描波状文と縦の櫛描条線文が施文される31・32・34・35、櫛描斜走文の41～43がある。36・46にはヘラの刺突列が加えられる。45は２孔を持つ突起が２個貼付されている。13は内外面赤色塗彩の鉢で口縁部内弯する。

２・３・10・14はミニチュア土器で、２は外面と内面の口縁部まで赤色塗彩される。胴上部に稜を持ち特異な器形である。３は外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ、底部はヘラケズリされる。14は底部を除き内外面丁寧にヘラミガキされる。

石器は石鏃５点、石鏃未製品６点、石錐１点、横形削器１点、砥石１点、磨石（敲石）１点、他に石器製作の所産である石核・剥片・細片が出土した。石核は黒曜石３点、剥片・細片は硬質砂岩11片黒曜石1307片・輝石安山岩２片、緑色チャート６片が出土した。



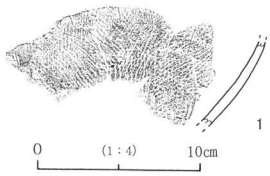
１層　黒褐色土（10YR2/3）
２層　黒褐色土（10YR2/3）　暗褐色土（10YR3/4）褐色（10YR4/6）の砂ブロック多量。炭・焼土粒子・パミス少量。
３層　褐色土（10YR4/4）　褐色（10YR4/6）の砂多量。
４層　暗褐色土（10YR3/4）　褐色土（10YR4/6）の小ブロック多量。

第29図　H12号住居址実測図

本址は、土器の特徴から弥生時代中期後半栗林期に比定される。

(12) H12号住居址

本址は、せ・そ－80Grに位置する。Ｈ９号住居址を切っている。形態隅丸長方形で、北壁・南壁2.5m、東壁・西壁3.0m、最深の壁残高は北壁で23cmを測る。長軸方位はＮ－８°－Ｅを示す。床は平坦であるが軟弱で敲き締められた形跡が窺えない。柱穴・炉・周溝等いっさい認められない。

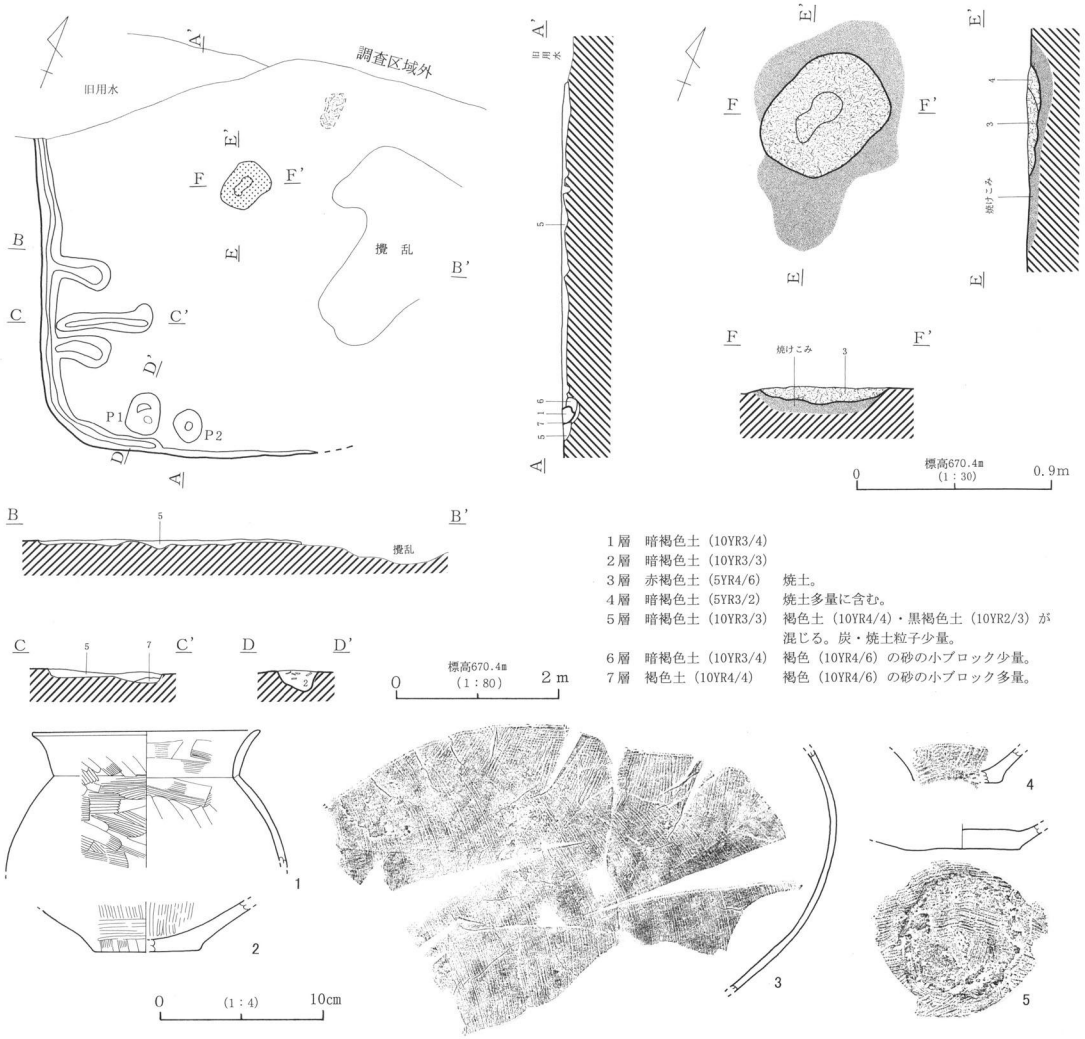


第30図　H12号住居址出土遺物実測図

遺物は第30図の外面ハケメ調整の土師器甕片を図示した。他に同様の土師器甕片を主とする土師器小片127片と弥生時代中期後半の土器小片７片、黒曜石の石核２点・剥片２点が出土した。　以上の遺構と遺物の状況から、本址の所産時期は、弥生時代中期後半より新しいとしかいえない。

(13) H13号住居址

本址は、せ・そ－83・84Grに位置する。北西を旧い用水で切られ、全体が圃場整備等で削平を受



第31図　H13号住居址実測図および出土遺物実測図

けている。形態は隅丸長方形（方形？）で、西側と南側に周溝がみられた。西壁下から東へ延びる深さ５～８㎝の溝が３本あるが、間仕切り等に関するものであろうか。ピットが２個南壁下にある。Ｐ１は長径52㎝短径40㎝深さ24㎝の楕円形で、土器が多く出土した。Ｐ２は円形で径18㎝深さ17㎝を測る。炉は住居址ほぼ中央に110㎝×70㎝の範囲で、Ｈ10号住居址と同様に不整形に５㎝ほど地山が焼け込んでいた。炉本体は80㎝×60㎝の楕円形を呈し、最厚３㎝の焼土がレンズ状に堆積していた。掘方は残存部で２～10㎝前後を測る。

遺物は土師器甕（１・３～５）、壺？２が図示できた。１・３・５がＰ１から出土した。１は口縁部外彎気味に外反し口唇部で外に開く。胴上部に最大径を持つ球形の胴部である。外面口縁部ヨコナデ後ハケメ調整、頸部から胴部はハケメ調整される。内面は口縁部から頸部ハケメ調整、胴部はヘラナデされる。３は球形胴部の甕で外面ハケメ調整。５は外面胴下部から底部全面までハケメ調整される。４も外面ハケメ調整の甕。２は内外面粗いミガキがされているが壺であろうか。

本址は、土器の特徴から古墳時代前期後半に比定される。

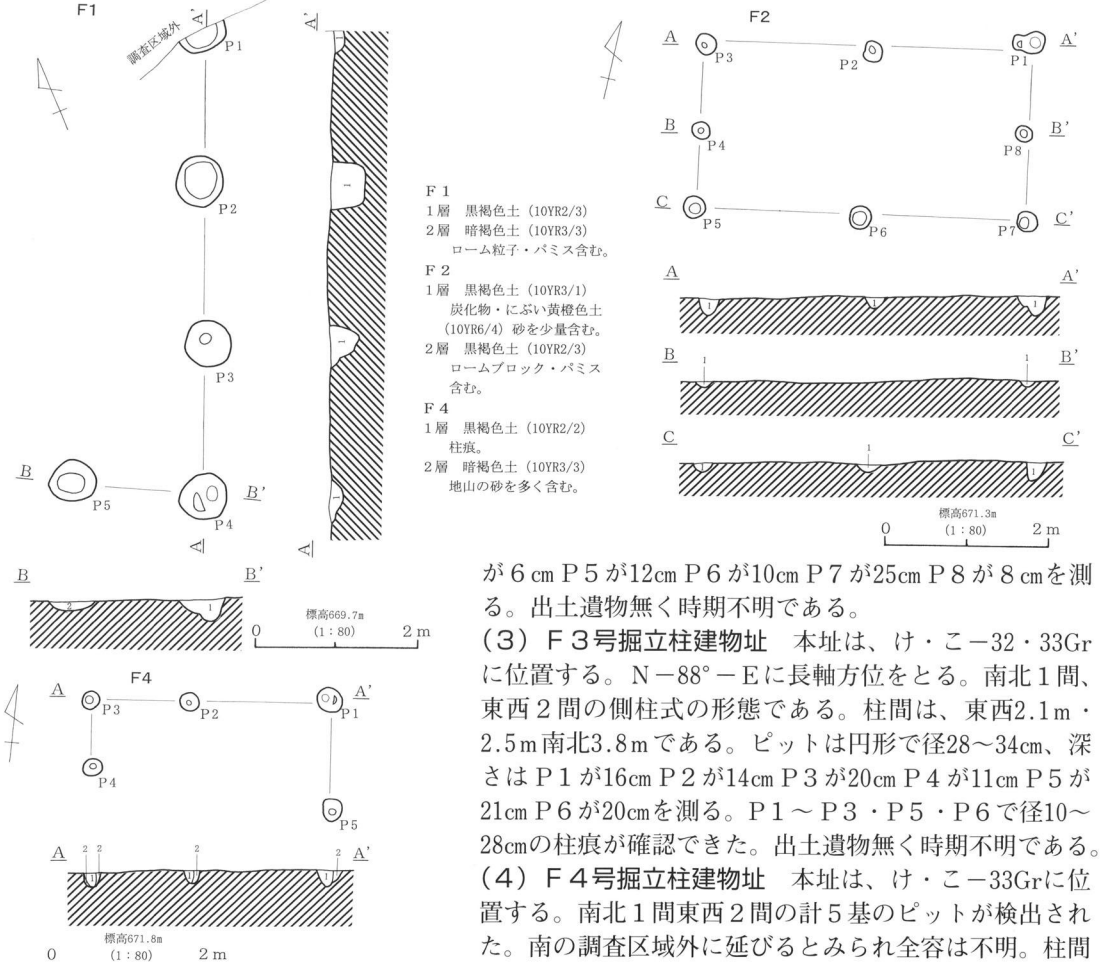
第10表　H13号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	土師器	甕	(14.0)	−	<8.5>	ハケ目	ハケ目	回転実測	Ⅲ区
2	土師器	甕	−	(6.6)	<3.0>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	検出面
3	土師器	甕	−	−	−	ヘラナデ	ハケ目	断面実測	Ⅲ区
4	土師器	甕	−	(5.4)	<2.1>	ヘラナデ	ハケ目	回転実測	Ⅲ区
5	土師器	甕	−	7.2	<1.5>	ハケ目	ハケ目	完全実測	Ⅲ区

第２節　掘立柱建物址

（１）Ｆ１号掘立柱建物址　本址はそ～ち－101・102Grに位置する。Ｈ１・Ｈ２号住居址を切っている。南北３間東西１間の計５基のピットが検出された。柱間は東西0.9ｍ南北0.9ｍである。ピットは円形を呈し、径30cm前後深さはＰ１が14cmＰ２が21cmＰ３が38cmＰ４が29cmＰ５が12cmを測る。柱穴内から弥生時代の土器小片が出土したが混入品とみられる。時期は弥生時代中期後半以降である。

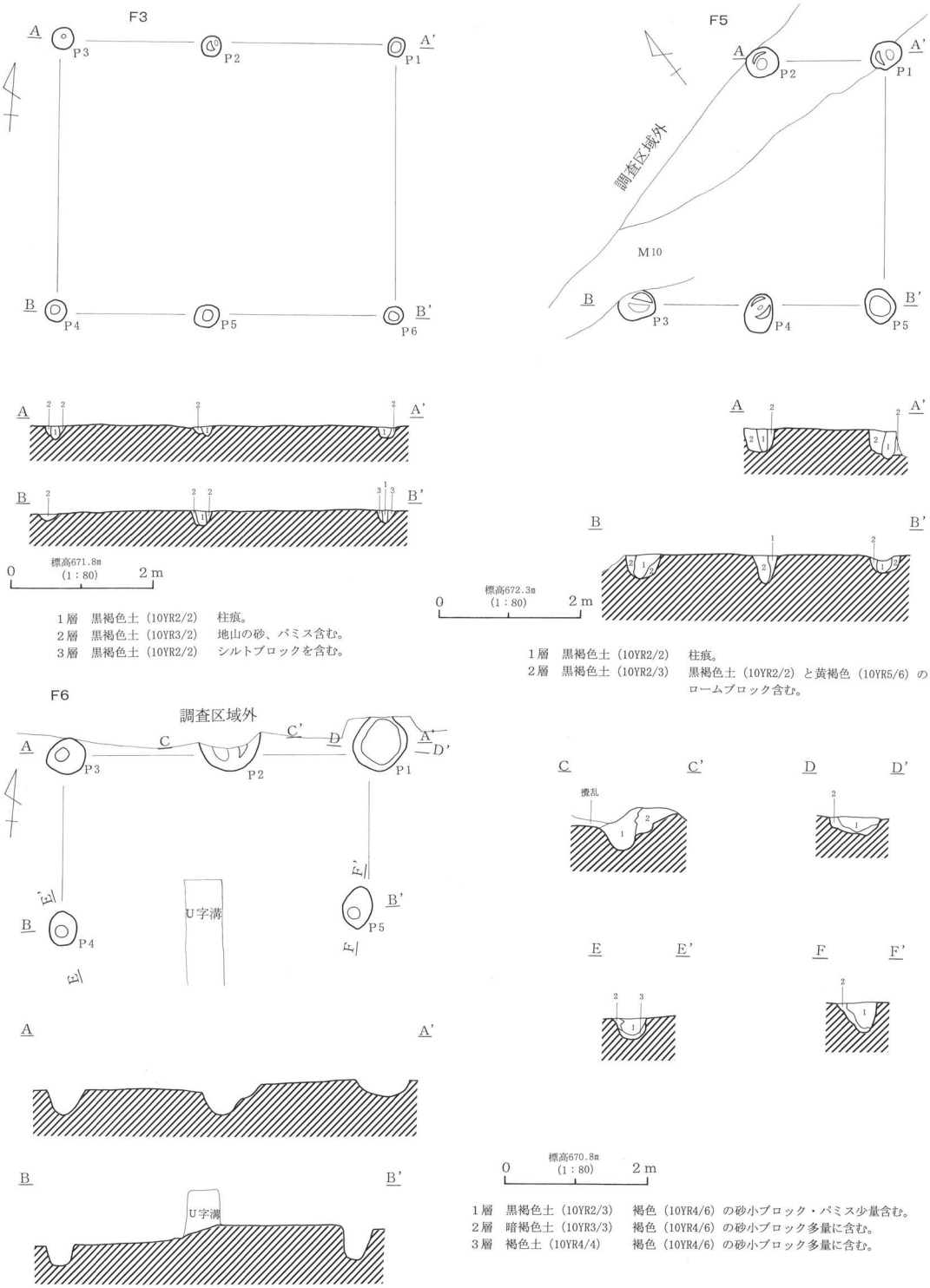
（２）Ｆ２号掘立柱建物址　本址はさ・し－55・56Grに位置する。Ｎ－78°－Ｅに長軸方位をとる。南北２間、東西２間の側柱式の形態である。柱間は東西2.0ｍ南北1.0ｍ・1.1ｍである。Ｐ１は長径40cm短径26cmの８の字、他は円形で径20～30cmを測る。深さはＰ１が26cmＰ２が16cmＰ３が22cmＰ４が６cmＰ５が12cmＰ６が10cmＰ７が25cmＰ８が８cmを測る。出土遺物無く時期不明である。



第32図　掘立柱建物址実測図（Ｆ１・Ｆ２・Ｆ４号）

（３）Ｆ３号掘立柱建物址　本址は、け・こ－32・33Grに位置する。Ｎ－88°－Ｅに長軸方位をとる。南北１間、東西２間の側柱式の形態である。柱間は、東西2.1ｍ・2.5ｍ南北3.8ｍである。ピットは円形で径28～34cm、深さはＰ１が16cmＰ２が14cmＰ３が20cmＰ４が11cmＰ５が21cmＰ６が20cmを測る。Ｐ１～Ｐ３・Ｐ５・Ｐ６で径10～28cmの柱痕が確認できた。出土遺物無く時期不明である。

（４）Ｆ４号掘立柱建物址　本址は、け・こ－33Grに位置する。南北１間東西２間の計５基のピットが検出された。南の調査区域外に延びるとみられ全容は不明。柱間は東西1.6ｍ・1.2ｍ南北0.8ｍ・1.4ｍである。ピットは



第33図　掘立柱建物址実測図（Ｆ３・Ｆ５・Ｆ６号）

ほぼ円形を呈し、径20～34cm前後深さは、Ｐ１が20cm Ｐ２が18cm Ｐ３が18cm Ｐ４が19cm Ｐ５が21cmを測る。Ｐ１～Ｐ３で径10～28cmの柱痕が確認できた。出土遺物無く時期不明である。

（５）Ｆ５号掘立柱建物址　本址はい・う－６・７Grに位置する。M10に切られている。南北１間東西２間の計５基のピットが検出された。調査区域外に延び全容は不明である。柱間は東西1.8m・1.9m南北3.4mである。ピットは楕円形・円形を呈し、Ｐ１が長径46cm短径40cm深さ41cm、Ｐ２が径44cm深さ33cm、Ｐ３が長径46cm短径40cm深さ29cm、Ｐ４が長径52cm短径38cm深さ38cm、Ｐ５が長径52cm短径40cm深さ35cmを測る。Ｐ１～Ｐ５で径12～22cmの柱痕が確認できた。出土遺物無く時期不明である。

（６）Ｆ６号掘立柱建物址　本址はせ・そ－87・88Grに位置する。調査区域外に延び全容は不明である。南北１間東西２間の計５基のピットが検出された。柱間は東西2.3m南北2.4mである。ピットは楕円形・円形を呈し、Ｐ１が長径76cm深さ24cm、Ｐ２が径88cm深さ45cm、Ｐ３が径48cm深さ37cm、Ｐ４が長径46cm短径40cm深さ31cm、Ｐ５が長径48cm短径40cm深さ48cmを測る。柱穴内から弥生時代の土器小片が出土したが混入品とみられ、時期は不明である。

第３節　土坑

（１）Ｄ１号土坑　ち－102Grに位置する。深さ41cmで弥生中期後半の土器壺・甕の破片９点が出土した。

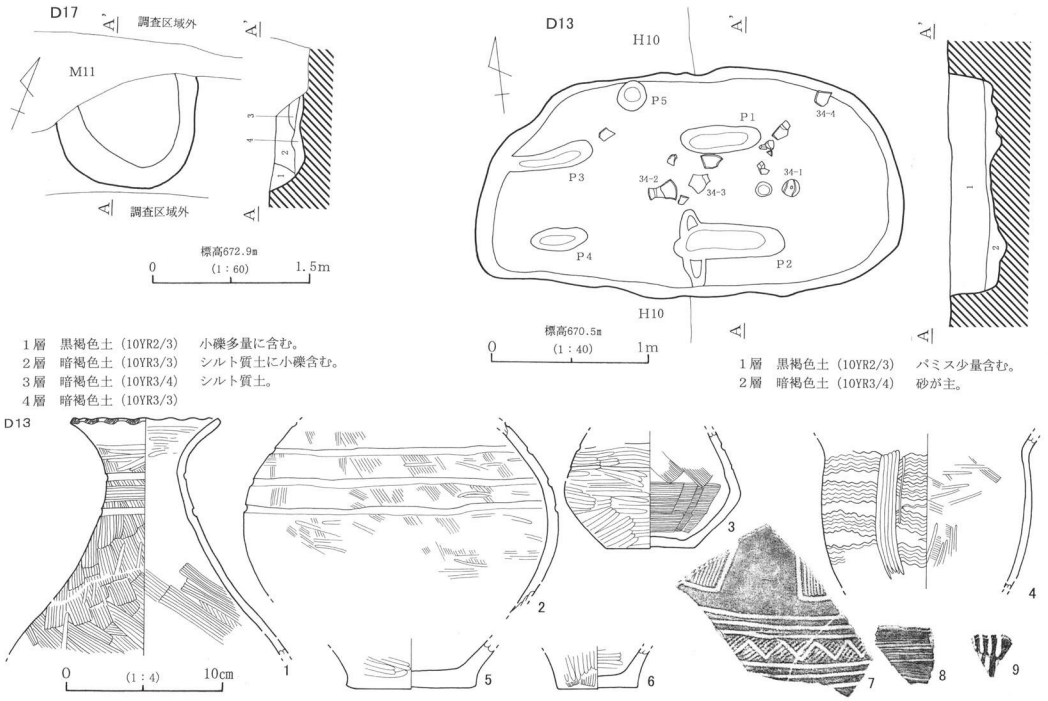
（２）Ｄ２号土坑　ち－101・102Grに位置する。Ｈ１を切り、Ｆ１に切られる、台形で底に浅いピットが２基。弥生中期後半の土器壺・甕・鉢の破片68点が出土した。第37図10～16、10は内外面無彩の鉢。

（３）Ｄ３号土坑　た・ち－99Grに位置する。P24・25・62に切られ、長方形で浅いピット１基。弥生時代中期の土器甕（第37図17）他に甕・壺の破片６点が出土した。

（４）Ｄ４号土坑　ち－99Grに位置する。P29に切られる。底から深さ30cmのピットを有す。

（５）Ｄ５号土坑　そ－95Grに位置し、２層は人為的な堆積で弥生時代中期後半の土器が多量に（295片）出土した。第37図23～49・51の甕・壺・ミニチュア土器、第45図29の石鏃、黒曜石の剥片12点。

（６）Ｄ６号土坑　た－93Grに位置する。第37図18～22の甕・壺の他に24点の壺・甕・鉢片、第48図



第34図　Ｄ13・Ｄ17号土坑実測図

111の台石（輝石安山岩）、黒曜石の石核１・剥片３が出土した。

（７）Ｄ７号土坑　そ－93Grに位置する。長方形で覆土は人為的な堆積状況をみせる。弥生時代中期後半の土器壺・甕の破片６点、黒曜石石核１点が出土した。

（８）Ｄ８号土坑　そ－94Grに位置し、弥生中期後半土器壺・甕・鉢の破片27点、黒曜石石核１点が出土。

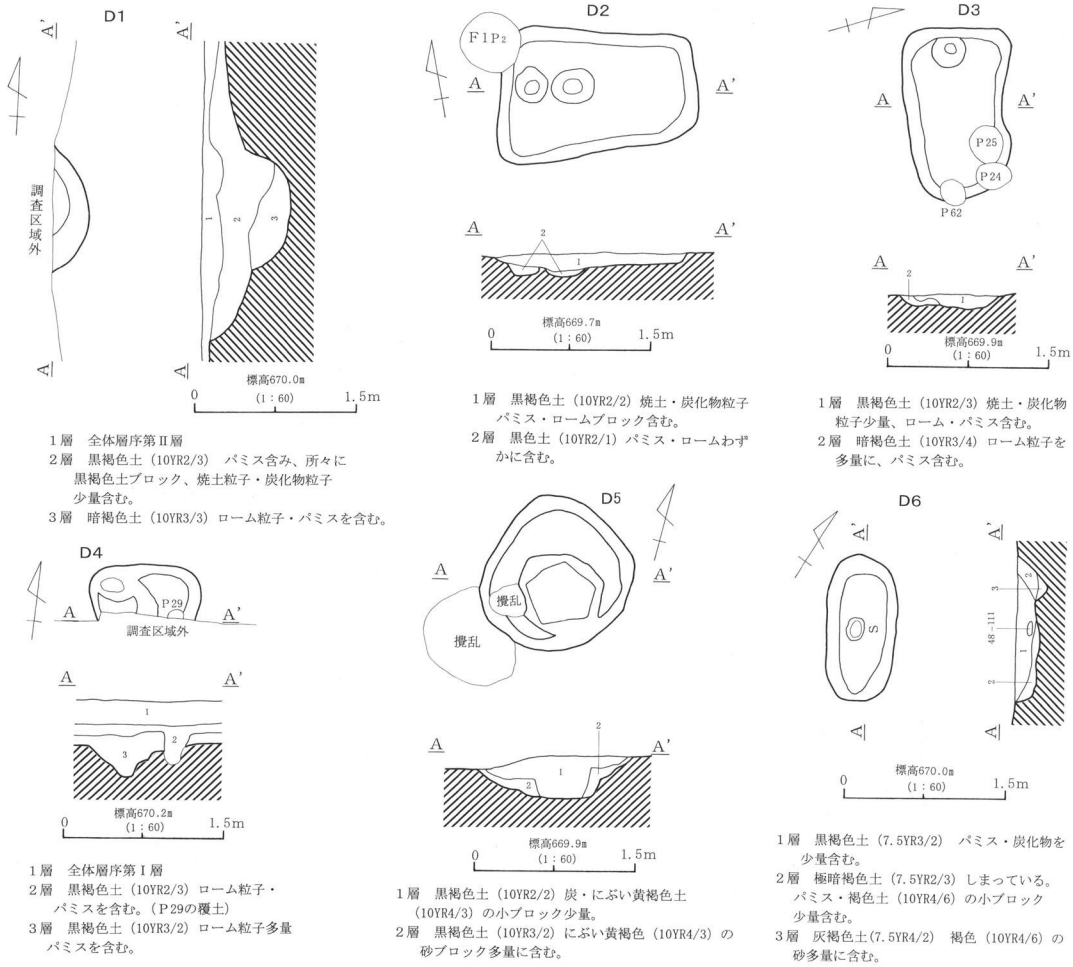
（９）Ｄ９号土坑　そ－95Grに位置する。楕円形を呈すると思われる。深さ43cmで出土遺物はない。

（10）Ｄ10号土坑　し－56Grに位置する。Ｍ４に切られる。楕円形で長軸2.92ｍ・深さ25cmを測る。底に逆茂木が埋め込まれたような小ピットがみられた。出土遺物はない。

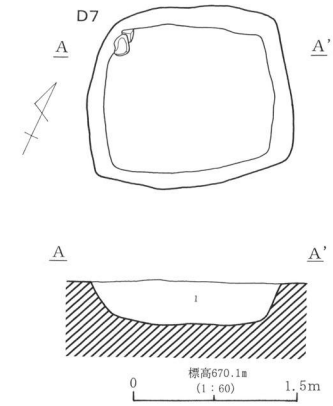
（11）Ｄ11号土坑　す･せ－76Grに位置する。底に楕円形で深さ20cmのピットがある。出土遺物はない。

（12）Ｄ12号土坑　せ－91Grに位置する。P53・58を切り、P57に切られる。第37図52～58の弥生時代中期後半甕・壺・鉢の他に壺・甕・鉢片35点、黒曜石の剥片３点・硬質砂岩の剥片１点が出土した。

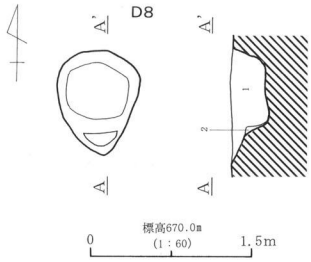
（13）Ｄ13号土坑　す・せ－76Grに位置する。Ｈ10号住居址に切られる。長軸2.7ｍ短軸1.4ｍ深さ28cmのやや不整楕円形を呈する。底から木棺墓の小口穴のような楕円形のピットが４個検出された。規模は、Ｐ１が50×18cm深さ13cm、Ｐ２が70×22cm深さ15cm、Ｐ３が52×12cm深さ17cm、Ｐ４が36×14cm深さ７cm、Ｐ５は円形で径20cm深さ15cmを測る。Ｐ１・Ｐ２間は70cm、Ｐ３・Ｐ４間は50cmを測り、木棺が置かれたとすれば規模が小さく小児用であろうか。覆土などの科学的分析がされていないので積



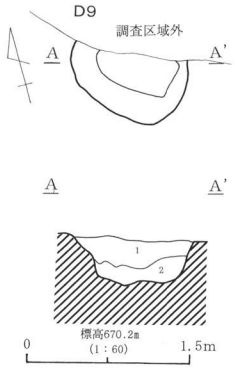
第35図　土坑実測図（Ｄ１・Ｄ２・Ｄ３・Ｄ４・Ｄ５・Ｄ６号）



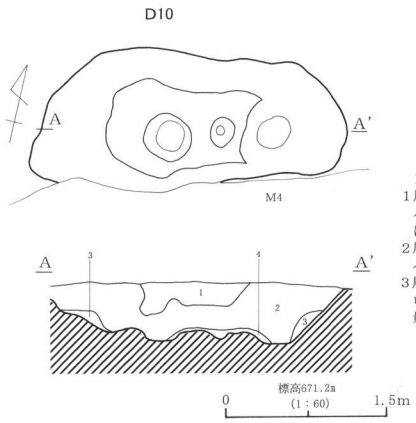
1層　黒褐色土（10YR3/2）　極暗褐色土（7.5YR2/3）のブロック・パミス多量、炭化物を少量含む。
（人為的埋土）



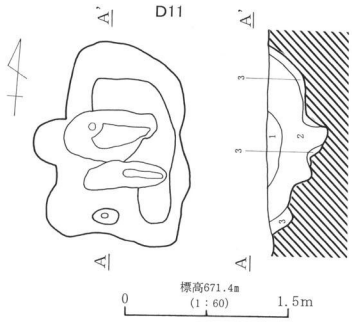
1層　黒褐色土（10YR2/2）　褐色（10YR4/6）の砂の小ブロック少量。D５の１層に似る。
2層　暗褐色土（7.5YR3/3）　黒褐色土（10YR2/2）の小ブロック少量。



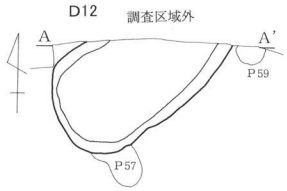
1層　黒褐色土（10YR2/3）
2層　暗褐色土（10YR3/4）砂の小ブロック多量。

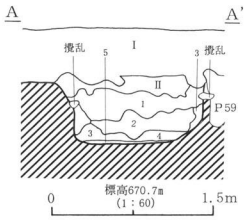


1層　暗褐色土（10YR3/3）砂質土。小礫・パミス多量。
2層　黒褐色土（10YR2/2）　パミス少量。
3層　黒褐色土（10YR3/2）　地山の砂多量。
4層　暗褐色土（10YR3/4）　地山の砂多量。

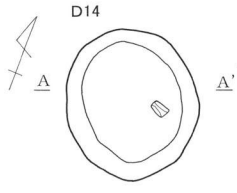


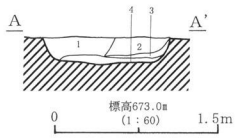
D 11
1層　黒褐色土（10YR2/3）パミス・ローム粒子僅かに含む。
2層　黒褐色土（10YR2/2）パミス含む。
3層　暗褐色土（10YR3/4）ローム粒子・パミスを多量に含む。



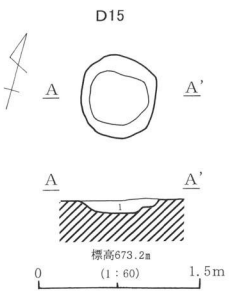


D12
1層　暗褐色土（10YR3/3）炭・パミス小量。
2層　暗褐色土（10YR3/4）砂ブロック・パミス多量。
3層　褐色土（10YR4/4）砂ブロックが主。パミス小量。
4層　黒褐色土（10YR2/3）砂ブロック・パミス少量。
5層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）砂が主。

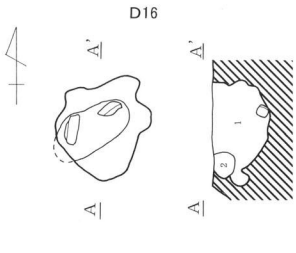




1層　黒褐色土（10YR2/2）粘性あり。パミス僅かに含む。
2層　黒褐色土（10YR2/2）粘性あり。ローム粒子僅かに含む。
3層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子多量に含む。
4層　黒褐色土（10YR2/2）ローム粒子含む。



1層　黒褐色土（10YR2/2）
砂・小礫・炭化物粒子を含む。

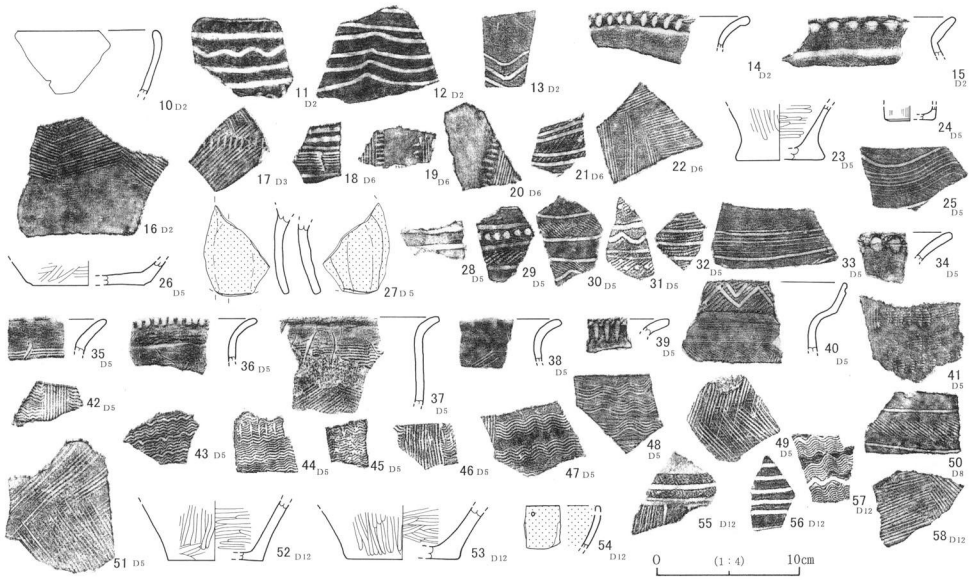


1層　黒褐色土（10YR3/1）
2層　黒褐色土（10YR2/2）
砂・小礫・炭化物粒子を含む。

第36図　土坑実測図（D７・D８・D９・D１０・D１１・D１２・D１４・D１５・D１６号）

第11表　土坑出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	弥生	壺	(9.6)	−	<15.1>	胴部ハケ目、口辺部ヘラミガキ	口唇部 縄文→指頭押捺、口辺部 ハケ目→ヘラミガキ、頸部 ハケ目→ヘラ描平行沈線文（2本）、横櫛描条線文（6本）、胴部 ハケ目→ヘラミガキ	完全実測	〃
2	弥生	壺	−	−	<12.1>	ハケ目	ハケ目→ヘラミガキ、ヘラ描平行沈線文（4本）	回転実測	D13・底面直上
3	弥生	壺	−	5.6	<7.4>	ハケ目	ヘラ描平行沈線文（2本）、ヘラミガキ	完全実測	D13・フク土
4	弥生	甕	−	−	<9.9>	ハケ目→ヘラミガキ	櫛描波状文（6本）、縦櫛描条線文（6本）	回転実測	D13・フク土
5	弥生	甕	−	8.4	<3.1>	−	ヘラミガキ	完全実測	〃
6	弥生	甕	−	(5.1)	<2.5>	ヘラミガキ	ハケ目→ヘラミガキ	回転実測	〃
10	弥生	鉢	−	−	<4.5>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	破片実測	D2、H2
23	弥生	甕	−	(5.9)	<3.8>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	D5・フク土
24	弥生	ミニチュア	−	(3.5)	<1.0>	−	ハケ目	回転実測	〃
26	弥生	壺	−	(8.2)	<1.7>	−	ヘラミガキ	回転実測	〃
27	弥生	匙	(5.9)	−	<5.7>	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測	〃
52	弥生	甕	−	(6.7)	<4.1>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	D12・フク土
53	弥生	甕	−	(7.9)	<3.7>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	〃
54	弥生	鉢	−	−	−	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	破片実測	〃



第37図　土坑出土遺物実測図（Ｄ２・Ｄ３・Ｄ５・Ｄ６・Ｄ８・Ｄ12号）

極的には言及できないが。遺物は第34図１～９の弥生時代中期後半の壺・甕と95点の壺・甕・鉢の破片、第45図30・31の石鏃（黒曜石）があり、大半は第２層から出土した。

(14) **Ｄ14号土坑**　う－８Grに位置する。ほぼ円形で深さ26cmを測る。弥生時代中期後半の土器片２点、輝石安山岩の打製石斧１点、黒色緻密安山岩の石核１点が出土した。

(15) **Ｄ15号土坑**　い－５Grに位置する。円形で南北78cm東西72cm深さ15cmを測る。出土遺物はない。

(16) **Ｄ16号土坑**　う－７Grに位置する。不整形で深さ56cm、覆土に炭化粒子含み底に煤けた安山岩礫２個が出土した。土器等の遺物は無い。

(17) **Ｄ17号土坑**　え－11Grに位置する。M11に切られる。深さ17cm、出土遺物は無かった。

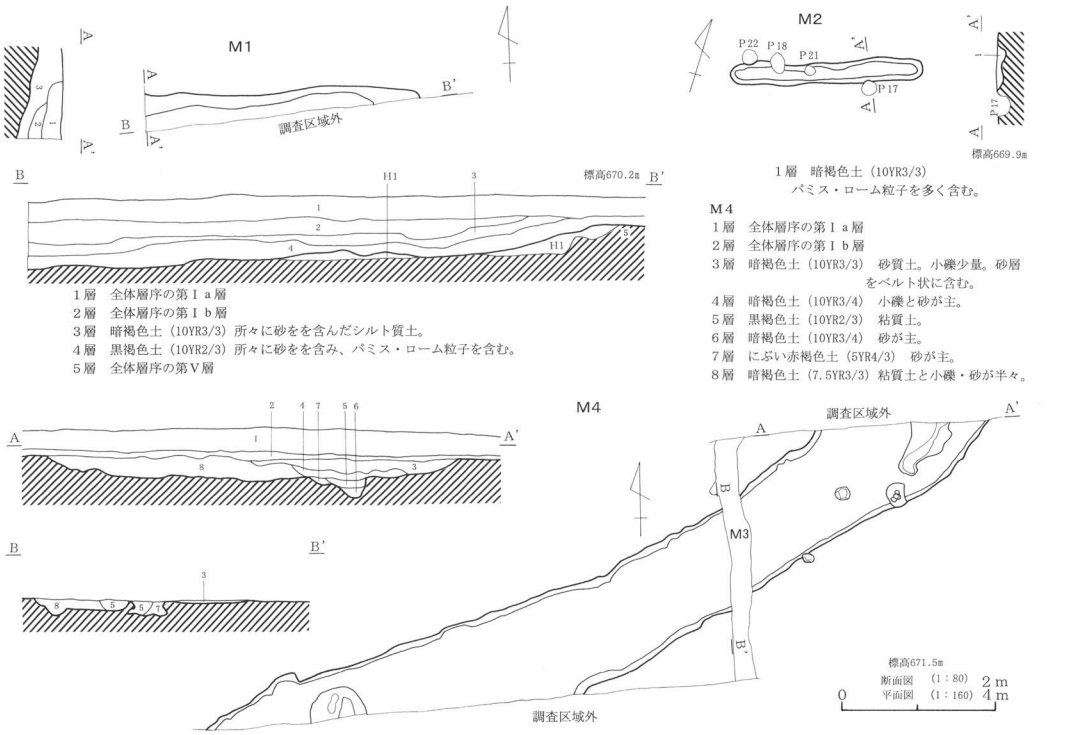
第４節　溝状遺構

（１）**Ｍ１号**　ち－101・102Grに位置する。Ｈ１を切る。覆土に砂やシルトを含む東から西へ緩く傾斜する自然流路である。付近の住居址からの混入品弥生時代中期後半の土製円盤（第41図１）壺・甕・鉢87点が出土した。

（２）**Ｍ２号**　た－98・99Grに位置する。P17・P18・P21・P22に切られる。人為的な溝であり区画

第12表　土坑計測表

遺構名	検出位置	平面形	長軸	短軸	深さ	備　　考	遺構名	検出位置	平面形	長軸	短軸	深さ	備　　考
D1	ち102	円形？	(112)	(34)	41		D10	し-56	楕円形	292	(130)	53	M4に切られる。
D2	た-101・102	台形	180	126・90	17	F1に切られ、H1を切る。弥生中期土器55片、剥片4	D12	せ-91	長方形	(170)	100	32	P53・P58を切り、P57に切られる。弥生中期土器42片、剥片4
D3	た・ち-99	台形	160	100・80	12	P24・25・62に切られる。弥生中期土器6片	D11	さ-48	長方形	180	120	60	
D4	ち-99	楕円形	106	(46)	26	P29に切られる。	D13	す・せ-76	楕円形	270	140	28	H10に切られる。木棺墓？弥生中期土器104片、石鏃2、剥片18
D5	そ-95	円形	150	144	39	弥生中期土器295片、石鏃1、剥片12							
D6	た-93	楕円形	136	64	24	弥生中期土器29片、台石1、石核1、剥片3	D14	う-8	円形	140	120	26	弥生中期土器2片、打斧1、石核1
D7	そ-93	長円形	190	166	40	弥生中期土器6片、石核1	D15	い-5	円形	78	72	15	
D8	そ-94	方形	74	70	40	弥生中期土器27片、石核1	D16	う-7	不整形	90	90	56	
D9	そ-95	楕円形	112	(70)	43		D17	え-11	円形？	140	(104)	17	M11に切られる。



第38図　溝状遺構実測図（M１・M２・M４）

を目的としたものであろうか。幅0.46～0.64m、東西長５m、深さ４～８cm、出土遺物はない。

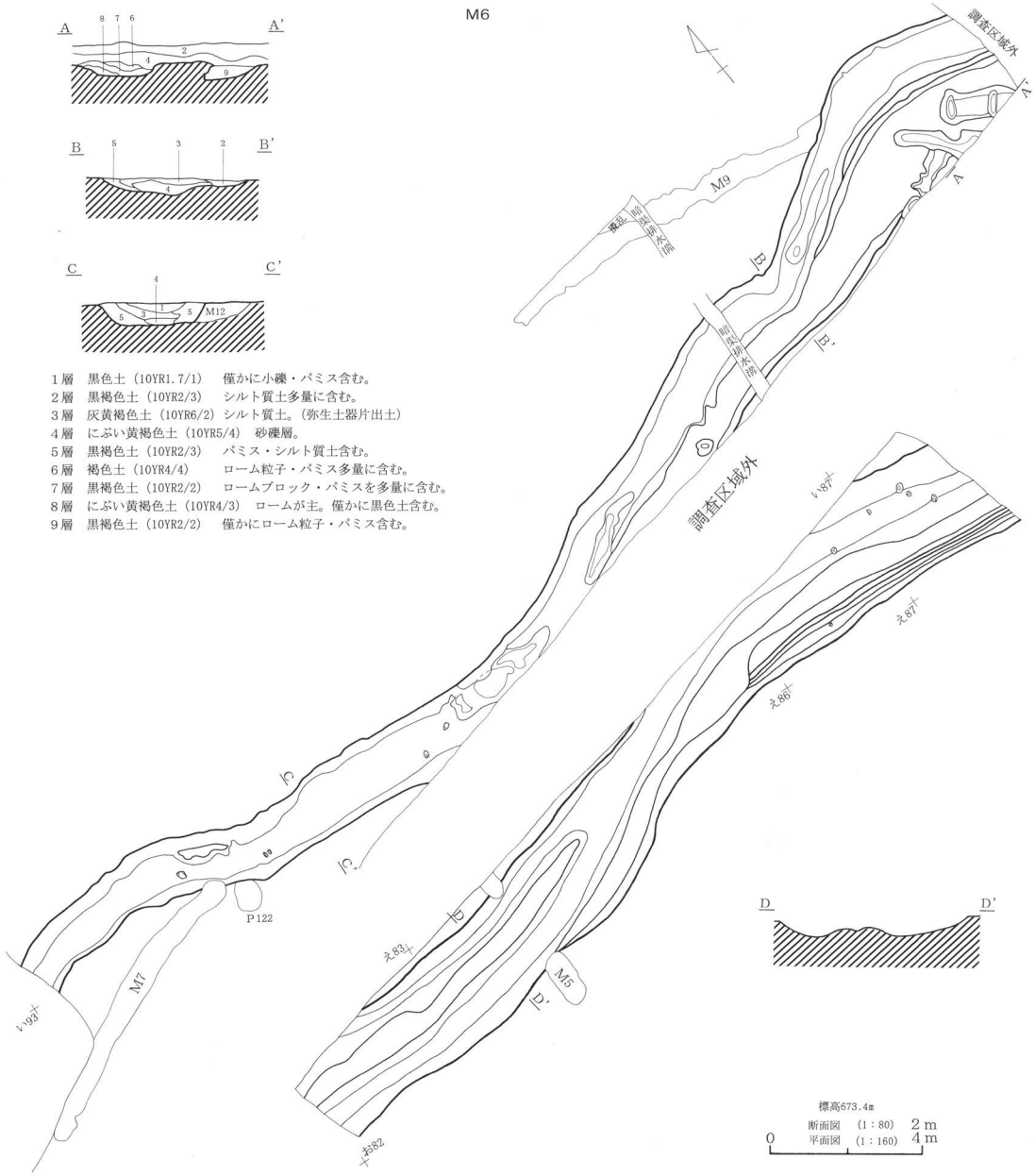
（３）M３号　さ・し－53Grに位置する。M４を切る。地形の傾斜に沿って南北に延びる。幅0.4～0.64m、深さ14～18cm覆土に小円礫を含み自然流路である。出土遺物はない。

（４）M４号　さ・し－52～57Grに位置し、M３に切られ、D10に切られる。地形の傾斜に沿い北東から南西に延びる。覆土に小円礫・砂を含み自然流路である。弥生時代中期後半土器１点・土師器20点・須恵器坏４点の破片、第48図110の凹石（黒色多孔質安山岩）・113の凹石（溶結凝灰岩）が出土した。

（５）M５号　か－19Grに位置し、M６を切る。幅0.54～0.64m深さ６～19cm、出土遺物はない。

（６）M６号　あ～か－１～21Grに位置し、M12・P122を切り、M５・M７・M９に切られる。幅１．４～４m深さ20～92cm、覆土に円礫・シルト・砂・砂礫を含み、自然流路である。西に傾斜し東端と西端の比高は80cmを測る。弥生時代中期後半土器10点・土師器31点・須恵器９点の破片、第47図88・90・91の打製石斧、87の打製石斧未製品、黒曜石石核７点・剥片13点が出土した。

（７）M７号　え・お－８～11Grに位置し、M６・M11・M12を切る。幅0.46～0.7m深さは浅く１～20cm、東から西へ流れる自然流路である。第47図92の打製石斧（輝石安山岩）が出土した。

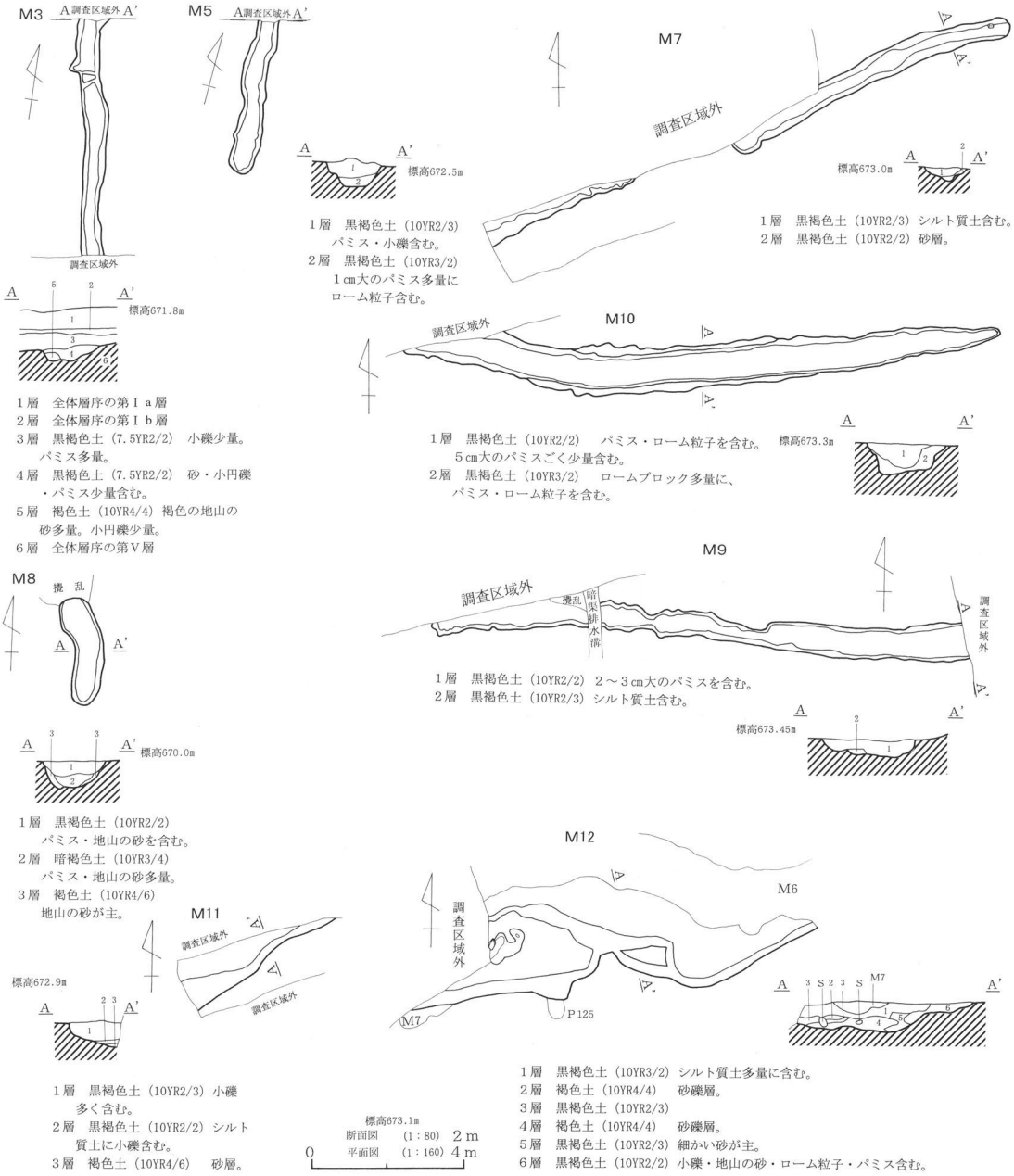


第39図　Ｍ６号溝状遺構実測図

（８）Ｍ８号　そ・た－92Grに位置する。幅0.74～0.94ｍ深さ20cm前後、流水の痕跡無く人工溝址である。土師器６点・弥生中期土器３点の破片、黒曜石の剥片１点出土した。

（９）Ｍ９号　あ・い－１～４Grに位置する。Ｍ６を切る。幅0.34～1.02ｍ深さ５～20cm、覆土にシルト含み自然流路である。土師器破片１点出土した。

（10）Ｍ10号　あ・い－１～４Grに位置し、Ｆ５を切る。断面「Ｕ」字状で幅１ｍ前後深さ２～30cm、底は東から西に低くなる。流水の痕跡はない。弥生中期土器２点の破片が出土した。



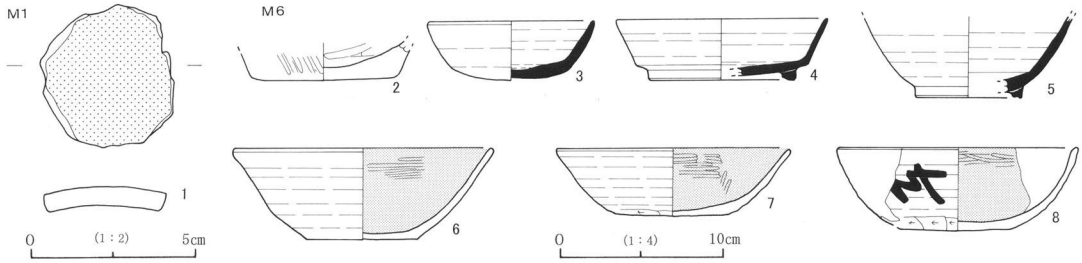
第40図　溝状遺構実測図（M３・M５・M７・M８・M９・M10・M11・M12号）

(11) M11号　お－11Grに位置し、D17を切りM７に切られる。覆土に円礫・シルト・砂を含み、自然流路である。西に傾斜し深さ30cmを測る。出土遺物ない。

(12) M12号　え－７～10Grに位置し、M６・M７・P122・P125に切られる。覆土に円礫・シルト・砂礫を含み、自然流路である。弥生時代中期土器・土師器の破片７点、打製石斧（輝石安山岩）１点、黒曜石石核１点が出土した。

第13表　溝状遺構出土遺物観察表

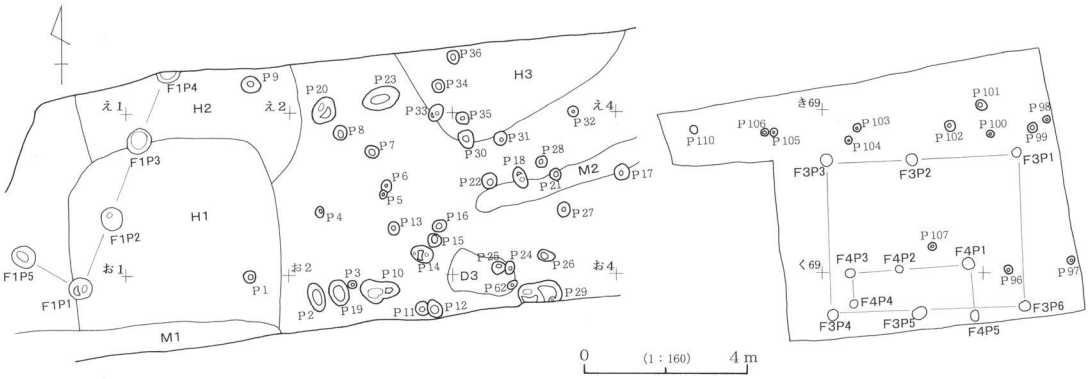
No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	弥生	土製円盤	−	−	−	赤色塗彩	赤色塗彩　鉢または高坏を加工	完全実測	M1
2	土師器	甕	−	9.0	<2.3>	ヘラナデ	ヘラミガキ	完全実測	M6
3	須恵器	坏	10.3	6.7	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	完全実測	M6
4	須恵器	高台付坏	(13.0)	(9.0)	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転ヘラキリ→高台貼付	回転実測	M6
5	須恵器	高台付坏	−	(6.6)	<5.0>	ロクロナデ、火襷	ロクロナデ→高台貼付	回転実測	M6
6	土師器	坏	16.0	6.8	5.7	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部ヘラケズリ	完全実測	M6
7	土師器	坏	(14.4)	(7.1)	4.2	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部外周ヘラケズリ→底部回転ヘラキリ	回転実測	M6
8	土師器	坏	(14.8)	6.7	5.1	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部外周ヘラケズリ→底部回転ヘラキリ　墨書「左」	回転実測	M6



第41図　溝状遺構出土遺物実測図

第6節　ピット

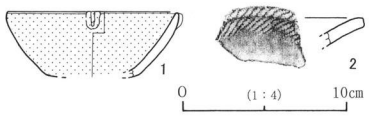
本遺跡からは132個のピットが検出された。これらピットは、く～こ－32～34GrのＦ３・Ｆ４の周辺、そ・た－91・92GrのＨ６・Ｍ８間、そ～ち－99～102GrのＨ１・Ｍ２間に集中している。その検出位置は不規則で建物等を推測できなかった。Ｐ４・Ｐ６・Ｐ９・P13・P19・P23・P37・P39・P40から弥生時代中期の土器破片が、P60から黒曜石の剥片１点が出土した。



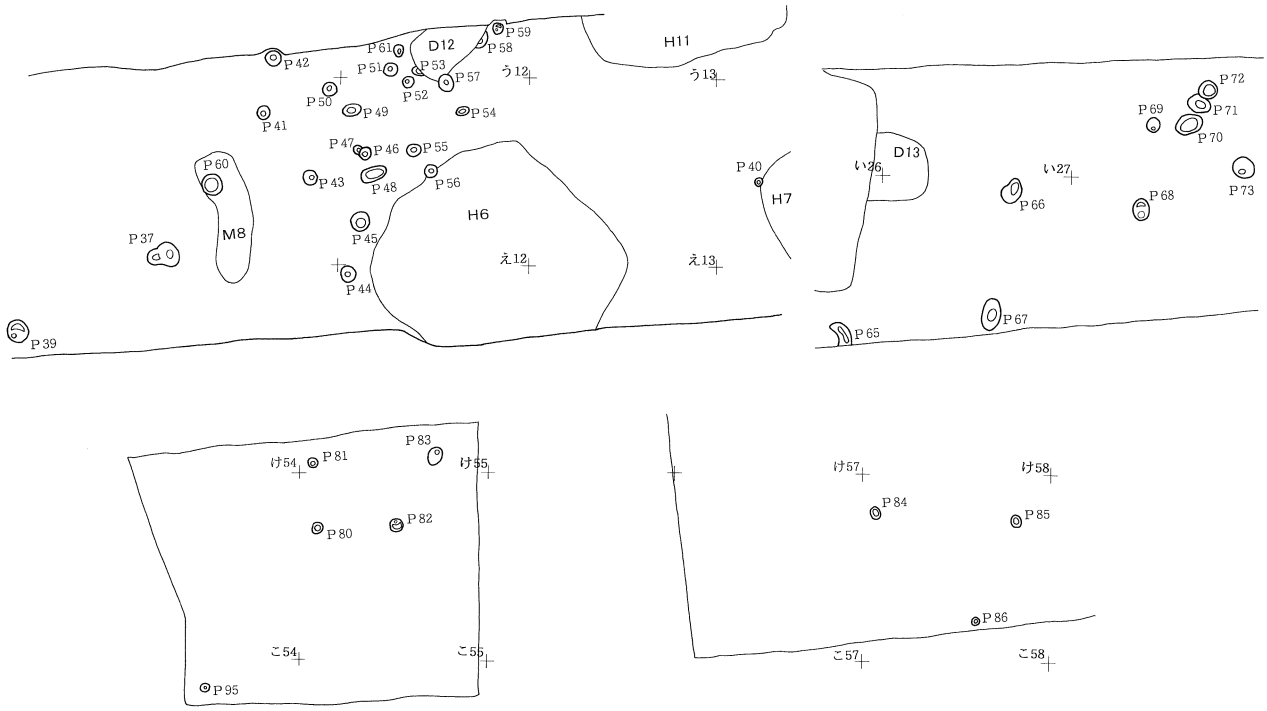
第42図　ピット群実測図

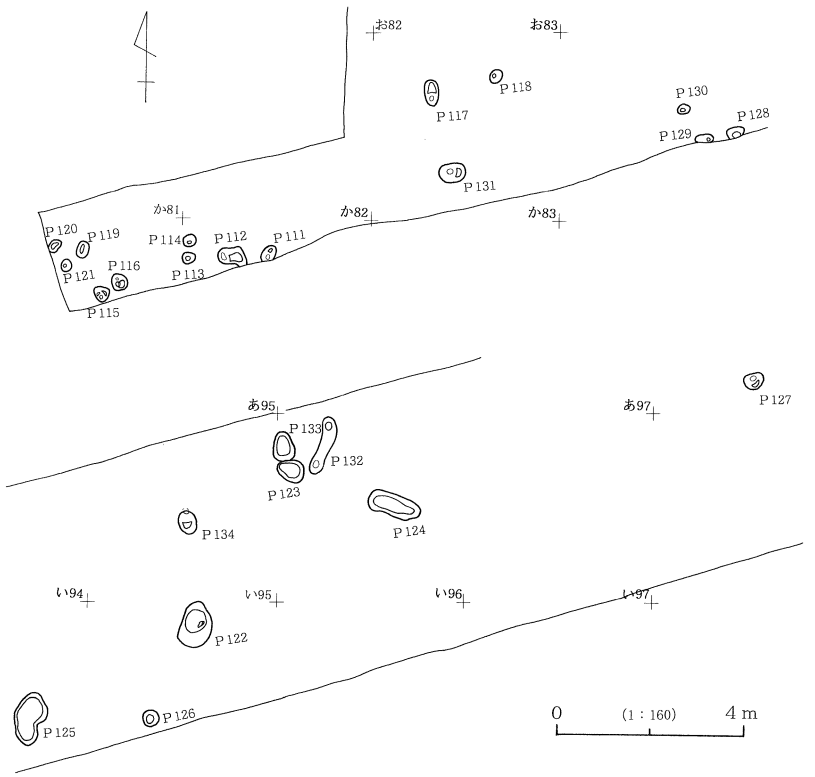
第7節　遺構外出土遺物

遺構外の検出面から弥生時代中期後半の土器破片が多く出土した。第43図１は、内外面赤色塗彩の鉢、２は壺で口唇部に縄文・口縁部内面に縄文が施文される。無彩である。



第43図　遺構外出土遺物実測図





第44図　ピット群実測図

第14表　ピット計測表（1）

番号	位置	平面形	規模（cm）			備　考
			長径	短径	深さ	
1	ち101	円形	34	30	12	
2	ち100	楕円形	70	42	9	
3	ち100	円形	22	20	10	
4	た100	円形	24	24	8	弥生土器片
5	た100	円形	22	22	9	
6	た100	円形	30	26	31	弥生土器片
7	た100	円形	34	34	7	
8	た100	円形	36	34	30	
9	そ101	円形	44	40	20	弥生土器片
10	ち100	8の字形	98	60	28	柱痕
11	ち100	円形	32	30	25	柱痕
12	ち100	楕円形	48	40	24	
13	た100	円形	32	28	32	弥生土器片
14	た100	楕円形	56	40	38	
15	た100	円形	34	34	19	
16	た100	円形	32	30	32	
17	た 98	円形	40	36	20	
18	た 99	楕円形	54	34	26	
19	ち100	楕円形	64	48	14	弥生土器片
20	た100	円形	70	56	33	
21	た 99	円形	28	28	33	
22	た 99	円形	40	36	31	
23	そ100	楕円形	96	50	26	弥生土器片
24	た 99	円形	32	24	19	
25	た 99	円形	36	32	25	
26	た 99	楕円形	42	30	20	
27	た 99	円形	36	32	24	
28	た 99	円形	30	26	14	
29	ち 99	楕円形	106	(46)	28	
30	た 99	円形	32	30	40	
31	た 99	円形	32	30	29	
32	た 99	円形	24	24	15	
33	た100	8の字形	48	28	29	
34	そ100	円形	30	30	24	
35	た 99	円形	30	30	31	
36	そ 99	円形	30	28	22	
37	そ 92	8の字形	70	50	92	弥生土器片
38	そ 93	楕円形	80	44	22	
39	た 93	円形	48	48	28	弥生土器片
40	そ 89	円形	20	20	－	弥生土器片
41	そ 92	円形	32	32	16	
42	せ 92	円形	30	30	16	
43	そ 92	円形	30	30	23	柱痕
44	た 91	円形	36	32	25	柱痕
45	そ 91	円形	40	40	18	
46	そ 91	円形	30	26	15	
47	そ 91	円形	20	(16)	15	
48	そ 91	楕円形	60	30	10	
49	そ 91	楕円形	36	24	9	
50	そ 92	円形	30	30	41	
51	せ 91	円形	30	30	21	
52	そ 91	円形	20	20	21	
53	せ 91	円形？	26	(12)	12	
54	そ 91	楕円形	28	18	14	
55	そ 91	円形	32	28	19	
56	そ 91	円形？	26	(20)	19	
57	そ 91	不整形	42	28	19	
58	せ 91	円形？	(40)	(12)	20	
59	せ 91	円形	26	26	18	
60	そ 92	円形	46	44	26	
61	せ 91	楕円形	26	20	23	
62	ち 99	楕円形	26	20	17	
63	欠番					
64	せ 77	楕円形	28	(20)	20	P65と重複

第15表　ピット計測表（2）

番号	位置	平面形	長径	短径	深さ	備　考
66	せ76	楕円形	54	50	48	
67	せ76	楕円形	68	40	48	
68	せ75	楕円形	44	34	47	
69	す75	円形	28	28	34	
70	す75	楕円形	60	44	24	
71	す75	楕円形	54	36	5	
72	す75	円形	38	38	18	
73	す75	円形	44	42	26	
74	さ56	楕円形	50	32	18	
75	さ57	円形	28	26	30	
76	し57	円形	66	66	10	
77	さ54	円形	30	26	37	
78	し53	円形	28	28	24	
79	さ52	円形	24	24	20	
80	さ48	円形	24	22	6	
81	こ81	円形	18	18	23	
82	さ48	円形	30	28	15	
83	こ48	楕円形	38	30	23	
84	さ45	円形	28	24	7	
85	さ45	円形	26	26	21	
86	さ45	円形	16	16	12	
87	し56	円形	20	20	9	
88	こ41	円形	26	22	40	
89	こ40	円形	20	20	12	
90	こ38	方形	64	44	41	
91	こ38	楕円形	60	32	27	
92	こ37	円形	20	18	4	
93	け37	円形	20	20	11	
94	け36	円形	30	30	16	
95	し49	円形	16	14	9	
96	こ32	円形	22	20	11	
97	け32	円形	20	20	6	
98	け32	円形	20	20	12	
99	け32	円形	24	22	10	
100	け32	円形	20	20	4	
101	く33	円形	30	28	16	
102	け33	円形	24	24	15	
103	け33	円形	16	16	8	
104	け33	円形	20	20	14	
105	け34	円形	16	16	10	
106	け34	円形	16	16	11	
107	け33	円形	20	20	9	
108	欠番					F4のP5へ
109	欠番					F4のP4へ
110	け34	円形	20	18	9	
111	く21	楕円形	(40)	28	24	
112	く21	8の字形	60	40	15	
113	く21	楕円形	30	20	31	
114	く21	円形	30	26	43	
115	く22	円形	32	32	23	
116	く22	円形	34	32	17	
117	き20	楕円形	54	30	25	
118	き20	楕円形	32	24	21	
119	く22	楕円形	40	24	9	
120	く22	楕円形	30	20	12	
121	く22	円形	28	26	20	
122	え8	楕円形	96	68	11	
123	う7	楕円形	58	40	8	
124	う7	楕円形	110	48	15	
125	え9	8の字形	106	68	9	
126	え8	円形	34	34	11	
127	い5	円形	42	36	25	
128	き19	楕円形	36	(20)	17	
129	き19	楕円形	34	(14)	24	
130	き19	円形	24	22	13	
131	き20	楕円形	56	40	32	
132	う7	楕円形	120	28	10	
133	う7	不整形	60	46	5	
134	う8	楕円形	50	28	35	
135	け36	方形	24	22	11	

第８節　寄塚遺跡出土の石器

寄塚遺跡から多量の石器や石核・剥片・細片が出土した。そのほとんどは、弥生時代中期後半の栗林期の竪穴住居址からの出土である。多くの石器は、覆土掘り下げ途上や床面で確認できた。剥片や細片も覆土中に多数目視できたため、掘り上げた覆土から２㎜眼の篩いで抽出した。

石器の器種は、石鏃・石錐・使用痕剥片・石斧・磨石・砥石・削器・台石・凹石があり、石鏃が大半を占める。石器は、馬場伸一郎（2000.６『下信濃石遺跡』佐久市教育委員会91－99頁）の器種分類・形態分類等を踏襲基準とした。

各石器の石材は、石鏃・石錐・小形剥片石器は主に黒曜石が使用され、他に数は少ないが緑色チャート・チャート・黒色緻密安山岩・蛇紋岩がある。打製石斧・打製石斧未製品は、輝石安山岩が主に用いられ他に硬質砂岩・石英安山岩がある。磨製石斧は石英閃緑岩・緑簾片岩が、削器は黒色緻密安山岩と輝石安山岩が、砥石は砂岩・安山岩が使われている。磨石や台石には主として輝石安山岩が、凹石には使用面がより粗い黒色多孔質安山岩や溶結凝灰岩が用いられている。

第16表　寄塚遺跡遺構別出土石器一覧表

遺構名	石鏃			石錐		打製石斧		石核・原石		剥片・細片		台石・凹石・磨石・砥石・削器
	有茎鏃	その他石鏃	未製品	石錐	石錐未製品	石斧	未製品	黒曜石	その他石材	黒曜石	その他石材	
H1	2	1	3	－	－	－	1	7	1	55	18	5
H2	3	－	2	－	2	1	1	8	－	81	9	3
H3	1	－	－	－	－	－	－	5	－	－	－	2
H4	3	1	－	－	1	－	1	5	－	135	15	4
H5	1	－	2	－	－	－	1	5	－	25	5	2
H6	1	1	6	－	1	－	－	20	－	1,166	6	1
H7	5	2	5	2	－	1	－	19	1	707	12	2
H8	2	－	－	－	－	－	－	2	－	10	1	－
H9	－	－	1	－	－	－	－	2	－	190	－	－
H10	1	－	2	－	－	－	－	－	－	72	1	2
H11	3	－	8	－	－	－	－	3	－	1,307	20	4
H12	－	－	－	－	－	－	－	2	－	2	－	－
H13	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
D5	1	－	－	－	－	－	－	－	－	12	－	
D6	－	－	－	－	－	－	－	1	－	3	－	1
D13	1	1	－	－	－	－	－	－	－	18	－	－
D14	－	－	－	－	－	1	－	－	1	－	－	－
M4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2
M6	－	－	－	－	－	3	1	7	－	13	－	－
M7	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－
M12	－	－	－	－	－	1	－	1	－	－	－	－
Gr・表採	1	1	1	－	－	－	－	1	－	11	1	－

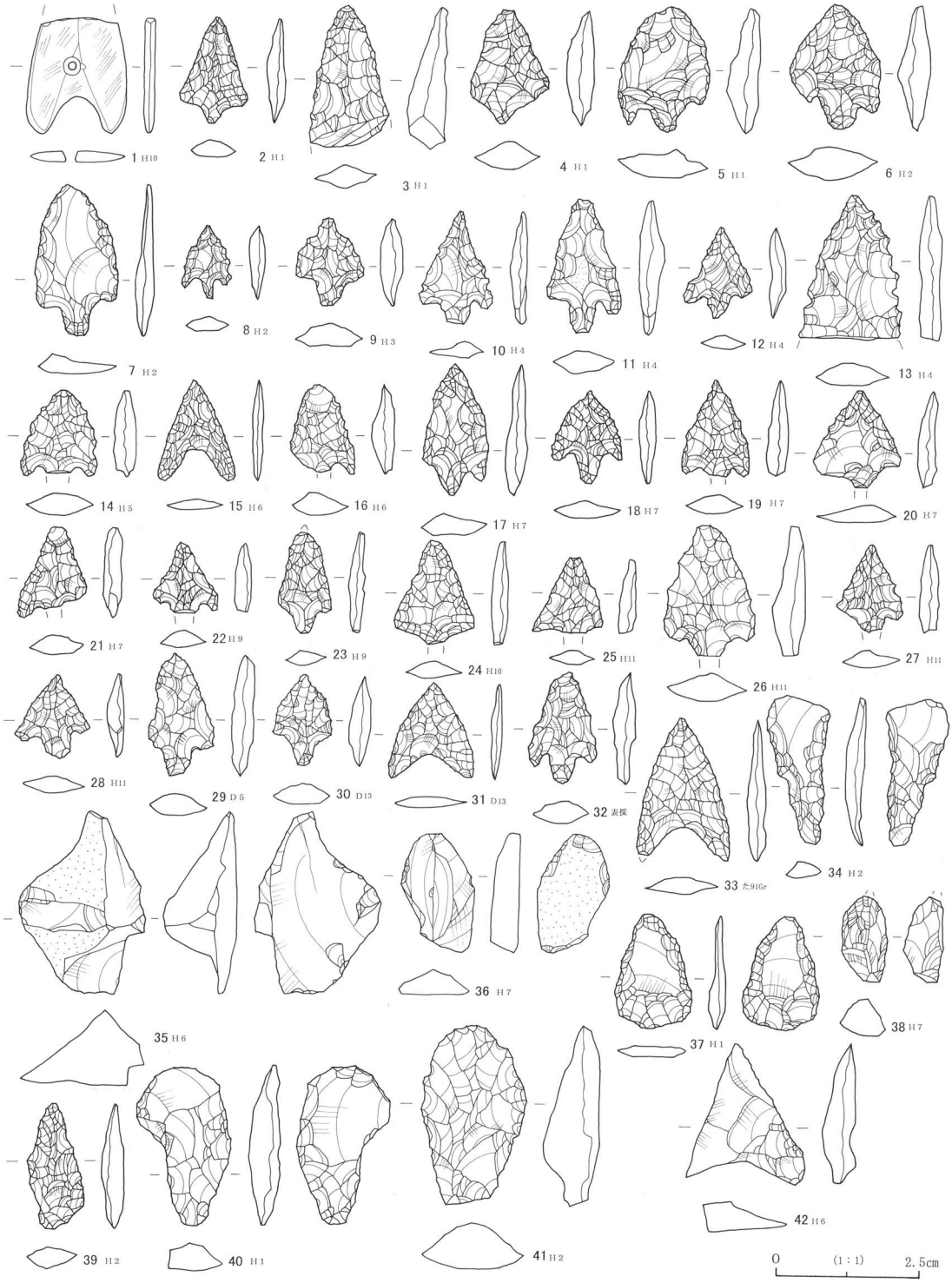
弥生時代中期後半のＨ１～Ｈ９・H11号住居址内から、石核・原石が77点（黒曜石75点、硬質砂岩２点）、剥片・細片が3,762点（黒曜石3,676点、硬質砂岩65点、緑色チャート８点、その他13点）出土した。これらの出土状態の原位置を把握できなかったため詳細は不明であるが、多くの石器未製品や剥片・細片の出土は、竪穴住居址内外で石器製作の場の存在を想定できよう。

石鏃およびその未製品（第45図・第46図）

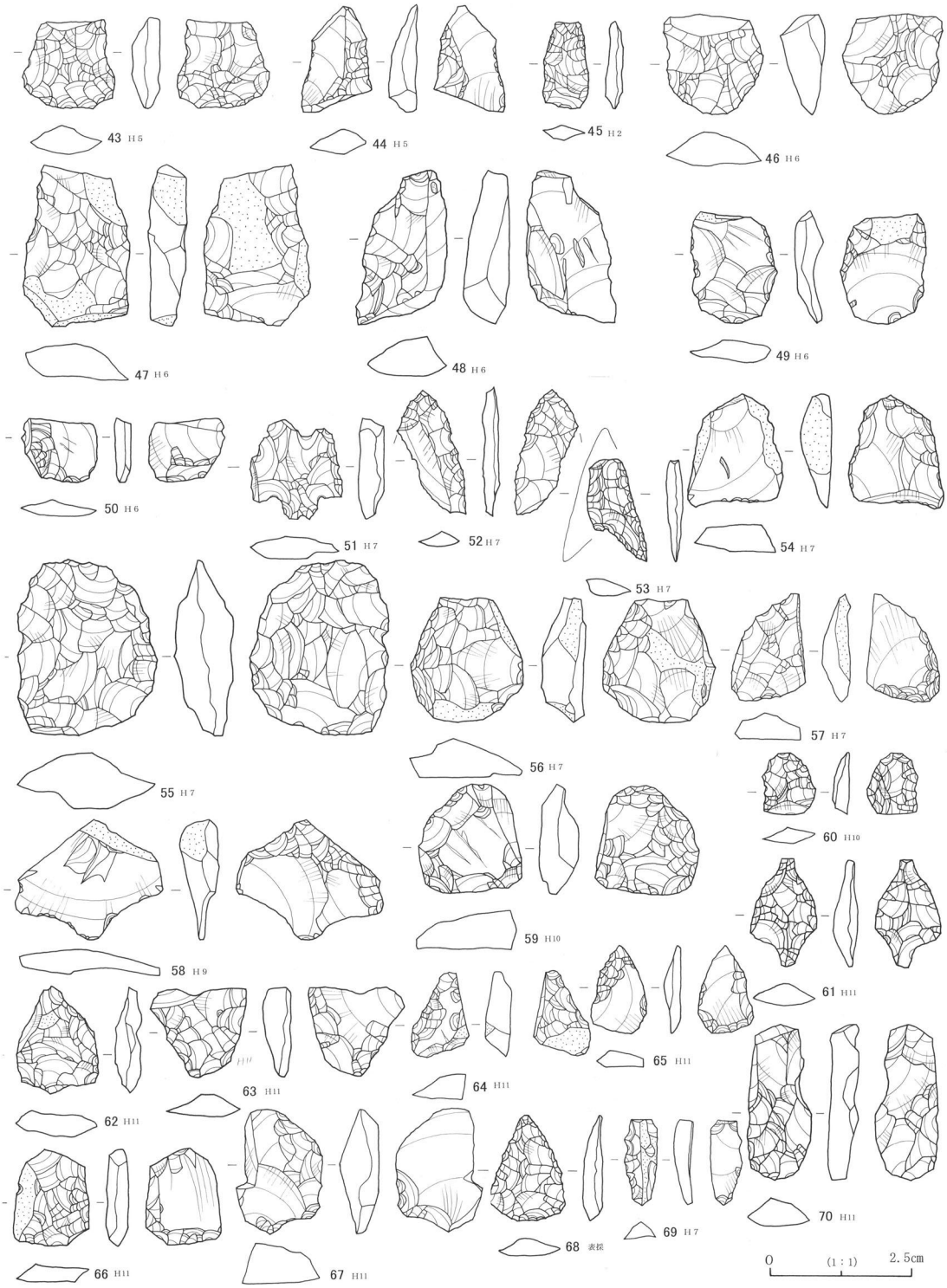
石鏃は有茎鏃が27点（第45図２・４～12・14・16～30・32）、凹基鏃２点（第45図15・31）、形態不明２点（３・13）、石鏃断片２点（第46図52・53）、磨製石鏃１点（第45図１）である。未製品は30点で有茎鏃の未製品か平基鏃の可能性のあるもの４点（第45図37・第46図62・65・68）、有茎鏃の未製品（第45図39・第46図51・61）、形態不明の未製品（第45図40～42・第46図43～50・54～60・63・64・66・67・70）がある。

石材は１が緑色チャート、７が黒色緻密安山岩、15がチャート、それ以外はすべて黒曜石である。

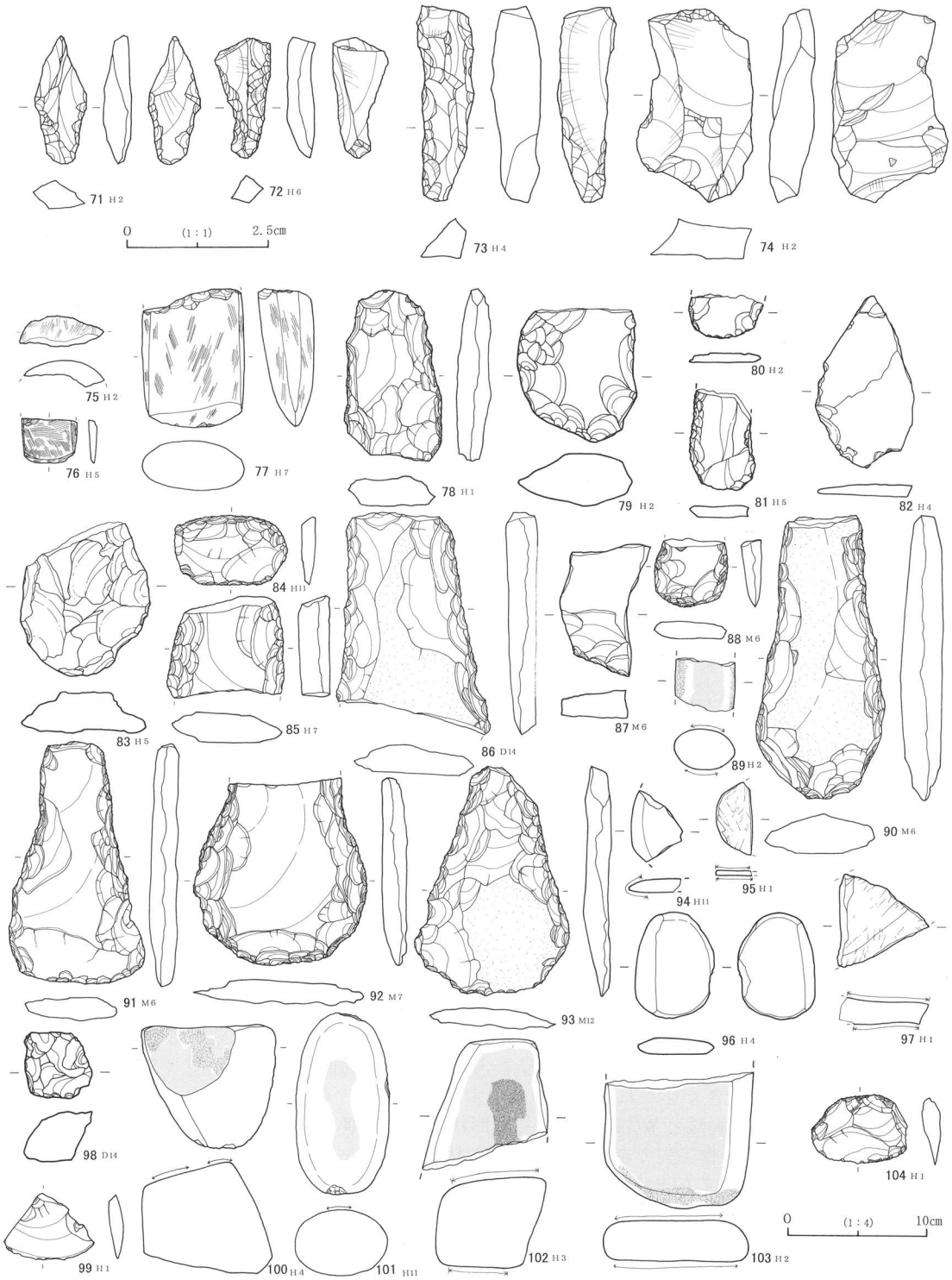
有茎鏃の鏃身形態は、二等辺三角形状のものが（２・４・10～12・20～27・29・30）14点でもっと



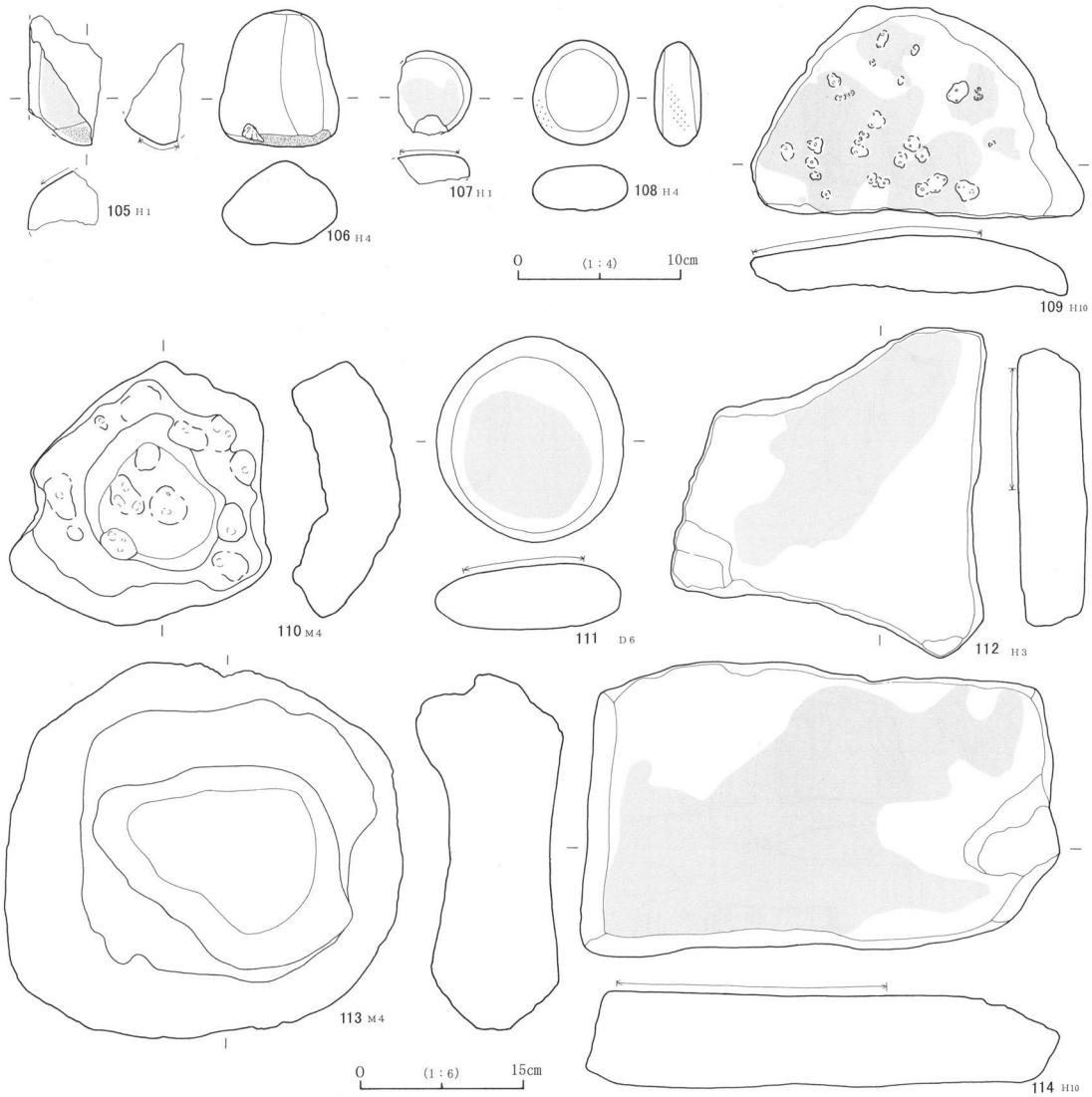
第45図　寄塚遺跡出土石器実測図



第46図　寄塚遺跡出土石器実測図



第47図　寄塚遺跡出土石器実測図



第48図　寄塚遺跡出土石器実測図

も多く、丸みを帯びるものが（5・7・14）3点、丸みを帯び先端がとがるものが（18・19・28）3点、縄文晩期に顕著とされる逆刺部の張り出しが下方に発達する名残りとみられるものが（6・8・16・17・26）5点ある。茎部の形態は未製品も含めて、茎の両側が平らなa型（7・20・23・25・29・30）、茎の両側が大きく穿たれ逆刺部が発達するb型（5・6・8～12・14・16～19・21・22・27～29・32・51）、鏃身両端と茎先端が概ね三角形状のものc型（4・24）があり、b型が19点で圧倒的に多い。有茎鏃の製作工程でまず三角形や台形状の未製品を作り、茎の相当する部分の両側を大きく穿ち、茎部を作り出す方法が指摘されている。（馬場2006）　茎部b型の19点には茎部両脇に、大きな剥離面がみられる。また、三角形や台形状の37・43・45～49・55・56・59・60・62・63・65・68は、まさに、茎部を作り出す直前の資料であろうか。なお、37・65・68は平基鏃とも考えられる。

石錐およびその未製品（第45図・第46図）

石錐およびその未製品は、34・38・69・71～73で、いずれも石材は黒曜石である。38・69は先端が

第17表　寄塚遺跡出土石器観察表

No.	出土位置	器種	石材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	状態	備考
1	H10	磨製石鏃	緑色チャート	21.0	18.0	2.0	1.2	先端欠損	
2	H1	有茎鏃	黒曜石	19.0	12.5	3.0	0.5		茎部c
3	H1	石鏃	黒曜石	25.0	14.0	7.0	1.8	基部欠損	
4	H1	有茎鏃	黒曜石	20.0	14.0	5.0	0.9		茎部c
5	H1	有茎鏃	黒曜石	22.0	16.0	6.0	1.6		茎部b
6	H2	有茎鏃	黒曜石	22.0	16.0	6.0	1.3		茎部b
7	H2	有茎鏃	黒色緻密安山岩	27.0	15.0	4.0	1.3		茎部a
8	H2	有茎鏃	黒曜石	13.0	0.9	3.0	0.2		茎部b
9	H3	有茎鏃	黒曜石	16.0	12.0	4.0	0.5		茎部b
10	H4	有茎鏃	黒曜石	20.0	13.0	3.0	0.5		茎部b
11	H4	有茎鏃	黒曜石	23.5	13.5	4.0	0.9		茎部b
12	H4	有茎鏃	黒曜石	16.0	12.5	3.0	0.3		茎部b
13	H4	石鏃	黒曜石	25.5	18.5	4.0	1.6	基部欠損	
14	H5	有茎鏃	黒曜石	15.0	14.0	4.0	0.7	茎部欠損	茎部b
15	H6	凹基鏃	チャート	18.0	13.5	2.0	0.4		
16	H6	有茎鏃	黒曜石	16.0	11.5	4.0	0.5	茎部欠損	茎部b
17	H7	有茎鏃	黒曜石	23.0	12.0	4.0	0.7		茎部b
18	H7	有茎鏃	黒曜石	17.0	12.5	3.0	0.4		茎部b
19	H7	有茎鏃	黒曜石	17.0	12.0	4.0	0.6	茎部欠損	茎部b
20	H7	有茎鏃	黒曜石	17.0	16.0	3.0	0.7	茎部欠損	茎部a
21	H7	有茎鏃	黒曜石	16.0	12.0	3.5	0.5	茎部欠損	茎部b
22	H9	有茎鏃	黒曜石	12.0	11.5	3.0	0.3	茎部欠損	茎部b
23	H9	有茎鏃	黒曜石	18.0	9.5	3.0	0.4	先端欠損	茎部a
24	H10	有茎鏃	蛇紋岩	18.0	14.0	3.0	0.7	茎部欠損	茎部c
25	H11	有茎鏃	黒曜石	13.0	12.5	3.0	0.4	茎部欠損	茎部a
26	H11	有茎鏃	黒曜石	23.0	16.5	6.0	1.6	茎部欠損	茎部b
27	H11	有茎鏃	黒曜石	15.5	12.0	3.5	0.4	茎部欠損	茎部b
28	H11	有茎鏃	黒曜石	15.0	13.5	3.0	0.4		茎部b
29	D5	有茎鏃	黒曜石	22.0	11.5	4.0	0.8		茎部a
30	D13	有茎鏃	黒曜石	16.0	11.0	4.0	0.5		茎部a
31	D13	凹基鏃	黒曜石	17.0	15.0	2.0	0.4		
32	表採	有茎鏃	黒曜石	15.0	14.0	4.0	0.6		茎部b
33	た91	凹基鏃	黒曜石	25.0	16.5	3.0	0.9		
34	H2	石錐未製品	黒曜石	26.0	11.0	3.5	0.9		先端部未製品
35	H6	使用痕剥片	黒曜石	32.0	22.5	13.0	4.7		
36	H7	使用痕剥片	黒曜石	21.0	13.0	5.0	1.3		
37	H1	石鏃未製品	黒曜石	20.0	13.5	3.0	0.7		茎を作り出す一段階前平基鏃の可能性あり
38	H7	石錐	黒曜石	15.0	8.0	7.0	0.8	先端欠損	
39	H2	石鏃未製品	黒曜石	22.0	10.0	0.4	0.6		
40	H1	石鏃未製品	黒曜石	28.0	16.5	3.0	2.1		
41	H1	石鏃未製品	黒曜石	32.0	18.5	9.0	4.3		
42	H6	石鏃未製品	黒曜石	25.0	21.0	5.5	1.5		
43	H5	石鏃未製品	黒曜石	16.0	16.5	5.0	1.3		平基鏃の未製品？
44	H5	石鏃未製品	黒曜石	19.0	12.5	5.0	0.9		
45	H2	石鏃未製品	黒曜石	15.5	8.0	3.0	0.4		茎を作り出す一段階前
46	H6	石鏃未製品	黒曜石	17.5	17.5	8.0	1.8		茎を作り出す一段階前
47	H6	石鏃未製品	黒曜石	28.5	19.0	7.0	4.2		茎を作り出す一段階前
48	H6	石鏃未製品	黒曜石	27.0	16.0	8.0	3.0		茎を作り出す一段階前
49	H6	石鏃未製品	黒曜石	19.5	15.5	5.0	1.5		茎を作り出す一段階前
50	H6	石鏃未製品	黒曜石	11.0	14.0	3.0	0.5		
51	H7	石鏃未製品	黒曜石	18.0	16.5	4.0	1.2		茎部b
52	H7	石鏃断片	黒曜石	23.0	9.0	3.0	0.5	断片	
53	H7	石鏃断片	黒曜石	18.0	11.0	3.0	0.4	断片	
54	H7	石鏃未製品	黒曜石	20.0	17.0	5.0	1.7		
55	H7	石鏃未製品	黒曜石	31.0	24.5	10.0	7.5		茎を作り出す一段階前
56	H7	石鏃未製品	黒曜石	22.0	20.0	7.0	3.1		茎を作り出す一段階前
57	H7	石鏃未製品	黒曜石	19.0	13.0	5.0	1.0		
58	H9	石鏃未製品	黒曜石	21.5	26.0	6.0	2.4		茎を作り出す一段階前
59	H10	石鏃未製品	黒曜石	19.5	18.5	7.0	2.4		茎を作り出す一段階前
60	H10	石鏃未製品	黒曜石	11.0	9.5	3.0	0.3		茎を作り出す一段階前
61	H11	石鏃未製品	黒曜石	19.0	12.0	4.0	0.7		先端最終調整前？茎部a
62	H11	石鏃未製品	黒曜石	19.0	14.5	4.0	1.1		茎を作り出す一段階前
63	H11	石鏃未製品	黒曜石	15.5	17.0	5.0	1.0		茎を作り出す一段階前
64	H11	石鏃未製品	黒曜石	15.0	10.0	4.5	0.7		
65	H11	石鏃未製品	黒曜石	15.5	10.0	3.0	0.3		茎を作り出す一段階前平基鏃の可能性あり
66	H11	石鏃未製品	黒曜石	17.0	13.5	4.0	1.1		
67	H11	石鏃未製品	黒曜石	22.0	15.5	7.0	2.2		
68	表採	石鏃未製品	黒曜石	18.5	13.5	3.5	0.7		茎を作り出す一段階前平基鏃の可能性あり
69	H7	石錐	黒曜石	15.0	6.0	3.0	0.3	先端欠損	
70	H11	石鏃未製品	黒曜石	27.5	11.0	5.0	1.8		
71	H2	石錐未製品	黒曜石	23.0	9.5	5.0	0.8		先端最終調整前
72	H6	石錐未製品	黒曜石	21.5	10.0	5.0	0.9		先端最終調整前
73	H4	石錐未製品	黒曜石	35.0	10.5	9.0	2.9		先端最終調整前
74	H2	石核	黒曜石	34.5	21.0	7.0	5.3		
75	H2	磨製石斧	石英閃緑岩	2.2	6.1	2.0	16.9	断片	大形蛤刃
76	H5	磨製石斧	緑簾片岩	3.2	3.9	0.6	13.3	基部欠損	扁平片刃
77	H7	磨製石斧	石英閃緑岩	9.8	7.3	3.8	466.9	基部欠損	大形蛤刃
78	H1	打製石斧未製品	輝石安山岩	12.2	6.9	2.3	237.3		
79	H2	打製石斧未製品	硬質砂岩	9.5	8.7	3.7	378.5	断片	
80	H2	打製石斧	輝石安山岩	3.2	5.3	0.6	14.7	基部欠損	
81	H5	削器	黒色緻密安山岩	7.6	4.7	0.9	48.2		
82	H4	打製石斧未製品	輝石安山岩	12.3	7.1	0.8	81.0		
83	H5	打製石斧未製品	石英安山岩	11.0	9.3	2.9	353.1	断片	
84	H11	削器	輝石安山岩	4.9	6.9	1.3	60.5		
85	H7	打製石斧	石英安山岩	7.2	8.3	2.2	218.9	刃部欠損	
86	D14	打製石斧	輝石安山岩	15.8	10.9	2.3	451.8	刃部欠損	
87	M6	打製石斧未製品	輝石安山岩	9.4	6.5	2.1	153.9	断片	
88	M6	打製石斧	硬質砂岩	4.8	5.2	1.4	49.4	基部欠損	
89	H2	磨石	安山岩	3.7	4.3	2.9	74.5	断片	敲き痕あり
90	M6	打製石斧	輝石安山岩	20.3	9.2	2.9	642.8		
91	M6	打製石斧	輝石安山岩	17.3	9.7	2.0	392.1		
92	M7	打製石斧	輝石安山岩	13.3	12.4	1.8	375.2	基部欠損	
93	M12	打製石斧	輝石安山岩	16.4	11.0	1.8	331.0		
94	H11	砥石	安山岩	5.0	3.6	1.1	21.5	断片	
95	H1	砥石	泥質砂岩	5.2	2.6	0.4	9.5	断片	
96	H4	砥石	祖粒砂岩	7.6	5.6	1.1	65.3		
97	H1	砥石	泥質砂岩	6.6	6.6	1.9	77.2	断片	
98	D14	石核	黒色緻密安山岩	4.7	4.9	3.6	106.0		
99	H1	削器	硬質砂岩	4.7	6.4	1.0	26.3		
100	H4	磨石	花崗岩	8.8	9.6	8.1	743.0		敲き痕あり
101	H11	磨石	溶結凝灰岩	12.9	6.6	4.8	567.3		両端に敲き痕あり
102	H3	磨石	石英安山岩	9.4	8.9	6.5	795.2	断片	敲き痕あり
103	H2	磨石	輝石安山岩	9.7	10.6	2.9	614.7	断片	敲き痕あり
104	H11	削器	黒色緻密安山岩	4.9	8.1	1.2	48.9		
105	H1	磨石	輝石安山岩	8.0	4.5	3.6	142.3	断片	敲き痕あり
106	H4	敲石	輝石安山岩	8.4	7.3	5.1	451.5		敲き痕あり
107	H1	磨石	砂質凝灰岩	5.2	4.6	1.8	33.8	断片	
108	H4	磨石	輝石安山岩	6.4	5.9	2.8	132.3		赤色物付着
No.	出土位置	器種	石材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	状態	備考
109	H10	台石	輝石安山岩	13.0	20.6	3.7	1.28		
110	M4	凹石	黒色多孔質安山岩	24.7	24.5	10.2	3.21		13個の小孔を有す
111	D6	台石	輝石安山岩	19.3	17.4	6.2	2.68		
112	H3	台石	輝石安山岩	29.4	30.9	6.6	9.52		
113	M4	凹石	溶結凝灰岩	37.3	35.3	13.7	17.84		
114	H10	台石	輝石安山岩	27.6	44.8	9.1	23.74		

欠損している。34・71～73は先端が未調整の未製品である。

使用痕剥片（第45図）

鋭い縁辺に微少剥離痕があり、刃部にしたとみられる。35・36とも黒曜石製である。

打製石斧および未製品（第47図）

住居址から６点、土坑から１点、溝状遺構から６点出土した。石材は輝石安山岩が９点、石英安山

岩が２点、硬質砂岩が２点である。形態のわかる86・90～93は、すべて撥形である。78は短冊形の刃部加工途上の未製品、79・83・87は未製品のまま折れてしまったようだ。

磨製石斧（第47図）

大形蛤刃石斧77、大形蛤刃石斧の断片75、扁平片刃石斧76が出土した。75・77が石英閃緑岩、76が緑簾片岩である。

砥石（第47図）

扁平な円礫で側辺両刃状に摩滅する94・96、両面に線状痕・磨面がある95・97、97は摩耗して湾曲している。石材は94が安山岩、他は砂岩である。

削器（第47図）

横長で鋭い縁辺に刃部を持つ、81・104が黒色緻密安山岩製、84が輝石安山岩製、99が硬質砂岩製である。

磨石（第47・48図）

89・100～103・105・106は、光沢がある磨り面と敲き痕がみられる。108は円礫を用いており側面に赤色の付着物が観察できる。石材は多様で、安山岩・花崗岩・凝灰岩がみられる。

台石・凹石（第48図）

輝石安山岩製で、円礫111と角がない亜角礫109・112・114がある。４点とも平坦面に光沢がある磨り面を持ち、いずれも付着物などは見られない。109の磨り面付近には、敲打による小穴が認められる。

台石はＭ４から出土し、ざらついた湾曲面を持つ。黒色多孔質安山岩製の110は13個の小穴を有す。

（引用・参考文献）馬場伸一郎　2006「下信濃石遺跡出土の石器群について」『下信濃石遺跡』佐久市教育委員会　91～99頁

第Ⅲ章　まとめ

本遺跡の眼下を湯川が西流している。標高710ｍ以下の両岸は弥生時代の遺跡密集地帯である。右岸では、上流から岩村田遺跡群西八日町遺跡・西一本柳遺跡、北西の久保遺跡、鳴沢遺跡群、根々井居屋敷遺跡、森平遺跡、大和田遺跡群川原端遺跡等で弥生時代中期後半～後期後半の集落址が調査されている。

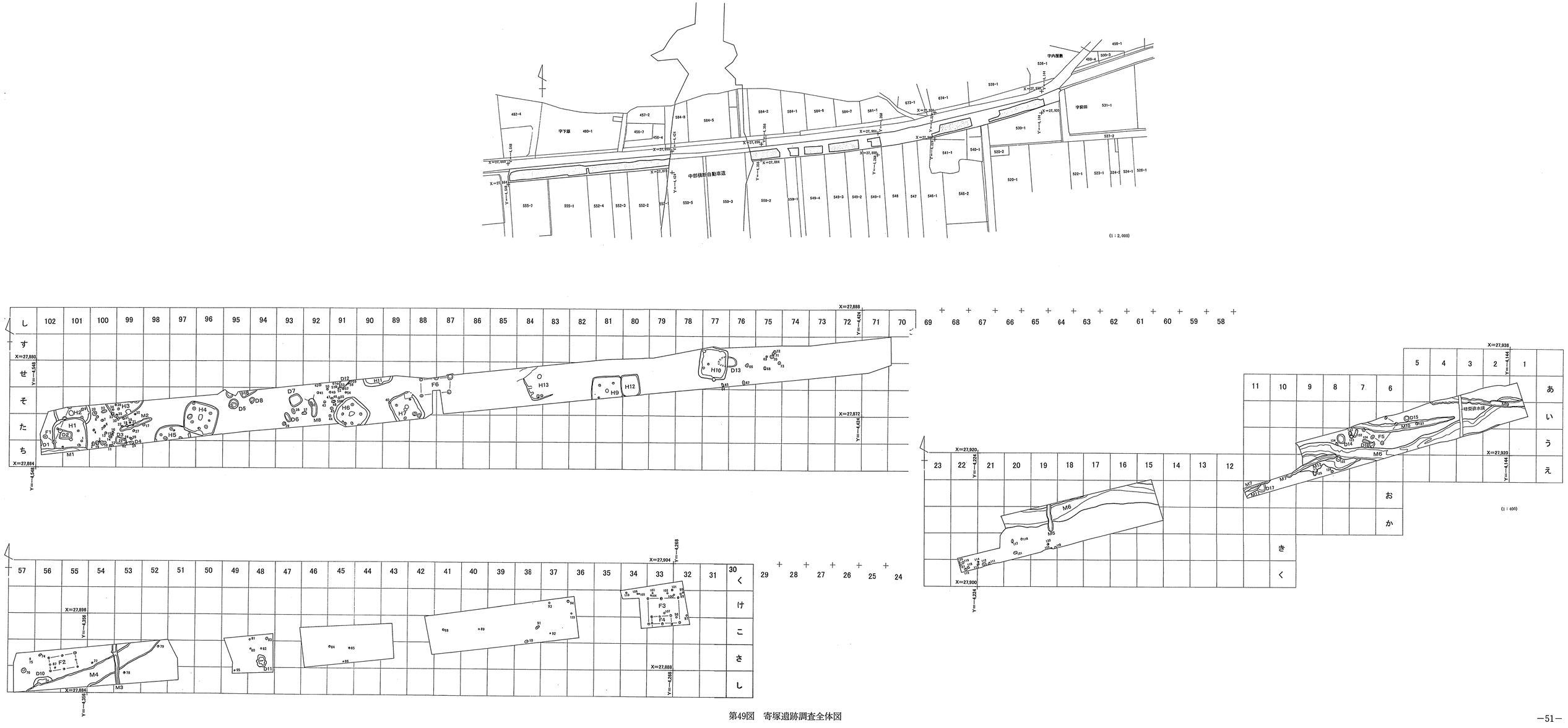
第18表　寄塚遺跡住居址一覧表

遺構名	検出位置	平面形	規模（m）					柱間		主軸方位（長軸方位）	炉址	備考
			北壁長	南壁長	東壁長	西壁長	壁高	東西	南北			
H1	ち-101・102	隅丸長方形	4.5	－	<4.8> <5.6>	<4.6> <5.6>	0.38	2.6 2.4	2.2	N-2°-W	地床炉	H2を切る。
H2	そ・た-101・102	隅丸方形	－	4.1	<2.1> <4.4>	<3.4> <4.4>	0.38	2.1		N-25°-W	地床炉	F1H1
H3	そ・た-99・100	－	－	4.6	－	<2.6>	0.30	2.4		N-31°-W		P30～P36に切られる。
H4	そ・た-99・100	隅丸方形	4.4	4.0	3.9	4.0	0.22	2.6 2.2	2.1	N-17°-W	地床炉（2個炉縁）	H5を切る。
H5	た・ち-97・98	隅丸方形？	4.6	－	<1.6>	<1.9>	0.23	2.3		N-2°-W		H4に切られる。
H6	そ・た-90・91	隅丸方形	4.0	<2.3> <4.0>	<2.1> <3.8>	3.8	0.23	2.0	2.0	N-40°-E	地床炉	P56に切られる。
H7	そ・た-88・89	隅丸長方形	3.6	<0.7> <3.7>	4.3	<2.9> <4.3>	0.18	2.1 1.7	2.3	N-30°-W	地床炉（2個炉縁）	P40に切られる。新旧の地床炉
H8	そ-94・95	－	－	<2.5>	－	<1.1>	0.28					
H9	せ・そ-81・82	隅丸方形？	4.1	－	<3.1> <4.0>	<3.2> <4.0>	0.22	2.0	1.9	N-2°-W	地床炉（炉縁石）	H12に切られる。炉縁石石の代用に土器（甕
H10	す・せ-77・78	隅丸長方形	3.8	3.9	4.2	4.4	0.05			N-10°-E	地床炉	D13を切る。
H11	せ-89・90	－	－	4.0	<0.5>	<1.1>	0.18					
H12	せ・そ-80	隅丸長方形	2.5	2.5	3.0	3.0	0.23			N-8°-E		H9を切る。
H13	せ・そ-83・84	隅丸長方形？	－	<1.1>	－	<1.1>	－			N-21°-W	地床炉	

左岸では、上流から野馬窪遺跡群、宮の上遺跡群、寄塚遺跡群、白山遺跡群、上平遺跡群が知られている。しかし、調査されたのは野馬窪遺跡群野馬窪遺跡、宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡のみであった。弥生時代中期後半では、住居址43棟が隣接する根々井芝宮遺跡で検出されているが、今回の調査で新たに該期の資料を得た。

この地域の弥生時代中期後半の時期区分は、深堀遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ（小林　2002）で成果が提示されている。根々井芝宮遺跡は、弥生時代中期後半Ⅱ期とⅢ期に位置づけられている。本遺跡出土の土器群は、全容のわかる一括資料に乏しいがＨ５号の壺胴部文様帯の在り方はⅡ期、Ｈ９号はⅢ期に該当しよう。注視されるのは、住居址から未製品を伴う黒曜石の剥片・細片が多量に出土したことである。下信濃石遺跡や後家山遺跡で利用される黒曜石産地が時期により変化すると指摘されており、黒曜石流通の解明に、本遺跡も含めて北西の久保遺跡・根々井芝宮遺跡等の当該期の黒曜石産地推定分析が不可欠となった。

（引用・参考文献）小林真寿　2002『深堀　Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ』佐久市教育委員会

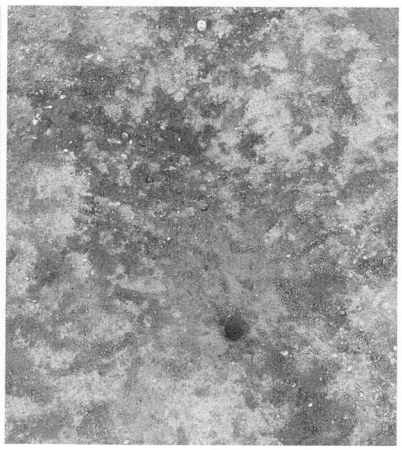


第49図　寄塚遺跡調査全体図

Ｈ１号住居址全景　西より

Ｈ１号住居址掘り方　東より

Ｈ１号住居址遺物出土状況　南より



Ｈ１号住居址炉

図版二

Ｈ２号住居址全景　西より

Ｈ２号住居址掘り方　東より

Ｈ２号住居址炉　西より

Ｈ２号住居址炉掘り方　東より

Ｈ３号住居址全景　西より

Ｈ３号住居址掘り方　西より

図版四

Ｈ４号住居址全景　東より

Ｈ４号住居址掘り方　東より

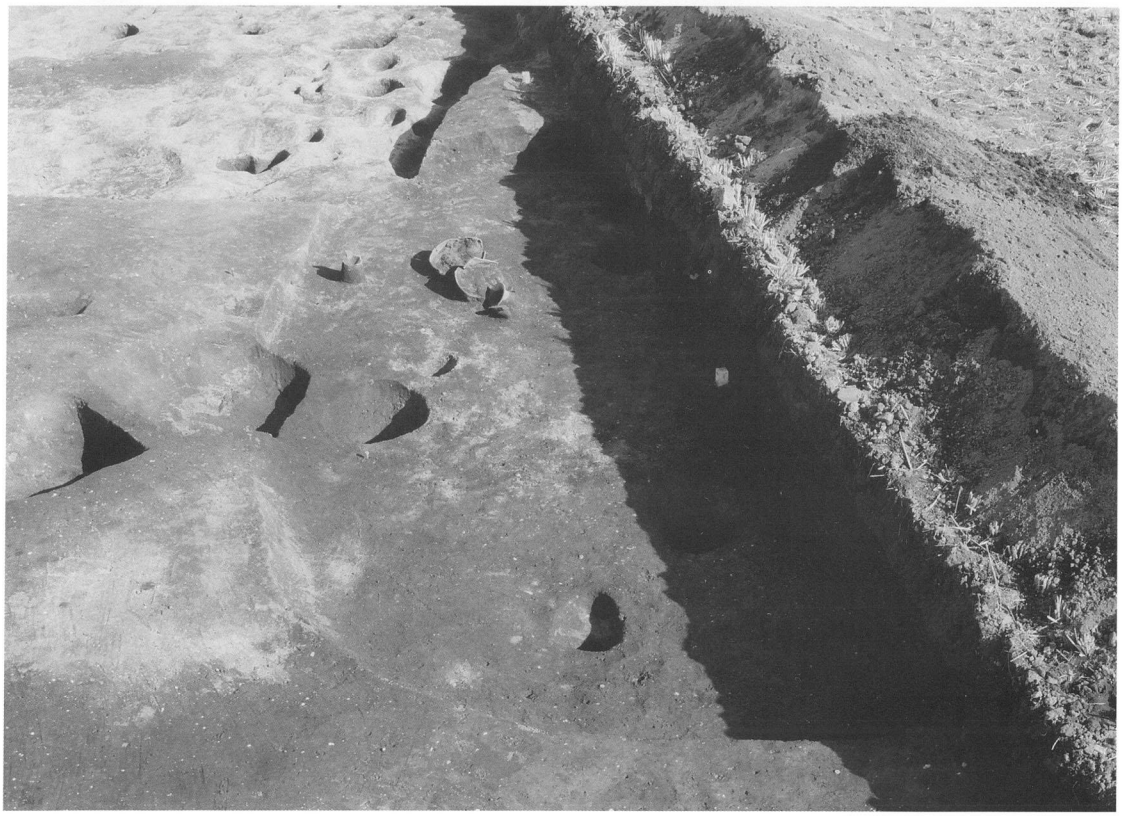
Ｈ４号住居址遺物出土状況　東より

Ｈ４号住居址遺物出土状況

Ｈ４号住居址遺物出土状況

Ｈ４号住居址炉

Ｈ４号住居址炉掘り方



Ｈ５号住居址全景　西より

図版六

Ｈ５号住居址遺物出土状況

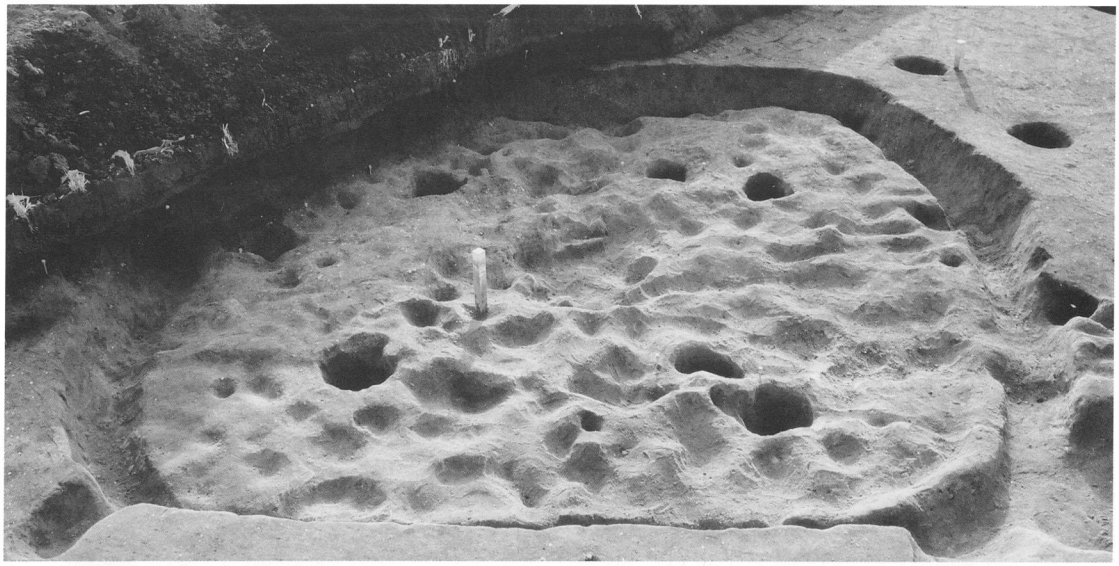
Ｈ５号住居址遺物出土状況

Ｈ６号住居址全景　西より

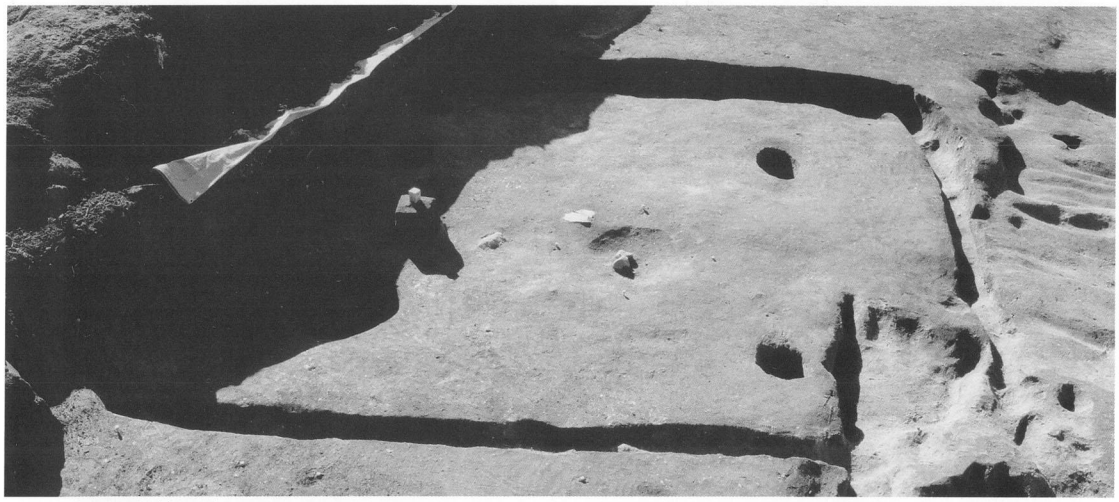
Ｈ６号住居址炉

Ｈ６号住居址炉掘り方

図版七



Ｈ６号住居址掘り方　北東より

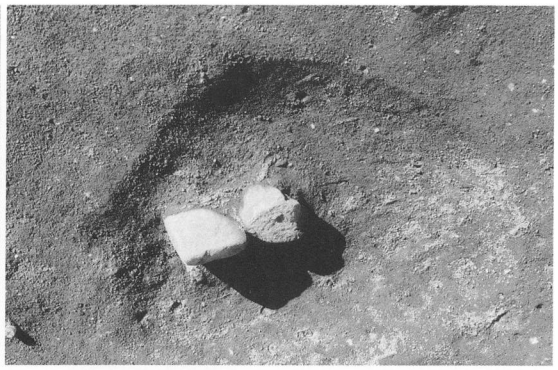


Ｈ７号住居址全景　西より

Ｈ７号住居址掘り方　北東より

図版八

Ｈ７号住居址遺物出土状況



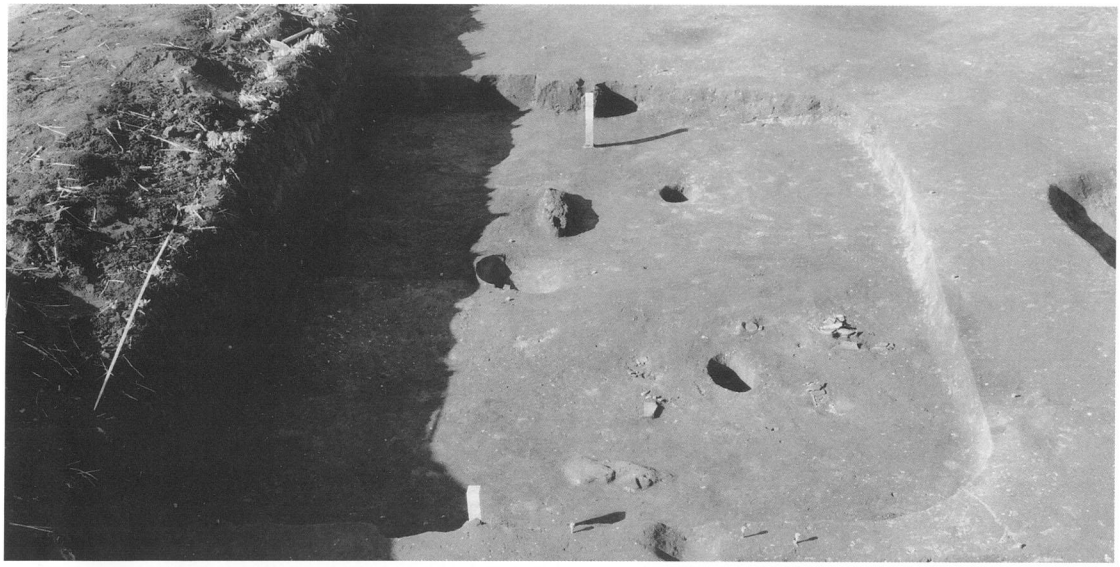
Ｈ７号住居址炉１

Ｈ７号住居址炉２

Ｈ７号住居址炉２掘り方

Ｈ８号住居址全景　東より

Ｈ８号住居址掘り方　西より



Ｈ９号住居址全景　東より

Ｈ９号住居址掘り方　北より

Ｈ９号住居址遺物出土状況　東より

図版十

Ｈ９号住居址遺物出土状況

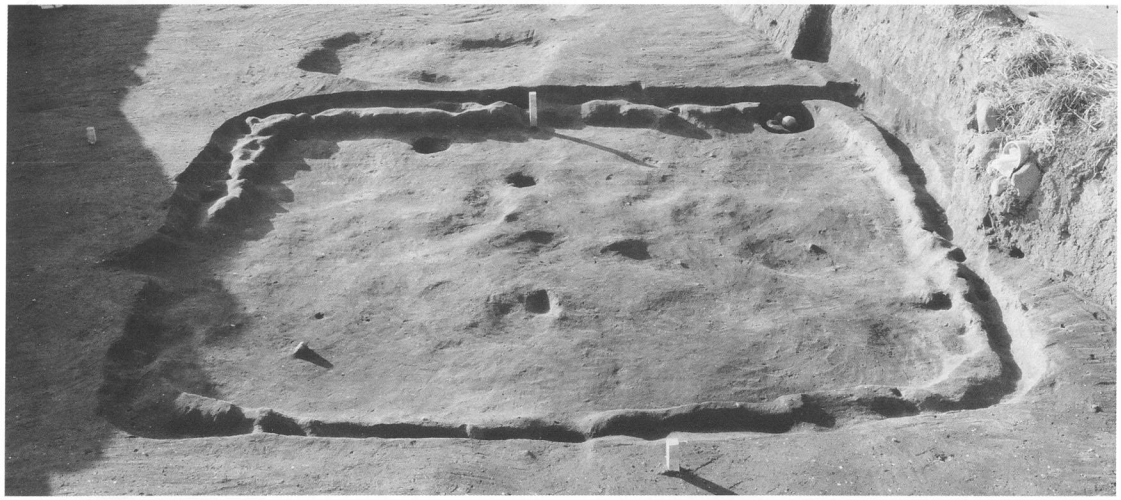
Ｈ９号住居址遺物出土状況

Ｈ９号住居址炉

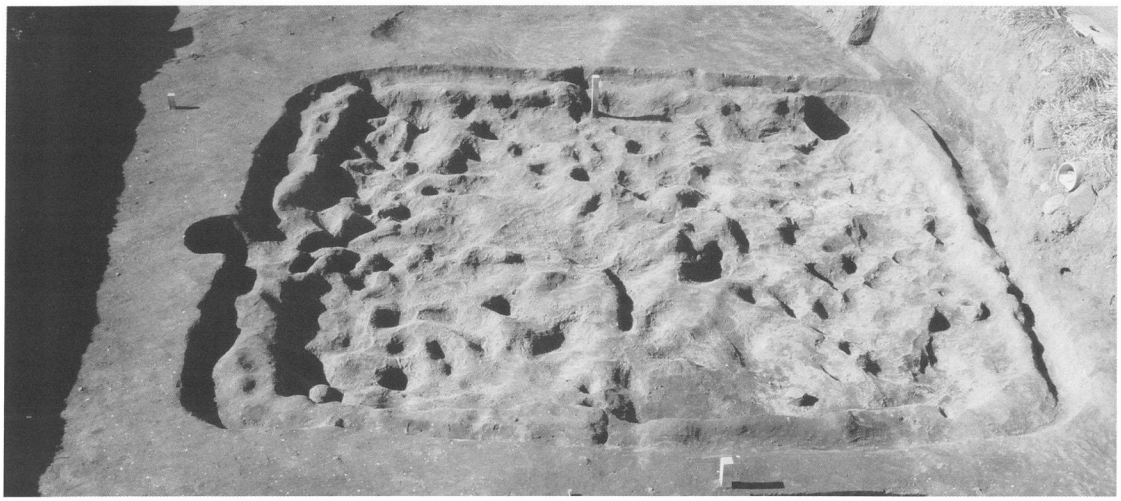
Ｈ10号住居址遺物出土状況　南より

図版十一

H10号住居址遺物出土状況



H10号住居址全景　南より



H10号住居址掘り方　北より

図版十二

H10号住居址遺物出土状況

H10号住居址炉

H10号住居址Ｐ１遺物出土状況

H10号住居址Ｐ１遺物出土状況

H11号住居址全景　西より

H11号住居址掘り方　東より

H11号住居址掘り方遺物出土状況

H11号住居址掘り方遺物出土状況

図版十三

H12号住居址全景　北より

H12号住居址掘り方　東より

図版十四

H13号住居址全景　南より

H13号住居址掘り方　東より

H13号住居址炉　北より

Ｆ１号掘立柱建物址

Ｆ２号掘立柱建物址　西より

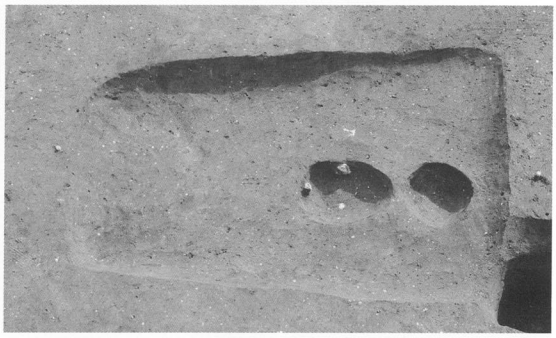
Ｆ３・Ｆ４号掘立柱建物址

Ｆ５号掘立柱建物址　西より

図版十六

Ｆ６号掘立柱建物址　西より

Ｄ１号土坑　西より



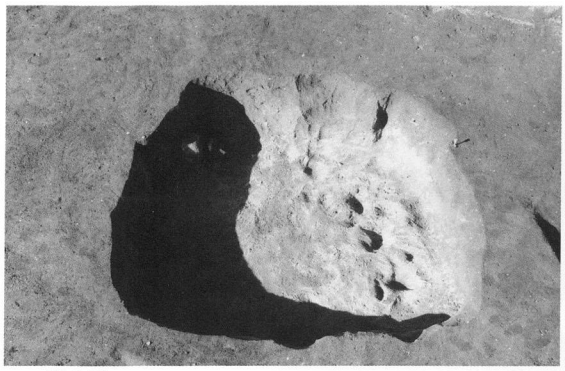
Ｄ２号土坑

Ｄ３号土坑

Ｄ４号土坑

Ｄ５号土坑

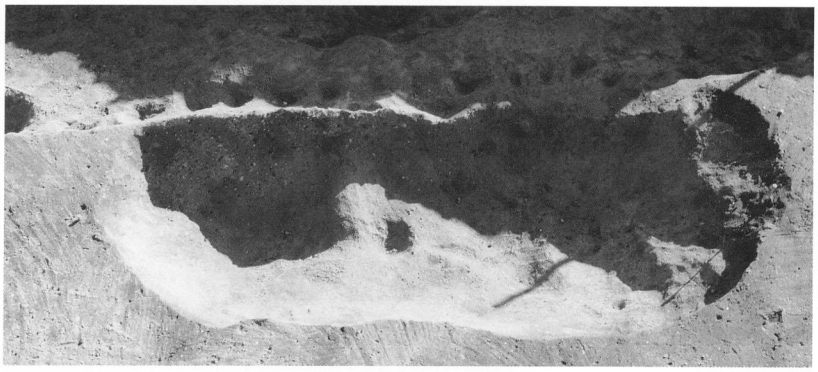
Ｄ６号土坑



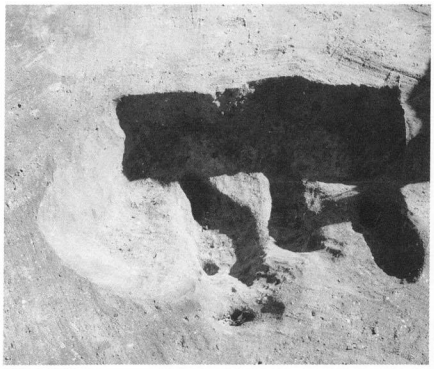
D７号土坑

D８号土坑

D９号土坑



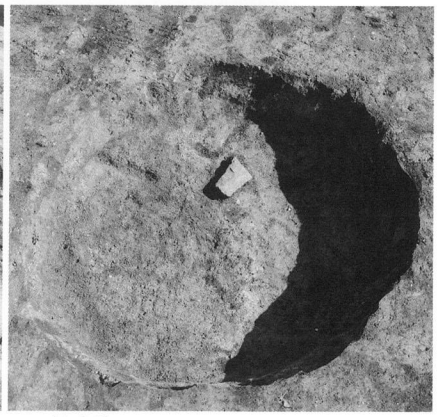
D10号土坑



D11号土坑

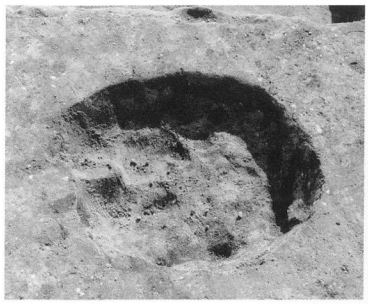
D13号土坑

D13号土坑

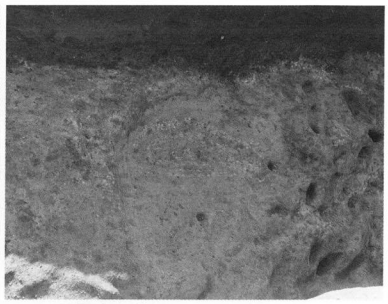


D14号土坑

図版十八

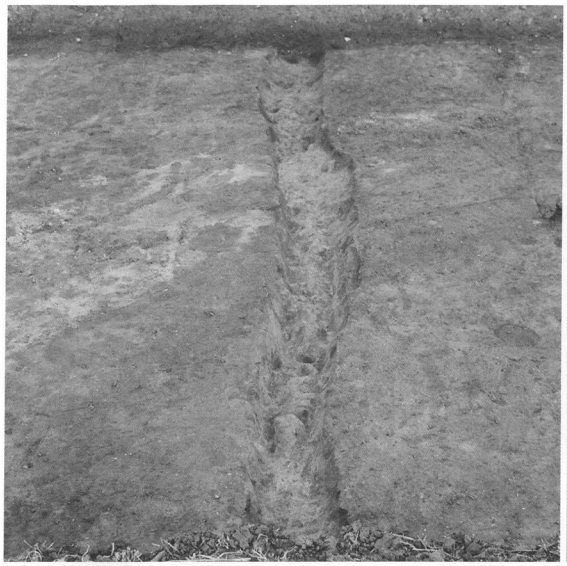

D15号土坑

D16号土坑


D17号土坑　北より

M１号溝状遺構

M２号溝状遺構

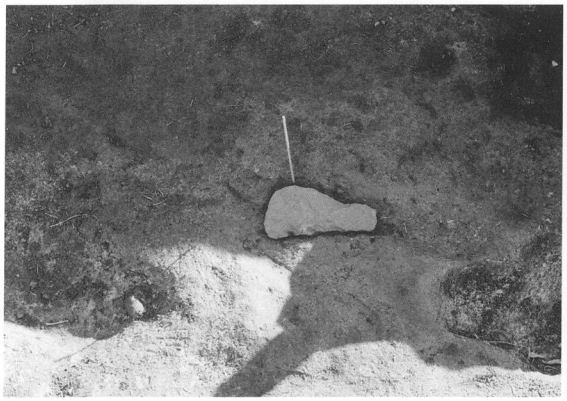


M３号溝状遺構

M４号溝状遺構

M５号溝状遺構

M６号溝状遺構

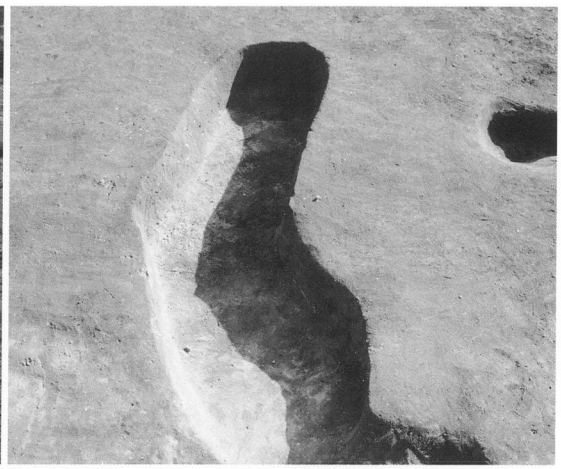


M６号溝状遺構遺物出土状況

M６号溝状遺構遺物出土状況

図版二十

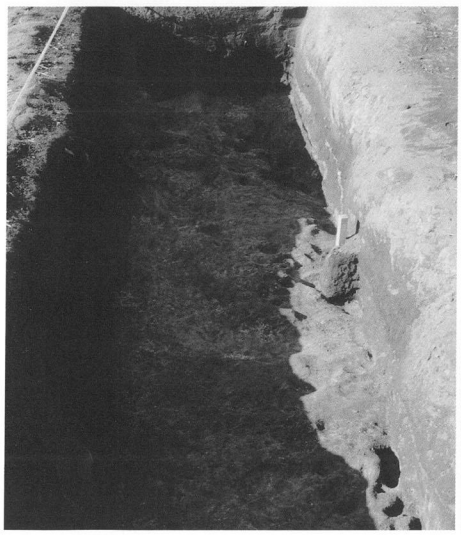
M７号溝状遺構



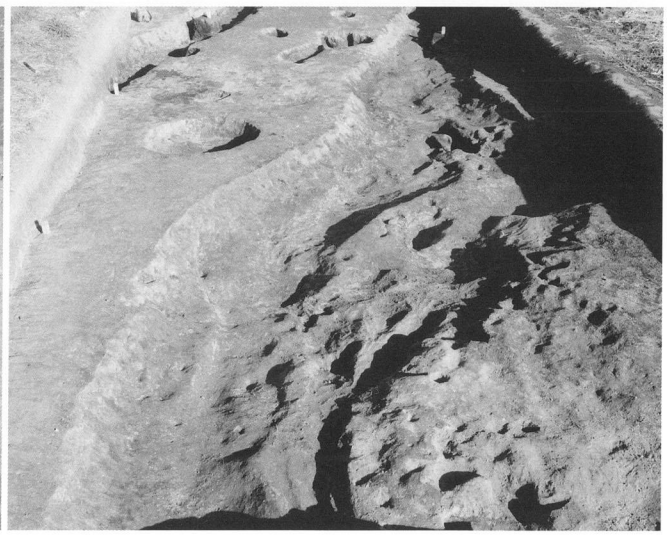
M８号溝状遺構

M９号溝状遺構

M10号溝状遺構



M11号溝状遺構



M12号溝状遺構

5－13（H1）

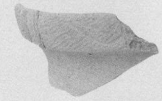
5－8（H1）

5－5（H1）

7－6（H2）

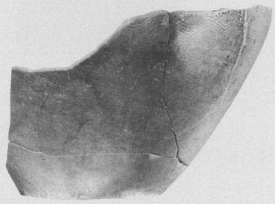
7－1（H2）

11－21（H4）



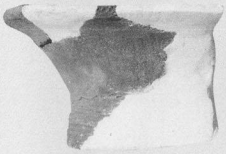
11－13（H4）

10－4（H4）



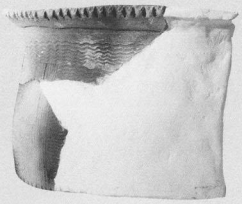
11－19（H4）

11－18（H4）



10－1（H4）

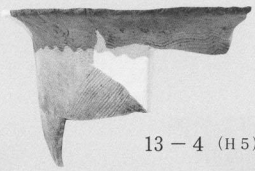
11－12（H4）



11－16（H4）

11－15（H4）

11－11（H4）

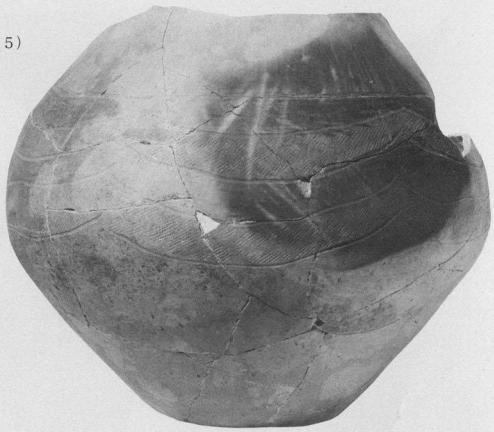


13－4（H5）

10－3（H4）

10－6（H4）

13－5（H5）



13－1（H5）

10－2（H4）

13－7（H5）

図版二十二

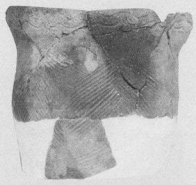
16－10（H6）

15－5（H6）

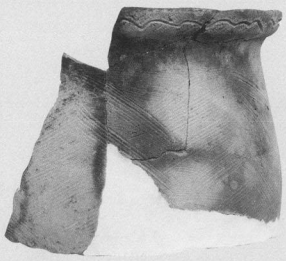
16－9（H6）

15－4（H6）

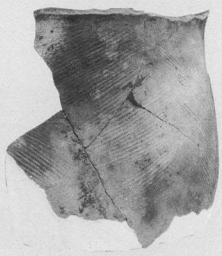
18－3（H7）



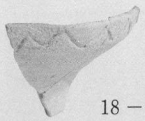
18－18（H7）



18－15（H7）



18－14（H7）



18－3（H7）

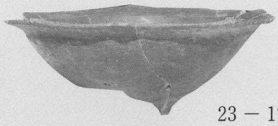
18－8（H7）

18－16（H7）

18－2（H7）

18－6（H7）

18－24（H7）



23－17（H9）

21－4（H9）

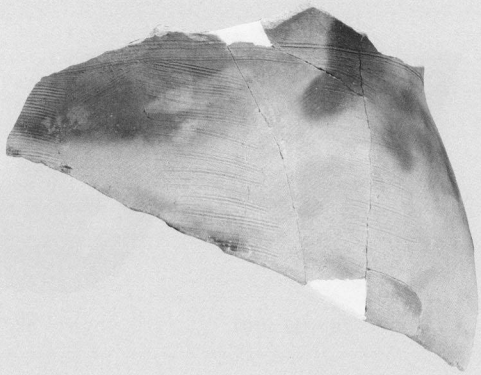
18－19（H7）

18－7（H7）

23－9（H9）

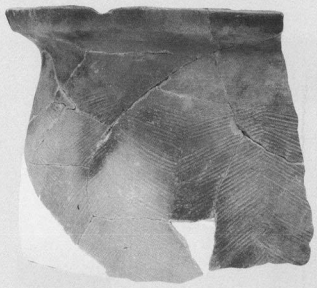
23－10（H9）

23－7（H9）

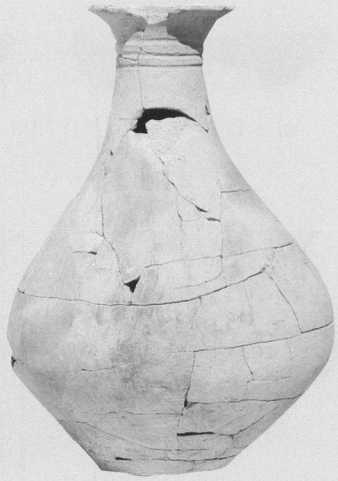


23－8（H9）

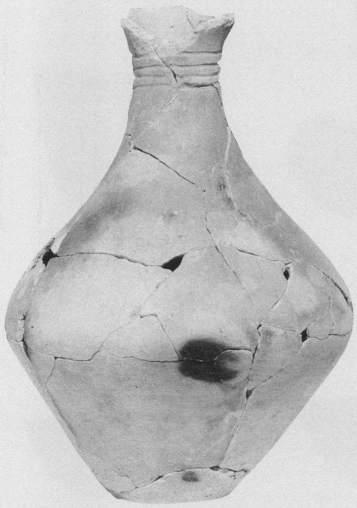
21－3（H9）



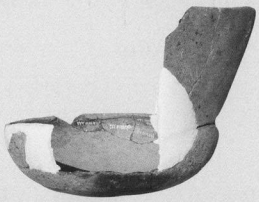
23－12（H9）



21－1（H9）

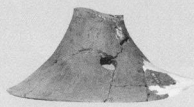


21－2（H9）

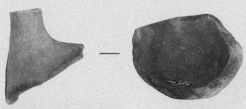


26－16（H10）

26－15（H10）

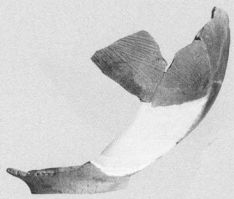


26－18（H10）



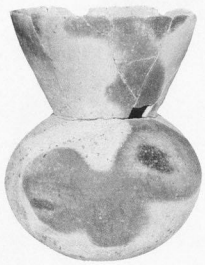
23－16（H9）

25－1（H10）



26－11（H10）

図版二十四



26－17（H10）

26－8（H10）

26－6（H10）

27－13（H11）

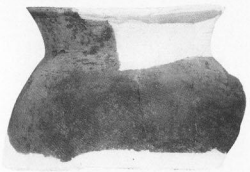
27－3（H11）

27－14（H11）

27－15（H11）

27－2（H11）

27－1（H11）



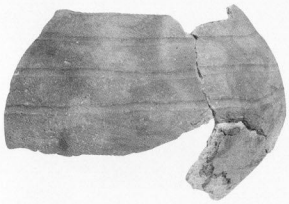
31－1（H13）

34－1（D13）

34－6（D13）

34－3（D13）

34－4（D13）



34－2（D13）

41－1（M1）

41－6（M6）

41－8（M6）

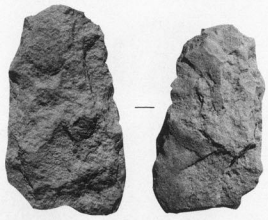
41－7（M6）

41－3（M6）

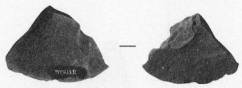
41－4（M6）

41－5（M6）

41－2（M6）



47 − 78（H 1）



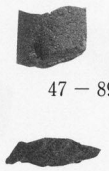
47 − 99（H 1）

47 − 104（H 1）

48 − 105（H 1）

47 − 97（H 1）

47 − 80（H 2）

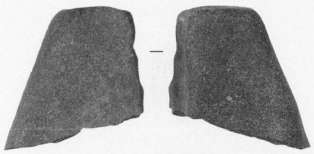


47 − 89（H 2）

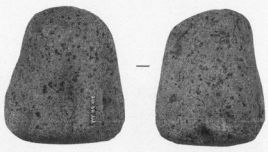
47 − 75（H 2）

47 − 103（H 2）

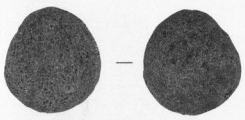
47 − 79（H 2）



47 − 102（H 3）



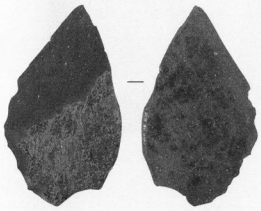
47 − 96（H 4）



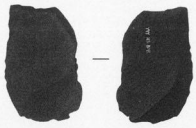
48 − 108（H 4）

47 − 96（H 4）

47 − 100（H 4）



47 − 82（H 4）



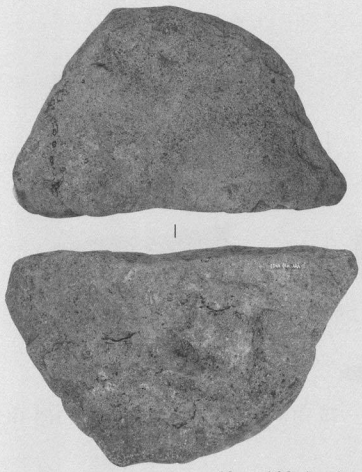
47 − 81（H 5）

47 − 83（H 5）

47 − 77（H 7）

47 − 85（H 7）

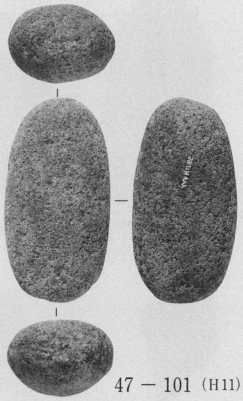
図版二十六



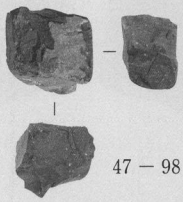
48 − 109 (H10)

47 − 94 (H11)

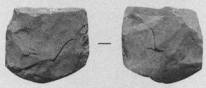
47 − 84 (H11)



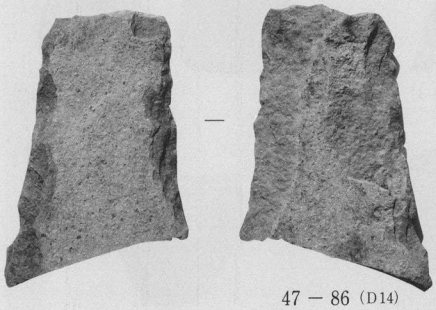
47 − 101 (H11)



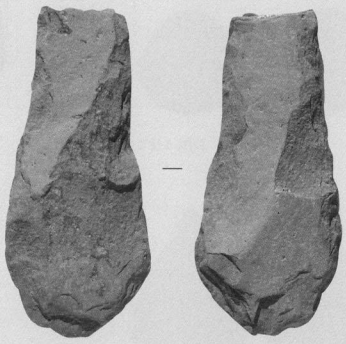
47 − 98 (D14)



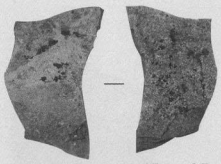
47 − 88 (M6)



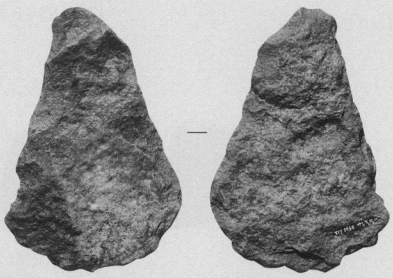
47 − 86 (D14)



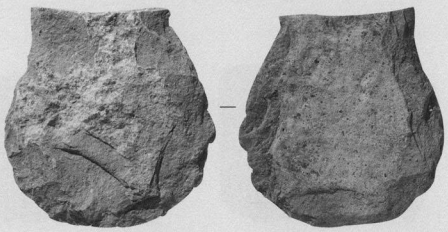
47 − 90 (M6)



47 − 87 (M6)



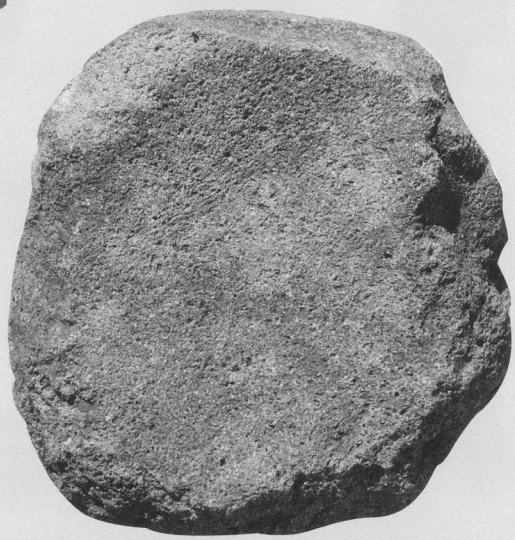
47 − 93 (M12)



47 − 92 (M7)

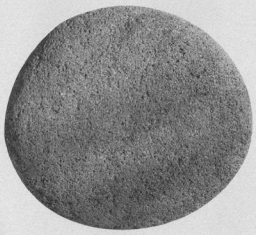
48 − 112 (H 3)

48 − 110 (M 4)



48 − 114 (H10)

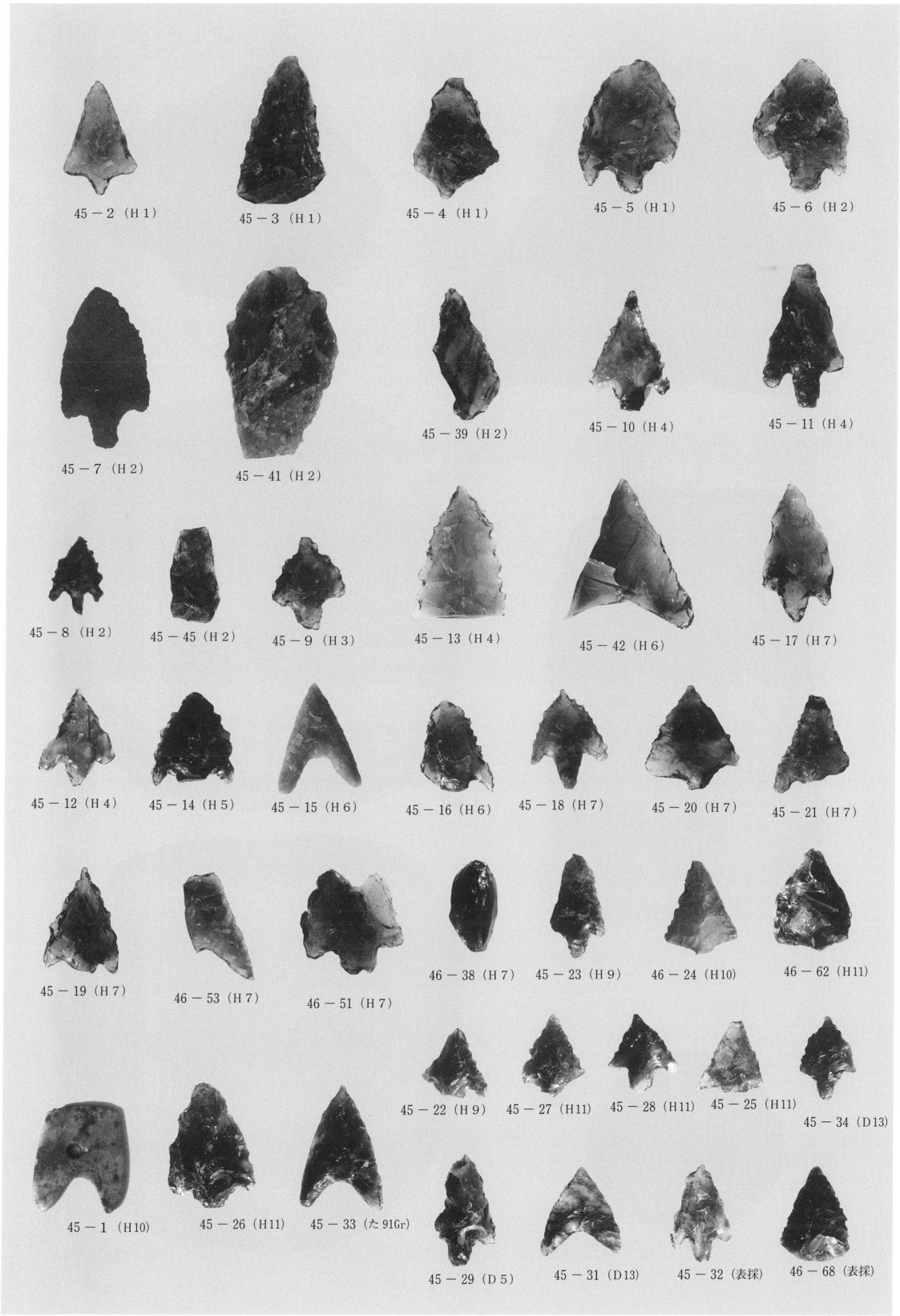
48 − 113 (M 4)



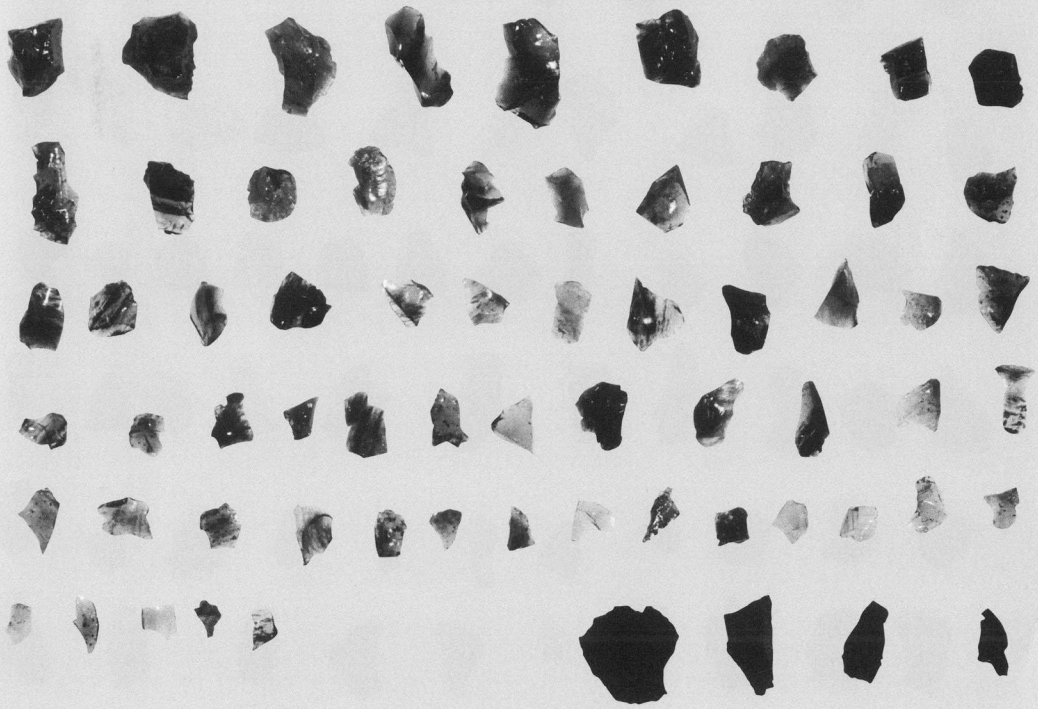
48 − 111 (D 6)

1 : 5

図版二十八


45－2（H 1）
45－3（H 1）
45－4（H 1）
45－5（H 1）
45－6（H 2）
45－7（H 2）
45－41（H 2）
45－39（H 2）
45－10（H 4）
45－11（H 4）
45－8（H 2）
45－45（H 2）
45－9（H 3）
45－13（H 4）
45－42（H 6）
45－17（H 7）
45－12（H 4）
45－14（H 5）
45－15（H 6）
45－16（H 6）
45－18（H 7）
45－20（H 7）
45－21（H 7）
45－19（H 7）
46－53（H 7）
46－51（H 7）
46－38（H 7）
45－23（H 9）
46－24（H10）
46－62（H11）
45－22（H 9）
45－27（H11）
45－28（H11）
45－25（H11）
45－34（D13）
45－1（H10）
45－26（H11）
45－33（た 91Gr）
45－29（D 5）
45－31（D13）
45－32（表採）
46－68（表採）

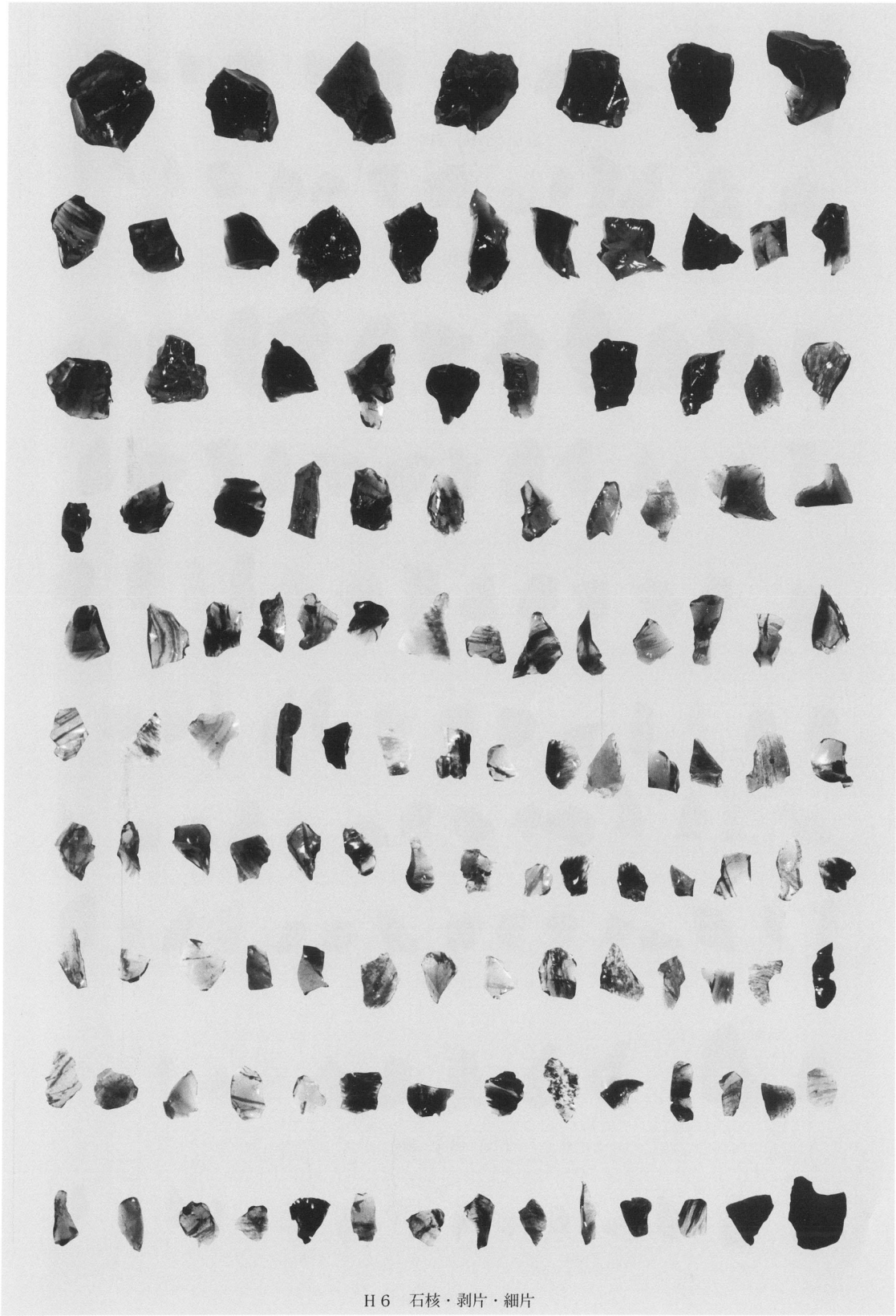
H１　石核・剥片・細片



H２　本核・剥片・細片

H４　石核・剥片・細片

H７　原石・石核・剥片・細片



H６　石核・剥片・細片

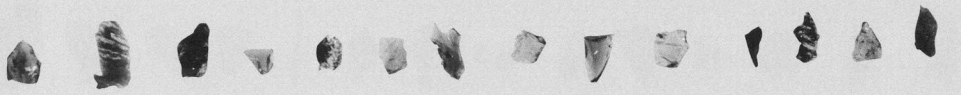
図版三十二

H９　石核・剥片・細片

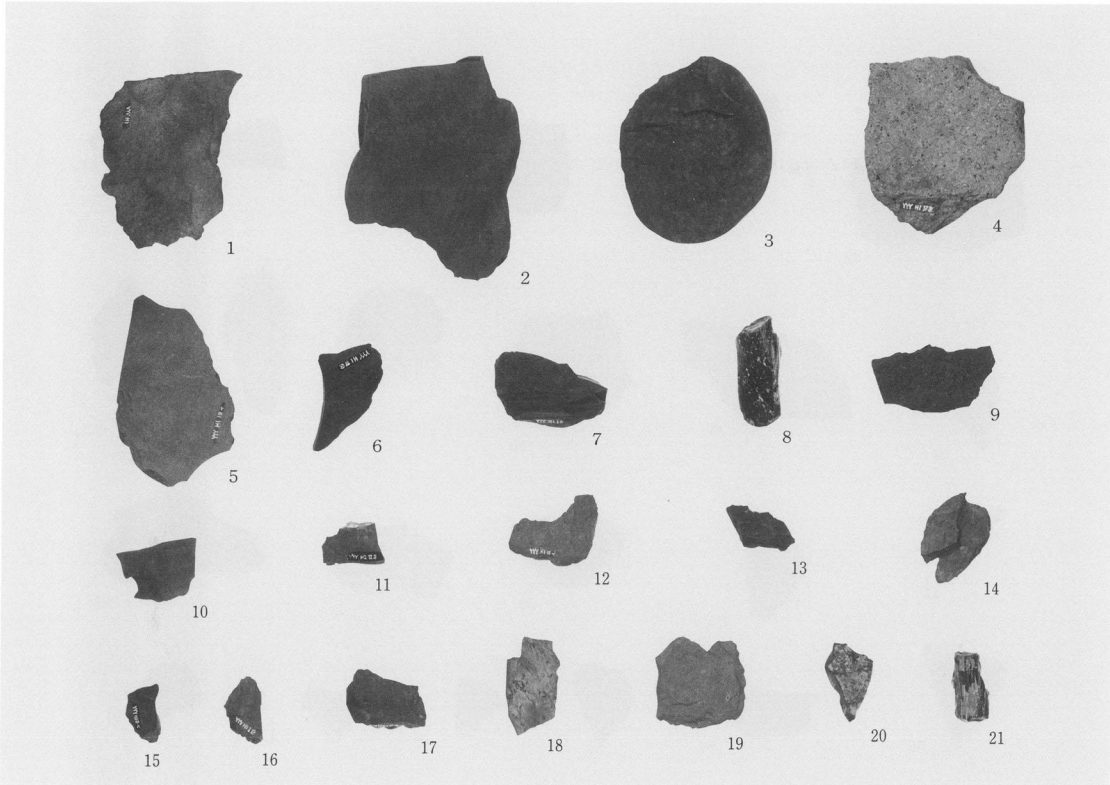
H10　剥片・細片

H11　石核・剥片・細片

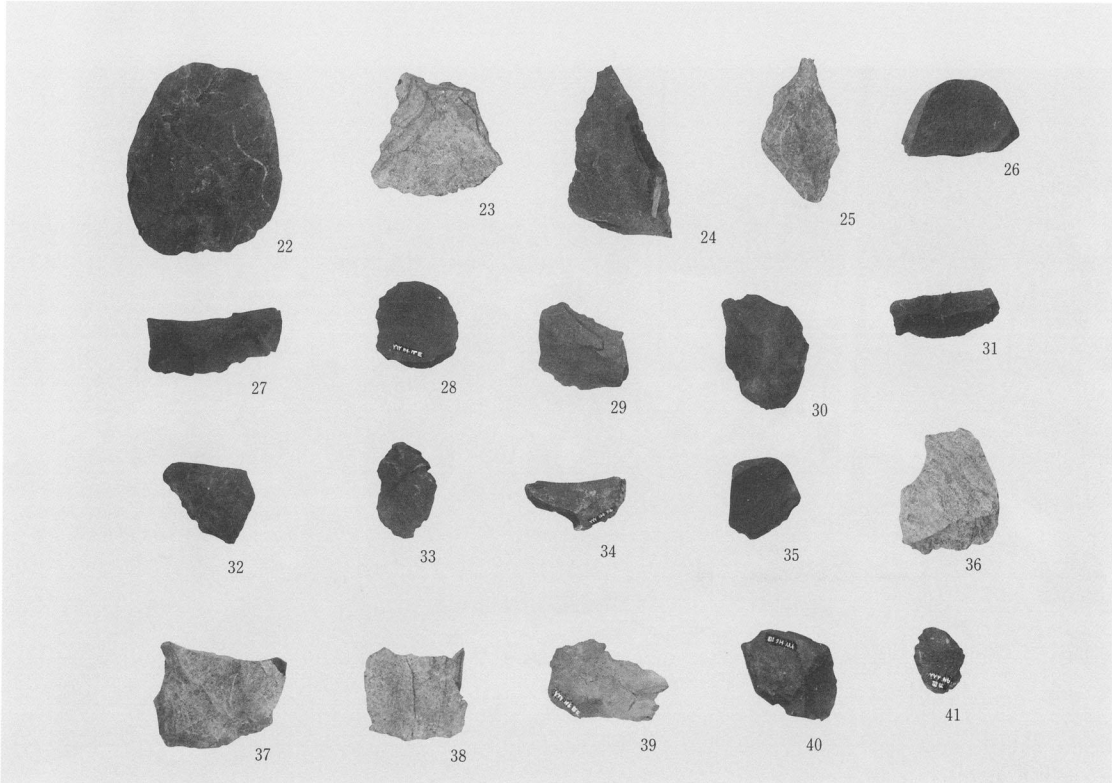
D５　剥片・細片



D13　剥片・細片

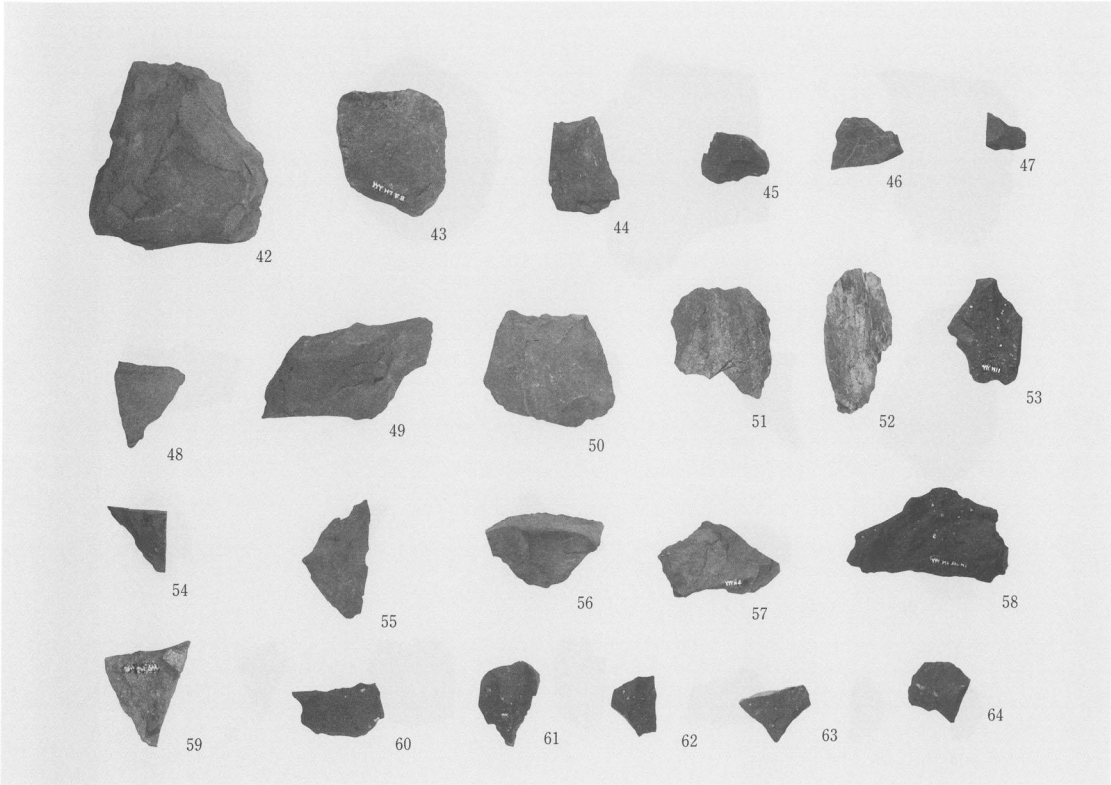


H 1 (1～17) H 2 (18～21) 出土剥片・細片

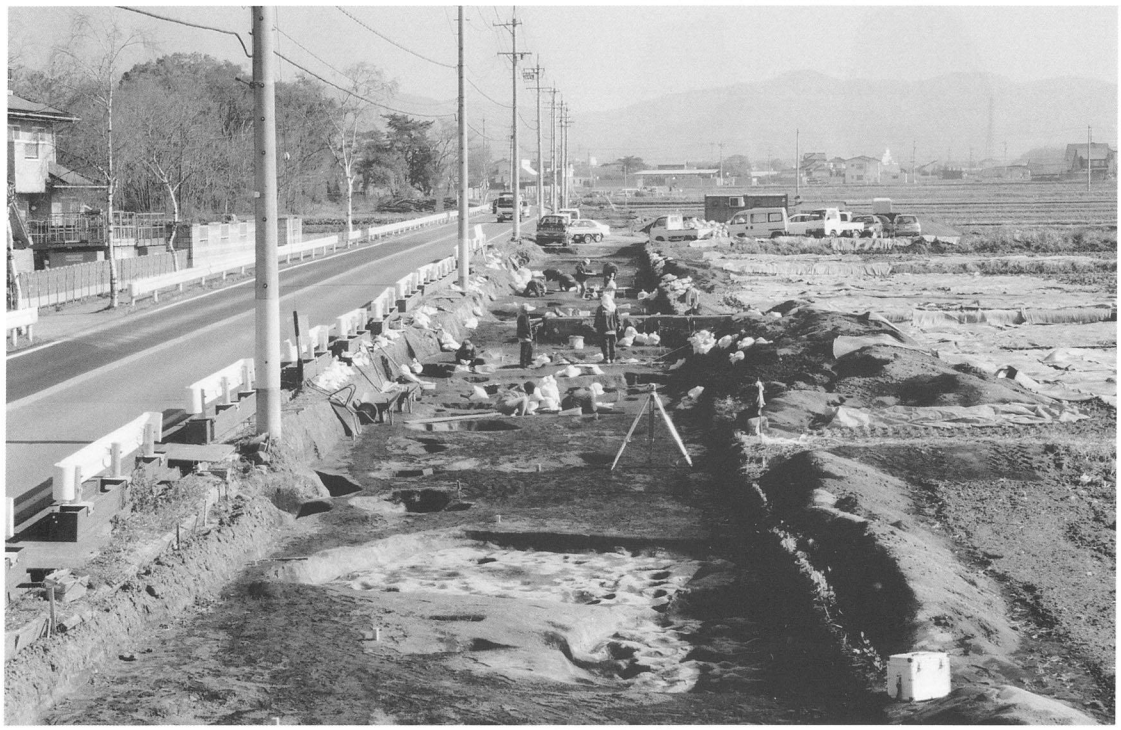


H 4 (22～34) H 5 (35～38) H 6 (39～41) 出土石核・剥片・細片

図版三十四



H７(42～47)　H10(48・49)　H11(50～55)　M１(56・57)　M６(58～64)　出土石核・剥片



調査区西側付近調査風景

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第157集

寄塚遺跡群

寄 塚 遺 跡

2009年３月

編集・発行　長野県佐久市教育委員会

〒385-8501　長野県佐久市中込3056番地

文化財課

〒385-0006　長野県佐久市志賀5953

TEL　0267-68-7321

印 刷 所　株式会社　佐久印刷所

報告書抄録

書名	寄塚遺跡群寄塚遺跡
ふりがな	よせづか　よせづか
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第157集
編著者名	林　幸彦
編集・発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2008.3.19
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市志賀5953
遺跡名	寄塚遺跡群寄塚遺跡（YYY）
遺跡所在地	佐久市横和555-7他
遺跡番号	231
経度	36°-15-18-（世界測地系）
緯度	138°-27-02-（世界測地系）
調査期間	2005.10.17～2005.12.26（現場）
	2006.7.13～2008.3.19（整理）
調査面積	1,598㎡
調査原因	道路改築事業
種別	散布地
主な時代	弥生時代～平安時代
遺跡概要	遺構　竪穴住居址13軒（弥生～古墳）　掘立柱建物址6棟　土坑17基　溝状遺構12条他 遺物　弥生時代中期土器・土師器・須恵器・土製品・石器・石製品
特記事項	資料の少ない古墳時代前期後半の集落、弥生時代中期後半の石器製作の場も考えられる集落が検出された。